魔法少女リリカルなのは 黒衣の死神

赤黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　黒衣の死神

【Ｎコード】
Ｎ８２３０Ｓ

【作者名】
赤黒

【あらすじ】
プロジェクトＦ計画が始まるもっと昔、過去の英雄達をクローンとして蘇らせようという計画、プロジェクトＪ（ジョーカー）によって生まれた命があった。
というシリアスな生まれをしているはずだったのに、シリアスに一番遠い性格をした主人公。
この物語は、シリアスとは無縁で『めんどくさい』が口癖の主人公
ユウ・クロサキがめんどくさがりながら中途半端に原作と関わっていく物語

死神の始まり（前書き）

処女作です。
小説のしの字も知らない超初心者ですが、よろしくお願いしますm
（＿＿）m
２０１１年５月２９日修正

死神の始まり

とある研究所。ここではある研究が行われていた。その名は「プロジェクトJ（ジョーカー）」
これは、過去の英雄を現代に蘇らせようと、英雄のクローンを造り出す研究。

しかしこの研究が成功した瞬間、研究者達はその成功体に殺され、
この研究所には成功体が一体しかいない

「めんどくさいのは嫌いだから単刀直入に言うわ。
私の者になりなさい」

「めんどいから他を当たってくれ」

この会話から黒衣の死神の話はスタートする。一人の女性の犠牲を対価によって……

死神の始まり（後書き）

次回は第二の主人公が登場します

もう一人の主人公（前書き）

連続投稿2

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様感想ありがとうございます！

２０１１年５月２９日修正

もう一人の主人公

俺の名前は剣崎　相馬。今日秋葉原にいってなのはの最新作ゲームを予約したりした帰り、にトラックにひかれたてしまったハズなんだ

うん。もう現実逃避はやめよう

「ここは何処だ～！」

気がついたら一面真っ白な空間でした

「たしか、俺死んだんだよな。」

うん。それだけは確実に言える。逆にあれで生きてたら、俺なにもんだよ

すると、目の前に女の人が現れたので若干ビビりながらも、ここが何処だか聞くために質問したのだが

「あの～、こk」

「すいませんでしたー！」

先に見事な土下座をされた。

「え～と、貴方は神様で書類に飲み物をこぼし、俺が死んでしまったと。」

「はい！それで、すみませんが貴方がここにいると不味いので転生させて、輪廻の輪を元に戻させてください」

「はぁ。それで、俺はどの世界に転生されるんですか？」

「え～と、『魔法少女リリカルなのは』と似た世界ですね」

「マジですか！」

リリカルキター

「それでですね　貴方を死なせてしまったお詫びに、４つ特典を選ぶことができるのですが、どうしますか？」

「それじゃあ、『魔力をＥＸランク』と『Ｆａｔｅ　荷出てくる能力全部』と『アニメ、漫画、小説に出てくる魔眼（デメリット無し）全部』と『インテリジェントデバイスとユニゾンデバイスを一つずつ』でお願いします」

「はい分かりましたでは体のサイズを9歳にしておきましたので」

「あ、どうもスミマセン」

9歳じゃないと原作キャラに関わりずらいからね

「設定が終わりました。　本日は本当に申し訳ございませんでした」

と神様が言うと、俺の立っていた地面に穴が空いた。

「え、ウソー」

重力に従って落ちていく俺の耳に神様から

「穴はいきなりあくから、気をつけて下さいね」

神様　言うの遅いですよ

某幻想殺しの様に落ちながら叫んだ。

「不幸だーーー！」

本来、交わることのなかった死神と転生者。この二人がこの世界に関わることでどう変わっていくのだろうか。

もう一人の主人公（後書き）

次回はユウ・クロサキのプロフィール紹介です

プロフィール1（前書き）

連続投稿3

まだまだ逝きますよ

プロフィール1

主人公プロフィール

名前　ユウ・クロサキ

年齢　??

身長１８２ｃｍ

髪色　金髪を肩にかかるくらいに伸ばしている

瞳　翡翠

ユニゾンすると髪が金色、瞳が深紅になるが、ある条件を満たすと
左目が深紅に、右目が翡翠になる

容姿　中の上くらい

魔力光　漆黒

変換資質　風　闇

性格

口調　いつも（めんどくさい）と言っている

知能　ハーバード大卒いわゆる天才

趣味　ロストロギア解析　本人曰く（いい暇潰しになる）らしい

特技　家事。しっかりやっていないと落ち着かないとのこと

嫌いな性格　中途半端な偽善者

好きな食べ物　チョコレート。持ってないとすぐにキレる

弱点　凄い方向音痴。ジェラスがいないと目的地に着けず、自分一人で目的地にたどり着いた事は無いが、本人にその自覚が無い

デバイス

質量兵器型デバイス・ジェラス

女性人格

普段は指輪の姿をしている

戦闘時　使いたい力や相手によって４つの武器になる。しかし、質量兵器を元としているため一部を除き非殺傷設定には出来ない
このデバイスは特殊で武器ごとに特定の動作をしなければカートリッジを使えない

ファーストモード　双剣

手数に特化し主人公は、このモードをよく使う　一度双剣を軽く振ってカートリッジを使う

セカンドモード　居合い剣

速さに特化したモード。しかし、いちいち鞘に剣を納めなければいけないため、ベルカ式にはあまり使わない　一度鞘に剣を納めてカートリッジを使う

サードモード　銃

リボルバータイプの銃で、ジェラスのモードで唯一非殺傷にする事ができる為、ファーストモードの次にこのモードを多く使う　この銃はカートリッジをそのまま弾丸として使う

ファイナルモード　鎌

本気の時以外使われないモード　この武器はカートリッジを使えず自分の魔力を吸いとることでモードを維持する　吸いとった魔力をそのまま斬撃として飛ばすことができる

性格

主人公のことをマスターと呼び礼儀正しい性格。
しかし、めんどくさがりのユウに弄られることが多い

プロフィール1（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんな訳でユウのプロフィール紹介でした

相馬
「なあ作者。俺の出番は？」

赤黒
「……次回では相馬のプロフィールを出します」

相馬
「おい。今完全に俺の事わすれてたよな！」

赤黒
「ソ、ソンナコトナイヨ」

相馬
「あ〝あ〝！」

赤黒
「やめて～。エクスカリバーを持ちながらそんな声出さないで！」

相馬
「まぁいい。それで次はいつ投稿するんだ？」

赤黒
「え～と。……未定？」

相馬
「ブチッ。真名解放約束された勝利の剣（エクスカリバー）」

ウギャーー

相馬
「それでは次回の「黒衣の死神」をお楽しみに」

ガクッ

相馬
「ふぅ。逝ったか」

プロフィール2（前書き）

本日最後の投稿です。　A→S様、ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様感想ありがとうございます。

２０１１年５月３０日修正

プロフィール2

もう一人の主人公プロフィール

名前　剣崎（けんざき）　相馬（そうま）

年齢（無印開始時）
９歳

身長　１５５ｃｍ

髪の色　質のいい黒

瞳の色　蒼色

容姿　よくスカウトに声をかけられるくらいのイケメン

魔力光　濃い水色

能力　Ｆａｔｅに出てくる能力とアニメで出てくる魔眼の全て

性格

口調　上条　〇麻さんの不幸を無くした様な口調

知能　アリサ以上ユウ未満

趣味・特技　料理とお菓子作り

好きな食べ物　甘いもの

嫌いな食べ物　特に無し

相馬のデバイス

インテリジェントデバイス　レイナ

女性人格

普段は相馬の腕輪として待機している

戦闘時　相馬の能力に非殺傷設定を着けたり結界を張ったりとサポートに使われる

性格

レイジングハートのとは違い、マスターが無理をしようとしたら、無理をさせない様な性格。喋り方は相馬を「主」とよび、少し古くさい喋り方をする

ユニゾンデバイス　アクア

リィンと同じくらいの大きさ

見た目　髪の蒼いイン〇ックス見たいな容姿

相馬とユニゾンすると、髪の色も蒼くなり水分を操ることが出来る

ようになる

性格

相馬にデレデレで、何時でも甘えてくる　が、他の人には、人見知りして、あまり信用しない

プロフィール2（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「今日ラストの投稿、終了しました。」

アクア　「作者さんお疲れさま」

赤黒
「ありがとうアクアちゃん。それじゃあ簡単に自己紹介をお願い」

アクア
「はーい　名前はアクアで相馬のユニゾンデバイスをやっています。好きな人は相馬と相馬とあと相馬です！」

赤黒
「本当にアクアちゃんは相馬が大好きなんだね。」

アクア　「うん。そうだよ」

赤黒

「それZ」

アクア　「いま、相馬に呼ばれた気がする。という訳で作者さん悪いけど私帰るね」

赤黒
「今日更新頑張ったのに誰も誉めてくれなかった」

アクア　「あ、忘れてた忘れてた」

赤黒
「アクアちゃん俺の為に」

アクア　「次回も「魔法少女リリカルなのは　黒衣の死神」よろしくお願いします。じゃあね作者さん　相馬～」

赤黒
「グスン（泣）」

死神　海鳴の地へ立つ（前書き）

最新話を更新します。ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様感想ありがとうございます。やっと原作に入れました

死神　海鳴の地へ立つ

ーユウSideー

ここは、ある森の中ここに一人の男が入ってきた。

≪海鳴に来るのも久しぶりですねマスター≫

「そうだな。ところでジェラス、お前が言っていた怪しい魔力反応ってここら辺か」

≪はい　この辺りにあるはず何ですが、あ、ありましたマスター。マスターの足元ですよ≫

「この宝石みたいなのか。うし、ジェラス封印よろしく」

≪了解　ロストロギアを解析、　完了　ジュエルシード封印≫

そういって道に置いてあったジュエルシードを、まるで何事もないかの様に、封印した。

≪封印成功しました。
このロストロギア正式名称ジュエルシードは、触れた生物の願いを強制的に叶えさせる機能が着いています。しかし、このロストロギア自体の魔力は不安定なため、強すぎる願いに反応すると暴走し、次元震が起きるなんとも中途半端なロストロギアですね≫

「はいはい。長ったらしい説明ありがとうジェラス。んでこのロストロギアはなんで地球に落ちてあるんだよ！ここは管理外世界のハズだろ」

≪さぁ？そこまではさすがの私でもわかりませんね≫

「まあいいや。それで約束の時間まであと何分だ？」

≪マスター。何分ではなく何時間ですよ。約束の時間はひるの1時なのに今は、朝の7時ですよ。≫

「うっさいな。昨日急ぎで、何でも屋『ホーク』に依頼が来たんだから仕方ないだろ」

そう。ユウは自分で経営している何でも屋『ホーク』に、昨日急ぎの依頼が入り、徹夜で仕事をしていたのだ!!

「と言う訳で時間になったら起こせよ。　滅すは“音”纏うは“耳”」

と言って寝始めた。

≪マスター、ひどいです。しかも『消滅の闇』まで使うなんて≫

ユウが使った『消滅の闇』とは、消滅させたいものを言い、その闇をどうするかを選ぶ

例えば、今使ったのは、　滅すは“音”纏うは“耳”
これは、静かに寝たいので、滅すは“音”で、音を消滅させる闇を創り、纏うは“耳”で、耳に入ってきた音を消滅させる　そんなことができるレアスキル　それが変換資質の闇なのである

「説明がなげぇよ」

≪マスター。起きてるんですよね。寝たフリですよね≫

「ｚｚｚｚ～」

≪ショボーン≫

こんなやり取りをしていたために、きずかなかった。この森あたりに結界が張ってあったこと。そして、　このジュエルシードを見つけたのは自分達だけでは無いことに

死神　海鳴の地へ立つ（後書き）

後書きコーナー

ユウ
「ｚｚｚｚ（眠）」

赤黒
「ユウはまだまだ起きそうにないため、相棒のジェラスに来て貰いました」

ジェラス
「よろしくお願いします。マスターの変わりを精一杯頑張らせて頂きます。」

赤黒
「それでは、ジェラスには、ユウのレアスキルの説明を」

ジェラス
「はい！まず、マスターには変換資質が二つありその二つを分けて戦います。」

赤黒
「では簡単にユウの変換資質の説明を」

ジェラス
「まず、風は自分に流れている魔力を、風で纏い身体強化と、武器に風を纏わせるという使い方。
闇は本文の様に体に纏わせるのですが、戦いの時は基本的に、魔力を消滅させる　ことが多いですね。」

赤黒
「……　魔導師にとって天敵だね」

ジェラス
「ではこの辺で次回　も」

赤黒&ジェラス

「リリカルマジカル頑張ります」

ユウ
「（―_―）ｚｚｚ」

赤黒
「なあ　この小説の主人公ってユウだよな」

ジェラス
「……ノーコメントでお願いします。」

ようやく原作キャラ登場！（前書き）

Ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様　感想ありがとうございます。
それではお楽しみください。

ようやく原作キャラ登場！

ーフェイトｓｉｄｅー

「アルフ。あの森の中に、ジュエルシードはあるんだよね」

そう言いながら現れたのは、金髪によく似合う黒いバリアジャケットと、同じく黒い斧状のデバイスをもった少女だった。

「ああ。それにしても、こんなロストロギアを娘に集めさせるなんて、あの鬼婆何考えてるんだい」

その少女と一緒に飛んでいるのは、茜色の髪の毛に、獣耳と尻尾をもった使い魔。

主人である少女の母親の事を嫌い、何時も乱暴な口調になる使い魔を少女が、

「そんな言い方しないでって何時も言ってるでしょうアルフ」

「分かったよ。じゃ、さっさと回収して帰ろうフェイト」

と注意する。

こんな何時もの会話をしながら少女フェイトと使い魔アルフは確実にジュエルシードのある場所に向かっていく。

ーージェラスｓｉｄｅー

不味いですね。管理外世界だから油断していましたが、魔導師に狙われていますね。

≪マスター。起きてください。ここに魔導師が近づいて来ます。マスター?。　起きてくださいよマスター!。本当に不味いですから≫

と、頑張って主人を起こそうとするが、一向に起きる気配が無く、ついに

「その宝石を渡してください。」

ユウ、起きる気配無し。

―フェイトｓｉｄｅ―

「あの寝ている人からジュエルシードの気配がする。」

ジュエルシードの気配をたどってくると一人の青年がいた。

「アルフ」

「あいよ！」

その短いやり取りでジュエルシードを青年から奪う事を決め　青年に近ずいた。（ごめんなさい）と謝罪しながら

「その宝石を渡してください。」

ージェラスｓｉｄｅー

どうしましょう。魔導師が来てしまいました。魔力量や立ち振舞いから中々の腕だとは思いますが、こうなったら念話で

《マスター。起きてくださいマスター！》

と、念話で起こそうとすると

「《なんだよジェラス。うるせぇな。ぶっ飛ばすぞ、このやろう！》」

起こすことには成功したが、寝起きなため、明らかに不機嫌になっていた。

《マスターが持っているロストロギアをねらっている魔導師です》

「《あっそう。じゃあ取り合えず》消滅を解除っと」

と、音を消滅させていた闇を解除して、敵の魔導師を見て、最初に思った感想を言った

「誰？」

ーユウSideー

俺が疑問に思っていると金髪の少女の使い魔（多分）が話しかけてきた

「あんたら　見たところ魔導師みたいだけど、私のご主人様に敵うわけないんだから、痛い目見ない内に、ジュエルシードを渡しな」

と挑発してきた。いや、この使い魔にとって、今の台詞は人が二本足で歩く位、当然と思っているのだろう。
しかし、それは彼以外に言うべきであった

「ジェラス。ファーストモードでセットアップ。コイツら……　刈り殺す。人の睡眠邪魔しやがって！」

彼女たちは触れてはいけない死神の逆鱗に触れてしまった。

ようやく原作キャラ登場！（後書き）

と言う訳でやっと原作キャラが出てきました。
次回は連続で投稿したいと思います。
とりあえず次回は、軽い戦闘になると思いますので

死神　始めての戦い？（前書き）

連続投稿です。
戦闘描写って意外と難しい。

死神　始めての戦い？

ーアルフｓｉｄｅー

私があいつにジュエルシードを渡すよう言った瞬間、あいつが纏っていた空気が変わった。狼だったからこそ解る空気

殺気

こいつヤバイ

「フェイト！」

「うん。　ランサー、セット！」

そう答えながら射撃魔法を形成する中あいつが何かを呟いた

ーユウsideー

俺がジェラスをセットアップする中、殺気を放ったら　一気に射撃
魔法を形成した。
だが悪いな

「滅すは“魔力”纏うは“体”」

俺に魔法は効かないんでね

ーフェイトsideー

彼が何か呟いたけど私には関係無い

「ファイアッ！」

彼がセットアップする前に、プラズマランサーで攻撃した。少しズルいけど仕方ないよね。
私がそう思って彼に近ずこうとすると

「いい攻撃するじゃねぇか。使い魔が大口叩くだけの事はあるな」

そう言いなら消滅の闇を解除し、セットアップした姿で言ってきた。

ーユウｓｉｄｅー

全体的に黒を使ったズボンと薄いインナーと漆黒のマント。（ブラック・キャット、クロノナンバーズ時代のトレインをイメージして下さい）そして、ファーストモードの双剣を逆さに持つ　これがユウの構えなのだ

「めんどくさいが「滅すは“魔力”纏うは“剣”」

と消滅の闇を剣に纏わせ

「ジェラス。あいつが打ち合うんだったらファーストを維持。はなれるんだったらセカンドに変えろ」

≪了解しました。マスター≫

そう言うと、真っ直ぐフェイトに向かっていった。

ーフェイトｓｉｄｅー

とりあえず、近距離戦闘で隙をついて離れようと考え
近ずいてくる彼に自分も近づいてサイズモードにしたバルディッシュを振った。

「ハァッ」

「ほいっと」

分かったことが一つだけあった。

彼は、真面目に戦っていない。

まるで打ってくる場所が分かっているように、双剣で攻撃を受け流され、隙が出来ても、そこをついてこない。まるで、稽古を受けているようである。何十回目の打ち合いの後　いきなり後ろに下がった。
私が身構えると、予想外の答えが返ってきた。

「飽きた」

「へ？」

「はぁ。どういう意味だい？」

あ、アルフいたんだ

死神　始めての戦い？（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「終わった～！」

ジェラス
「お疲れさまでした。」

ユウ
「予想以上に下手な戦闘描写だったな」

赤黒
「仕方ないじゃないか。戦闘描写って始めてだったんだから」

ジェラス
「まぁまぁ二人とも落ち着いて下さい」

赤黒&ユウ
「「ちっ」」

ジェラス
「はぁ。そう言えばマスターの変換資質の詳しい説明をしてほしいとの感想を戴いたのですが」

赤黒
「では」

変換資質　闇
これは普通の変換資質みたいに属性を纏わせる物ではなく、自分が選択した物を全て滅する力
しかし、一つしか選ぶことができず、魔力を纏わせている間は、バリアジャケットを着る事が出来なくなるデメリットがある

ユウ
「バリアジャケットが使えないのは辛んだよな～」

ジェラス
「では、次回の話も」

赤黒&ユウ&ジェラス
「「「お楽しみに」」」

死神と少女の自己紹介（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様、感想ありがとうございます。
新しい設定を

普通の会話
「」

思考
（）

念話
《》

技の名前（真名解放）〈〉

としました。

死神と少女の自己紹介

ーユウｓｉｄｅー

あれ、俺なんか可笑しいこと言ったか？

≪言いましたよ≫

ジェラス、勝手に人の考えを読むな

俺の言いたいことが分かったのか、少女が

「あの。飽きたってどういう意味ですか　？」

と質問してきた。

「そのままの意味だが？」

「？？？？」

何か頭に？を浮かべていると

≪仕方ないですね。ここは私が説明しますよ≫

ジェラスが変わりに説明するみたいだなまぁ。めんどくさいから任せるか

「じゃあ、任せるわ」

≪めんどくさいだけでしょう？≫

「な、ナンノコトヤラ」

何故バレた？まさか顔に出てるのか。それとも……ブツブツ……

ージェラスｓｉｄｅー

≪マスターの事は無視して良いですからね≫

「じゃあ、さっきの飽きたってどういう事ですか？」

≪あれはですね最初は自分が貴女に劣ると言われたことに怒ってたんですが、時間が経ってめんどくさくなったからだと思いますよ≫

「じゃあ、最初にフェイトが放った魔法をどうやって回避したんだい」

≪それはですね、マスターの変換資質　闇の能力を使ったからですね」

「「変換資質　闇？？」」

≪ええ。詳しい説明は省きますが、分かりやすく言えばマスターが選択した物を全て滅する力ですね。
最初のは、魔力を選択した為に、魔法が効かなかったんですよ≫

「そんなデタラメな力があるのかい！？」

「デメリットもデタラメだがな」

おや　復活したんですねマスター。

ーユウｓｉｄｅー

「一つは　二つ以上対象に選択出来ないんだよな、この力」

「それだけなら」

「もう一つは、魔力を選択している間はバリアジャケットを着る事が出来なくなるんだよ」

「なんだいそれは。致命的じゃないか！」

そうなんだよ。このデメリットが無ければ使いやすい力なんだけどな

「それはそうと、お前ら名前は？」

「言うと思っているのかい？」

だよな。そう言うと思ってたよ。だけどな

「教えてくれたらこのジュエルシードをあげようじゃないか！」

「本当ですか！？」

食いついた。まだまだ子供だな

《いいんですか、マスター？》

「《いいのいいの。そこまでしてまで欲しい訳じゃないからな》」

と、念話で話していたら、少女がこっちを向いた。どうやら自己紹介をするみたいだな。

「私は、フェイト。そして、こっちが」

「アルフだよ。さっきは悪かったねぇ」

「フェイトにアルフか。フェイト、下の名前は？」

「“テスタロッサ”です。」

「（“テスタロッサ”だと！？）　俺の名前はユウ・クロサキ。そして」

≪マスターのデバイスのジェラスです。よろしくお願いしますね。フェイト様。アルフ様≫

それにしても“テスタロッサ”か　良いこと考えた！ク、ク、ク

≪完全に悪人の顔になってますよマスター≫

は、危ない危ない。

「とりあえず、ジュエルシードを渡す前にフェイトのお母さんに会いたいんだか？」

「！？　母さんに何の用ですか？」

俺がフェイトの母親の話をした瞬間、俺の事を警戒しだした。

「そんなに警戒するなよ。フェイトのお母さんとは個人的に知り合い何だよ」

「そうなんですか？」

嘘はいっていない。フェイトの母親、プレシア・テスタロッサとは確かに“知り合い”だ。

あっちが覚えているかは知らないがな。

「どうでもいいけど、行くんだったら早くいこうよ」

あ、忘れてた。

「ちょっと待って」

そう言いながら、ある人に電話をかけた

「はいもしもし」

「俺だよ。ユウだ」

「ユウか。一体どうしたんだ?」

「実は、急な仕事が入ってきて、今日は行けなくなっちまったんだよ」

「そうか。楽しみだったんだが仕事なら仕方ない」

「悪いな。また今度によらせてもらうよ」

「期待しないで待っているよユウ」

「ああ。じゃあな。“士郎”」

そう言って電話を切ると、フェイトと一緒に時の庭園へ向かった。

死神と少女の自己紹介（後書き）

後書きコーナー

ユウ
「それにしても、なんで俺はフェイトの母親の事を知ってたんだ？」

赤黒
「その事を含めて、次回説明します。」

ユウ
「ふーん（興味の無い目）」

赤黒
「（そんな興味の無い目で見なくても）」

ユウ
「それでは次回も」

赤黒＆ユウ

「「お楽しみに」」

いざ、時の庭園へ（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様感想ありがとうございます。
今回は戦闘描写はありません。

いざ、時の庭園へ

ーユウsideー

「次元転移、次元座標。
８７６Ｃ　４４１９　３３１２　Ｅ６９９　３５８３　Ａ　１４１３　７７９　Ｆ　３１２５
ーーー開け、誘いの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもとへ」

フェイトが時の庭園の次元座標を唱え、転移が完了した。

「ここが時の庭園かぁ。《ジェラス。ここの座標は？》」

《バッチリ記憶しました。》

「《ナイスだジェラス！》じゃあ、フェイトのお母さんに会いに行こうか。」

「わかってるよ！」

そう言って、時の庭園の中へ、入っていった。

ーフェイトｓｉｄｅー

私は、時の庭園の中を歩いている時に、疑問に思っていたことを聞いた。

「ユウさんは「ユウで良い」　ユウは、母さんとは何時、知り合ったの？」

「詳しいは秘密だけど、そうだなぁ。俺が昔、お世話になった時にな」

「そうなんだ」

母さんが、昔お世話をした人かぁ。

「二人とも、着いたよ」

むぅ。今度、詳しい話を聞きたいな。

ーユウsideー

アルフがそう言って、扉を開けると、プレシアさんがいた。

「フェイト。誰かしら？そこの男は」

「俺ですよ。覚えていませんか？」

「覚えて無いわね」

やっぱりな。仕方ない。

「用はこれだけかしら？これだけなら「プロジェクトＪ」えっ！？」

「フェイト。悪いがプレシアさんと、二人で話したいんだ」

「分かった。じゃあ入り口で待っているよユウ」

「ああ。アルフ、フェイトと一緒に着いていってくれ」

「分かってるよ！」

そう言い残して、二人は出ていった。

「さて。俺の事を思い出しましたか？」

「思い出したわ。それで、私に何のようかしら？」

「簡単ですよ。俺を雇って欲しい。それだけです」

「それで、私のメリットは？」

「ジュエルシードに関しての不干渉、そしてジュエルシードを集める時の戦力アップ。」

「それで、貴方のメリットは？」

「成功時の報酬、そして、ある組織の情報」

「・・・いいわ。貴方を雇いましょう。それで、その組織の名前は？」

「それは・・・・・」

ーフェイトｓｉｄｅー

私はユウさんに言われて、時の庭園の入り口まできた。

「それにしても、あいつがまさかフェイトの母親と知り合いだったなんてね」

「そうだね」

それにしても、私を見たときのユウ、寂しそうだった。

「フェイト。あいつは信用出来るのかい？」

「分からないけど、私は信用したい」

何でこんなこと思うのか分からないけど。

私がそう思っていると、ユウが帰ってきた。

ーユウｓｉｄｅー

プレシアさんとの交渉が終わって時の庭園の入り口に向かっていった。

≪マスター。プレシアさんは何故ジュエルシードを集めるんでしょうね。もしかした「ストップ」マスター？≫

「ジュエルシードに関して不干渉を決めただろジェラス」

≪・・・・了解しました。マスター≫

「この仕事は信用が第一だからな。お、入り口が見えてきた。」

そうして、フェイト達と合流して、一緒にジュエルシードを集める事を二人に説明した。
アルフ

「そうかい。じゃあよろしくね、ユウ。フェイトの事を頼んだよ」

「わかってる。二人は俺にとって、家族みたいなものだからな」

「・・・あの、それじゃあ、お、お兄ちゃんって呼んでも良いですか？／／／／」

「（！！！！）良いよ。じゃあ俺は今から二人の兄貴だな」

この瞬間、プレシアの娘に兄が出来た。

「（それにしてもお兄ちゃんか。嫌なこと思い出しちまったな・・・・・）」

そして死神が時の庭園にいた時間、転生者はと言うと……

「貴方は何者ですか？」

将来の魔王とエンカウントしていた。

「いや、なんでさ・・・・」

いざ、時の庭園へ（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「今回で久しぶりに相馬が登場しました」

相馬
「本当に久しぶりだな。次回からはもっと出れるんだよな？」

赤黒
「ガンバリマス」

相馬
「はぁ。　さて、次回も」

赤黒&相馬
「「お楽しみに」」

転生者の戦いは戦いと書いて“リンチ”と読む（前書き）

更新しました。

ー相馬ｓｉｄｅー

「ってここ神社だったのか！不味い。早く移動しないと」

と言って移動しようとした。しかし、相馬も主人公であるため、隠れられる訳もなく、

「貴方は何者ですか？」

見つかった。

「なんでさ？」

ーなのはｓｉｄｅー

私、高町なのは。魔法少女をやってます　。
異世界からやって来た、フェレットのユーノ君が落としたジュエルシードと言う宝石を集めています。
今日は、神社にジュエルシードの反応があったみたいです。

「なのは、レイジングハートを」

「うん。」

そう言って、レイジングハートをもって頂上まで来た。

「どういうことなの？」

神社に来たら、４つの目を持った、怪物と、蒼髪青眼の男の子が対峙していた。

「《気を付けてなのは！この人は魔導師だ》」

「《そうなの？》」

「貴方は何者ですか？」

ｌ相馬ｓｉｄｅｌ

どうしよう？

≪主よ。口調を変えれば、ばれないのではないか？≫

そうか。その手があったか！

「今は、そんな事をしている場合では無いのではないかね？」

予想通り某Ｆａｔｅの練鉄の英雄です。

「そうだったの。どうしようユーノ君」

何とか誤魔化せたみたいだな。

「まずは、レイジングハートの起動を」

「ふぇ！？起動ってどうやるんだっけ？」

とりあえず原作通りみたいだな。

「ならば、そこのフェレット。早く起動とやらを彼女に教えたまえ。その時間は私が稼ごう！」

そう言って飛び出した。

「《行くぞ！レイナ。アクア》」

「《わかっている。こんな雑魚、さっさと倒してしまえ！》」

「《殺っちゃえ殺っちゃえ！》」

「《怖いからアクア。とりあえず》投影開始（トレース・オン）」

そう言って投影したのは、お馴染みの中華剣　干将莫耶

帝に献上する剣を作るために、鍛冶師干将が作成するが、鉄が上手く固まらず、中々完成しない。

その剣を完成させるために、妻莫耶が神への供え物となるため、炉

の中へ飛び込み、妻が死んだ悲しみを嘆き、鉄をうつことで完成したと言われる中国の名剣

陽剣干将、陰剣莫耶
通称、干将莫耶

その名前に相応しく、怪物の体を切り刻んでいく。しかし、怪物に死の概念が無いのか斬られた所が再生していく。

「まだ準備は終わらんのか！」

「準備終わりました」

やっとか。なのはが準備を終えた瞬間、干将莫耶を投げつける。そして、

「壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」

爆発させた。

「リリカルマジカルジュエルシードシリアル十八　封印」
封印が完了した。

「それで、貴方は一体？」

「なら、その事を含めて近くの公園などで話し合おう」

こうして原作の主人公と転生者は出会いを遂げた。

転生者の戦いは戦いと書いて“リンチ”と読む（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんな訳で、いきなり原作キャラとエンカウントしました」

相馬
「大変だった」

赤黒
「相馬の使う宝具のアイディアが足りない」

相馬
「スミマセンがこの駄作者の為にアイディアを頂けませんか？」

赤黒
「お願いします！」

相馬
「それでは次回も」

赤黒&相馬
「「よろしくお願いします」」

原作キャラとO☆HA☆NA☆SHI（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様感想&プレゼントありがとうございます。
大鎌“宵闇”血染と太刀、紅を頂きました。

原作キャラとO☆HA☆NA☆SHI

―相馬ｓｉｄｅ―

ジュエルシードを封印した後、相馬の力を説明するために近くの公園まで移動しながら、相馬はこれからの事を考えていた。

「（まずは、力の説明だな！）」

「《そもそも主よ。何故正体を隠す必要があるのだ？９才の姿でも良いのではないか》」

「《まぁ、本当は闇の書事件の時まで、正体を隠すつもりだったんだけど。　まあ良いか》」

「《それで、どういう状況なの？》」

「《アクア、俺とレイナの念話を聞いてなかったの？公園に着いたらユニゾンアウトしてくれないか？》」

「《エエ～！嫌だよ！相馬とユニゾンしていると、とっても気持ちいんだよ》」

「《アクア、何かエロいよ。後で何でも言うこと聞くからさ》」

「《じゃあ、終わったら、私の頭撫でてくれる？／／／》」

「《分かった。後で頭撫でてあげるから》」

「《わかった。約束だよ！相馬》」

そうこうしていると公園に着いた。

「それで、貴方は何者ですか？そして、あの力はいったい？」

「ええー。あの力も魔法じゃないの！？」

「うん。あんな魔法、見たことも、聞いた事も無い」

「じゃあ、まずはその辺りの誤解を解くか。セレス。〈モードリリース〉アクア〈ユニゾン・アウト〉」
セレス&アクア

「「モードリリース（ユニゾン・アウト）」」

「中から女の子が出てきたの」

「これはまさか！？」

「そこのフェレットは知っているみたいだな。セレス、アクア。自己紹介」

≪主のデバイスをしておる、セレスだ。よろしく頼む≫

「相馬のユニゾンデバイスのアクアです」

「そして、魔術師の剣崎相馬だ。よろしくな」

「私たかまｔ「知ってる。なのはとユーノだろ！」何で知ってるの？」

「お前らの念話、駄々漏れ何だよ！次からは気を付けろよ」

「ありがとう。相馬君って呼んで良い？」

「ああ良いぞ。俺もこれからなのはって呼ぶから。良いよな？」

「うん！よろしくね。相馬君」

「ああ／／／（これが伝説の〈名前を呼んで〉かぁ～）」

「それで、魔術師って一体？」

「え？魔導師と魔術師って違うの！？」

「まあな。こっちの一般的では、科学で再現出来るものを魔術。それ以外を魔法と呼ぶ」

「「？？？？」」

「（やっぱしこの説明じゃ難しいか）」

「もうちょっと分かりやすくお願いなの」

「仕方ない。まず、これはなんだ？」

そう言って、指から火を出した。

「火かな？」

「火なの」

「正解。だけど、燃やすだけならライターでも良いだろ！」

「確かにそうなの」

「さっきの戦いで出した剣も、最初から剣を持って来て切れば同じだよな！」

相馬が「分かったか？」と聞くとユーノが自分の解釈を答えた。

「なるほど。つまり、過程を抜かして同じ結果が得られるものを魔術、そうじゃないものを魔法って言うんだね！」

「なるほど。よく分かったの」

「まあ、そんなところだ。それで、あの宝石は何だ？」

「あれはジュエルシードと言うロストロギアなんだ」

「ロストロギアっていうのは？」

「私も分かんないや」

「じゃあ、なのはにも説明するよ」

「「よろしく頼む（お願いなの）」」

「それじゃあ説明するよ。ロストロギアって言うのは、……」

「なるほど。長々と説明されたが、要するに、昔滅んだ世界が作ったオーバーテクノロジーって事だな」

「あ、なるほど！分かったの」

「それじゃあ、そのジュエルシード集めを手伝ってやるよ」

「本当なの！？」

「その代わりと言っちゃあ何だけど、お願いがあるんだ」

「「？？？」」

そうして、今一番困っている事を、頼んだ。

「家に泊めさせてくれないか？」

原作キャラとO☆HA☆NA☆SHI（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様プレゼントありがとうございます！」

相馬
「プレゼントは初めてだからテンション上がるな」

赤黒
「プレゼントとして頂いた宝具の設定を紹介します」

大鎌“宵闇”血染
多くの人をこの鎌で殺したという概念から、相手、または自分が傷付く度に威力があがる宝具。

太刀　紅

この太刀が作られた時、釜で焼き、叩けば叩くほど強度が増したという概念から、あらゆる火を吸い取り、吸い取った分だけ強度と威力が増す太刀

相馬
「と言う設定にしました」

赤黒
「次回はいよいよ、二人の主人公が顔を揃えます！」

相馬
「では、次回も」

赤黒&相馬
「「お楽しみに」」

死神と転生者がエンカウント（前書き）

最新話を更新しました。
やっぱり戦闘描写は難しい

死神と転生者がエンカウント

ーユウｓｉｄｅー

「フェイト。今日の夕飯何が良い？」

「じ、じゃあハンバーグ／／／」

「私は肉さえあれば何でも良いよ」

皆さんお久しぶりです。この小説の主人公、ユウ・クロサキです。
今日は妹？のフェイトとその使い魔のアルフと一緒に買い物に来ています。

「ユウが来てから毎日のご飯が楽しみだよ」

「そうだね。アルフ」

そう。この会話で察した人もいるかも知れないが、俺がフェイトの母親と交渉し、フェイトの

「お兄ちゃんって呼んで良い？／／／」発言を終えて、フェイトが住んで居るマンションに入り、冷蔵庫を見たら、なんと水とバランス食料しか入っていなかった。

しかも、フェイトはそれを本気でやっているから、正直呆れた。仕方ないから、その日から食事を作るのは俺の係になった。

買い物が終わった後の帰り道。

「そう言えば、お兄ちゃんって、どんな仕事しているんだっけ？」

「何でも屋〈ホーク〉。猫探しなどの雑用から、重要人の護衛、お金持ちの執事まで、ありとあらゆる対応にお答えします！！。　はい名刺」

そう言って、ホークの内容をテレビショッピング風に説明した後、名刺を渡した。

≪まあ、マスターが〈ホーク〉を開いたのは、ほんの2、3年前ですし、仕事なんて殆ど無いんですけどね≫

「うっせえな。ぶっ壊すぞ、ジェラス」

≪スイマセンデシター！≫↑土下座

「相変わらずだね、ユウとジェラスは」

「あはは」

≪そ、それより明日は、ジュエルシードの反応があった、あの大きな家に向かうんですよね！≫

「誤魔化したな」

「誤魔化したね」

「誤魔化したかな」

「そんな事より≪そんな事ｏｒｚ≫ガッカリすんなよ。ウザイなぁ」

「二人とも、そんな漫才してないで早く帰ろうよ」

そう言って、フェイトの手を握った。

「うん！」

そうして、三人は、自分達のマンションに帰っていった。

高町家から、相馬です。昨日はなのはに自分の力を説明した後、高町家に1日泊めて貰って、その後何処に泊まるか考えようとしたところ、なんと、桃子さんから一緒に住まないかと言われました。理由は「コスプレが似合いそうだから」らしいです。理由が理由だから素直に喜べない。
そんなこんなで、今日は、高町家に住むことになったことを、友達のアリサとすずかに話すために、すずかの家に来ました。

「それで、こっちが私の友達の」

「アリサ・バニングスよ。よろしくしてあげるわ」

「月村すずかです。よろしくね」

「そして、こっちが」

「訳あってなのはの家に居候する事になった、剣崎相馬だ。よろしく頼む」

その後、なのはとアリサ達が話している時、相馬は考えていた。

「（そろそろジュエルシードが発動するか？）」

相馬が今後の事を考えていると、ジュエルシードが発動した。

「《なのは！》」

「《どうしよう？ユーノ君》」

「《そうだ！》」

そう言って、ユーノがジュエルシードの反応があった場所へ向かっていった。

「（そうか）ユーノ君が何か見つけたみたい。ちょっと見てくる」

そう言って、なのはがユーノを追いかけていった。

「（その嘘は無理があるだろ）ちょっと俺も様子を見てくる」

「大丈夫じゃない？ユーノを見つけるだけなんだから」

「そう思うか？なのはの運動神経で」

「「……」」

俺が二人になのはのことを言うと、二人は黙ってしまった。
それにしても、二人が何も言えなくなるなんて、なのはの運動神経
っていったいどれだけ悪いんだ？

「そう言う訳だから、ちょっと様子を見てくるよ」

「私も見てこようか？」

「なのはが帰ってくるかも知れないから、ここで待っていてくれ」
そう言って、ジュエルシードのところへ向かっていった。

「ユーノ君、あれは？」

「た、たぶんあの猫の大きくなりたいという願いが正しく叶えられ

たんじゃないかな？」

「大丈夫か？なのは、ユーノ」

「相馬君。大丈夫なの」

それにしても、原作でも見たけどでかいなぁ～。
そしてそろそろ

「バルデッシュ。プラズマランサー連撃」

≪ゲットセット。プラズマランサー・レンゲキ≫

「だ、誰？」

「さっすがはフェイト」

「そう言うんだったら、ユウも手伝いなよ！」

「嫌だよ、めんどくさい」

フェイトとアルフが来たけど、俺の知らない男がいた。

ーユウｓｉｄｅー

「バルデッシュと同タイプのインテリジェントデバイス」

「じゃあ、フェイトとアルフはあの女の子を、あの男の子は俺が」

≪あの男は今のフェイト様ではまだ荷が重いかと≫

「……分かった。気をつけてね。お兄ちゃん！」

「フェイトも。あの少女は見たところ、魔法は素人みたいだが、油断するなよ」

「分かってるよ。フェイトが負ける訳無いだろ」

そう言って、降りていった。

―相馬ｓｉｄｅ―

「そこのジュエルシード、俺達にくれないか？それが一番めんどくさく無いからさ」

「そう言われて、渡すと思うか？」

そう言いながら、なのはに向かって念話をした。

「《この男は俺がやる。なのははもう一人の魔導師を頼む」

「《相馬君、大丈夫なの？》」

「《多分、なのはじゃ、倒せないと思う》」

なのはは「そんなこと、やってみないと分からない」と何時もなら言っただろう。しかし、相馬の真剣な目を見たなのはは

「《わかったの》」

と返事をした。そんな事を考えていたから、なのはは気づかなかった。

なのはでは倒せないといったが、相馬でも倒せると言わなかった事に。

「戦う相手は決まったみたいだな」

「その前に聞かせてください。なぜジュエルシードを集めるのか」

「それじゃあ逆に聞くけどあんたらがジュエルシードを集める理由は？」

「私は最初、ユーノ君が　落としたジュエルシードを集めるお手伝いだった。でも今は自分の意思で集めてる。これが私の理由。貴方は？」

「なるほど。そこのフェレットがジュエルシードを落とした訳か」

何故か納得している男に俺は食いかかった。

「こっちがジュエルシードを集める理由は話したぞ。約束だ。あんた達がジュエルシードを集める理由を話して貰おうか」

「嫌だよ、めんどくさい。そもそも、何時俺達の事を話す約束をしたんだよ」

「うっ」

確かにそんな約束はしなかったけどさ、普通、この流れなら自分達の理由も話すだろ。

「さて、そろそろ殺ろうぜ。面倒なことは嫌いだが、こっちは好きなんでね」

くそ。戦いは避けられないか。

「レイナ　セットアップ。」

≪セットアップ≫

「行くぞ、アクア」

「うん！」

「「ユニゾンイン！！」」

俺がユニゾンすると相手は、心底驚いていた。

「ユニゾンデバイスなんて初めてみた！」

≪私もですマスター　。正直驚いてます≫

「それじゃあ、こっちも行くか。ジェラス　セットアップ。ファーストモード」

≪セットアップ。ファーストモード！！≫

「じゃあ行くか」

そう言って、俺の方へ突っ込んで来た。

「くそ。投影（トレース・オン）・開始」

俺が、干将莫耶を投影して迎え撃つと、相手が話しかけてきた。

「へぇ～、ユニゾンデバイスだけじゃなくて、戦い方も珍しいんだ

な。魔力で剣を創る魔法か？」

「悪いが、これは魔法じゃなくて魔術なんでね」

「ふーん。なら、その魔術とやらをもっと見せてくれよ」

そう言って、距離を取った。

「ジェラス。セカンドモード！」

≪セカンドモード。あんまり遊ばないで下さいね、マスター≫

そう言うと、双剣だったアイツのデバイスが鞘の付いた剣になり、その剣を鞘にしまった。

「カートリッジ・ロード」

≪ロード・カートリッジ≫

そう言って、カートリッジを使うと剣先から炎が出てきた。

「カートリッジシステムだと!?何でお前がそれを持っている!」

カートリッジシステムは闇の書事件で出て来るはずだ。何故この男が持っているんだ?

「内緒。と言うより企業秘密だな。それよりちゃんと避けろよ。打ち出すは神の炎」

そう言って、威力を上げた。

「相馬。私の水で消す?」

「いや、炎に相性が良い宝具がある。　投影(トレース)・開始(オン)　紅」

そうして相馬は、紅を投影した。

太刀　紅

とある死神が使う武器の一つで、この剣を作っていた時、釜にいれ、叩けば叩くほど強度が増したという概念から、炎を吸い取り、威力と強度が上がる剣。

「こい！」

「行くぜ、
神炎流　居合い炎魔斬（エンマザン）！！！！」

そう言って炎の波を放った。

「真名解放　紅（クレナイ）」

相馬が紅の真名を解放し、炎を吸い取った。しかし

「（くそ。威力が高すぎる。）」

吸い取る事は出来たが、威力が高く、相馬自身にもダメージを受ていた。

「お兄ちゃん。ジュエルシードは確保出来たよ」

「目的も達成したし、さっさと帰ろうよユウ」

「はいよ」

そう言って、帰ろうとする。

「ま、まて」

三人が帰ろうとしたのを、相馬が止めた。

「止めとけ。さっきの剣は俺の炎を吸い取る力みたいだが、吸い取った力が強すぎて逆にダメージを受けてんだろ？」

「くっ」

図星だった。確かに真名解放した【紅】で炎を吸いとったが、威力が高すぎて逆にダメージになってしまった。

「ジュエルシードを集めるなら、また戦うだろう。その時までに自分の力をもっと使えるようになれよ」

ユウは分かっていた。相馬が自分の力を物にする暇もなく、戦いになってしまった為、力を制御しきれないことを。

「とは言え、珍しい力を見させてくれた礼に、俺の名を教えてやるよ！」

そう言って、自分の名を教えた。

「黒衣の死神　ユウ・クロサキだ。覚えときな！！」

こうして、転生者　剣崎相馬と、死神　ユウ・クロサキの最初の戦いは、転生者　剣崎相馬の完敗で、終わった。

死神と転生者がエンカウント（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「初めて、主人公同士が戦う話です」

相馬
「負けたー。ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様から貰った紅も使ったのに」

赤黒
「実は、相馬が簡単に負けたのは、他の二次創作に出てくる転生者みたいに、自分の力を確認する前に戦う羽目になった為に、そのまま確認するのを忘れてしまったから。今の相馬は投影も、殆ど使いこなせてはいない」

相馬
「じゃあ、俺が紅でダメージを受けたのは？」

赤黒
「それはただ純粋に相馬の体が出来ていないからで、Ｓｔｒｉｋｅｒｓ位の歳になったらダメージを受けなくなります」

相馬
「と言う事はこの小説、ＳｔｒｉｋｅｒＳまでやるのか？」

赤黒
「とりあえず、Ａ’ｓ、Ｓｔｒｉｋｅｒｓをやった後、ＶｉＶｉｄかオリジナルストーリーをやる予定です」

相馬
「その前にまずは無印完結だろ！」

赤黒
「ハイ。セイイッパイガンバリマス」

相馬
「次回はやっと主人公の能力がたくさん出てきます」

赤黒
「普通もっと早いんだろうけどな」

相馬
「それでは次回も」

赤黒&相馬
「「お楽しみに」」

力の確認と温泉旅館旅館にて（転生者の場合）（前書き）

ももも。様、ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様感想ありがとうございます。

ももも。様から再誕（ジョワユーズ）せし陽光の獣王他、たくさんのアイディアを頂きました。ありがとうございます。

力の確認と温泉旅館旅館にて（転生者の場合）

ー相馬ｓｉｄｅー

「この辺りでいいか。レイナ、結界」

≪分かっておる。広域結界、展開≫

「じゃあやるか。レイナ、セットアップ！」

≪セットアップ！≫

俺は今、なのは達とは別にで特訓をする為に、近くの山に広域結界を張った。

≪しかし、主よ。アクアを置いてきて良かったのか？しかも、わざ

わざ猫少女の護衛までさせて≫

そう。今回の特訓は自分の力を把握する事だから、アクアにはなのはの護衛を頼んだ。

「仕方ないだろ。今回は俺の力の把握が目的だからアクアとユニゾンするのはまだ先だろうし、それに……」

≪それに、何だ主≫

「原作ではフェイトに兄は居なかった。だからこそ、原作で大丈夫だったから、なのはに危険が無いなんて保証は無い！」

そう、ユウといったキャラは原作では居なかった。なら、ジュエルシードを何個も持っているなのはに危険が及ぶ可能性もある。

「なるほど。では猫少女の事はアクアに任せて、こちらも始めるか」

「ああ」

レイナになのはの護衛の理由を話したら、納得したのか特訓の準備を始めた。

ちなみに、レイナがなのはの事を猫少女と呼ぶのかと言うと、なのははテンパると猫みたいな口調になる為に、レイナに猫少女と呼ばれている。

「まずは、投影から始めるか。投影（トレース）・開始（オン）」

そう言って、干将莫耶を投影した。

投影の修行は、制度の高い投影を百振り投影し、そのタイムを測るというものだ

「……これで百振り目。レイナ、タイムは？」

≪2分05秒。制度に気を取られ過ぎたな。主≫

「そうか。なら次は魔眼の確認だな。まずは、複写眼（アルファ・スティグマ）」

相馬は魔眼の確認をする為に、一度目を閉じて、複写眼を発動させ、空中に魔方陣を描いた。

「一求めるは雷鳴≫≫≫稲光（もとめるはらいめい　いずち）」

そう言うと、相馬の描いた魔法陣から雷が目の前の木に降り注ぐ。

そして、

「やばい、燃えてる消火消火、一求めるは水雲≫≫≫崩雨（もとめるはすいうん　みずち）」

そうして、いろいろ魔眼を試していった。例えば、

「万華鏡写輪眼　天照の後、直死の魔眼」

まず、万華鏡写輪眼の天照、消えない炎を出し、その後、直死の魔眼に変え、投影した普通のナイフで、直死の魔眼で見えた線を切って、天照を切り裂いたりした。

その後、なのはの護衛をしていたアクアに抱きつかれたのは言うまでもない。

数日後

相馬が毎日、投影や魔眼の特訓をしていた時間帯に、今度のゴールデンウィークを使って、高町家とバニングス家、そして月村家の三家族合同旅行に行く事になったみたいだ。士郎さんの話では、昔やっていた仕事の知り合いがその旅館に臨時で来るらしい

そんな訳で、旅行当日。

車は二台、俺となのは達に高町夫妻、もう一人の車には、月村家のメイド達に恭也さんと美由希さん、運転席には忍さんといった組み合わせそして何故か

「何で女装してるんだー～！！！」

心の底から叫んだ。今なら、伝説のスーパーサ○ヤ人になれる気がする。

「何言ってるのよ。それにしてもあんた本当に男よね？」

「当たり前だ！」

全く、アリサは一体何を言ってるんだ。

「でも本当に似合ってるよね～」

「本当に似合ってるの」

「男に女装が似合ってるって言われても全然嬉しくない」

そんな感じで盛り上がっていた時にふと疑問に思った。

「そう言えば、旅館に臨時で来る人ってどんな人何ですか？」

「そうだねぇ。僕が昔、やっていた仕事の知り合いかな」

「へぇ〜。おじ様の知り合いの話、もっと聞かせてください」

「わかったよ。僕は翠屋を始める前は、少し危ない仕事をしていてね、その時に彼と出会ったんだ」

「と言う事は、その人も昔はおじ様と同じ仕事をしていたんですか？」

「いや、彼は何でも屋をやっていてね。その時は依頼で、僕と一緒に仕事する事になったらしい」

「「「「へぇ〜」」」」

そんな話をしてる内に旅館へ到着した。

「温泉へ入ろう！」

荷物を部屋に運び終わると、相馬がいきなり提案した。

「急にどうしたのよ。まずは温泉より先に士郎さんの知り合いの人に会わない？」

「いや、そんな事をしてる暇はない。早くしないと、」

「あら、相馬君何処に行くのかしら。さあ早く、カメラの準備はバッチリよ」

「嫌ですよ。ただでさえ女装は嫌なのにその上、撮影会まで」

「大丈夫よ。最初は皆嫌がるけど、最後には自分から衣装を着替える様になるから」

「は、離してくださいよ桃子さん」

何となくさっき、相馬がしつこく温泉へ行きたがっていた訳が分かった三人は、

「じゃあ、私士郎さんの知り合いの人と会ってくるから」

「わ、私も行くよ」

「待ってくれ二人とも、行かないでくれー！！」

「なのはも気になるから見てくるの」

そう言って、アリサ達を追っていこうとするなのはの足を掴んだ。

「待てよなのは。俺と一緒に逝こうぜ」

「漢字が間違ってるの！」

「気にするなよ。さあ」

なのはは仲間になりたそうにこっちを見ている。

……なのはは仲間になった。↑ドラクエ風

「嘘なの」

「なのは。地の文に突っ込むなよ」

「《そう言う相馬もメタ発言止めなよ》」

「さあ、舞台は整ったわ。それじゃあ、逝きましょうか」

「「イヤー！！」」

「ふぅ。ひどい目にあった」

桃子さんの撮影会が終わって、今は士郎さんと温泉に入っていった。

「すまなかったね、相馬君。桃子もああいう性格だから許して欲しい」

「いえ、謝らないで下さい。俺は士郎さん達に感謝してるんですから」

「感謝？何の事だい」

「見ず知らずの俺を高町家に居候させてくれたことですよ」

そう。いくら行き先を知っている転生でも、不安にもなる。

「なのはに会えなかったらどうしようか？」

「海鳴市での生活はどうしようか？」

そんな不安が頭の中をグルグルと駆け巡っていた。むしろ、転生して直ぐに戦いになってよかったのかも知れない。余計な事を考えなくて済むから。

「気にする事はない。僕も桃子もなのはだって、皆、君の事を家族だと思っているんだから」

「ありがとう、ございます。じゃあ、先に上がりますね」

全く、もうちょっとで泣いちゃうところだったじゃないか。覚えておいてくれよ

“父さん”

「は〜い、おチビちゃん達」

俺が温泉から上がって歩いていると、アルフがなのは達にからんでいた。

「（タチ悪。完全に酔っ払いじゃねぇか）」

そう思いながら近ずいていった。

「君かね、うちのご主人をアレしてくれたのは？」

「何言ってるんですか？俺達は初対面の筈ですよ」

俺がなのはを庇っていると、予想外の人間が現れた。

「お客様、他のお客様のご迷惑になりますので」

「《ユウ、だと》」

「《なんで、ユウさんがここの》」

「《分からない。もしかしたら、近くにジュエルシードがあるのかも知れない》」

念話で話していたら、人間形態のアルフが

「ははは。ごめんごめん。知り合いによく似ているもんだったからさ」
と言いながら、すれ違いに
「《今回は様子見だよ。いい子は大人しくしてるんだね。さもないとガブッていくよ！！》」
と念話で言ってきた。
「スミマセンでした。アリサ様、すずか様、それと、初めまして。なのは様、相馬様」
俺達の名前を丁寧に呼んだ後、自己紹介をした。
「なのは様の父、士郎の元仕事仲間で　　何でも屋〈ホーク〉のオーナー。
ユウ・クロサキです以後、お見知りおきを」

と言って、名刺を渡してきた。

これが、なのは達と何でも屋〈ホーク〉のオーナーのユウ・クロサキとの最初の出会いになった。

力の確認と温泉旅館旅館にて（転生者の場合）（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんな訳で温泉旅館、相馬視点でした」

ユウ
「次回は今回の話を俺視点で書くらしいです」

赤黒
「それでは次回も」

赤黒&ユウ
「「お楽しみに」」

夢の話と温泉旅館にて（死神の場合）（前書き）

今回はユウサイドになります。

夢の話と温泉旅館にて（死神の場合）

ｌ？？？ｓｉｄｅｌ

……てくれ

関係ない。すべてを殺す

一人が死んだ

助けてくれ！

何かが（人が）喋って（命乞い）いる

関係ない。すべてを殺す

十人が死んだ

何でも欲しい物をやるから

何かが（貴族が）くれるらしい（全てを）

関係ない。欲しい物はもう手に入らないだからすべてを殺す

百人が死んだ

母さんはお前に殺されたんだ死ね化物！

何かが（子供が）こっちにくる（殺しに）
関係ない。すべてを殺す

千人が死んだ

全員あの化物を倒せ～！！

何かが（魔導師達が）棒を（デバイス）向けている

関係ない。すべてを殺す

一つの時空が滅んだ

めんどくさい。どうせ頑張ったって……は帰ってこない

なら、最初から期待しなければいい。

すべて、どうでもいい。

すべてを殺す。

そうすれば何も感じない

すべてを黒く染める

そうすれば何も期待しないですむ

始まりは終わり

死ぬは生きる

その輪廻は神にしか変える事は出来ない

だからこそ俺は神の力を得た

そして俺は、死神（ジェラス）となった

「ハァハア。夢か」

そう言って、ユウは（死神は）慈愛に満ちた目で（狂気に満ちた深紅の目で）見ながら、フェイトの（生け贄の）頭を撫でながら、眠りについた。

ーユウｓｉｄｅー

「着いた。あ～、めんどくせぇ～」

「仕事何だから頑張って！」

「ここら辺にジュエルシードの反応もあることだしね」

≪数少ないお得意様なんですから。サボらないで下さいね、マスター！≫

「ハァ。本当にめんどくさい」

そう愚痴を言いながら、旅館に入っていった。

何故俺が旅館に来たかと言うと、数日前に電話を貰ったからである

数日前

「はいもしもし。何でも屋〈ホーク〉です」

「久しぶりです。ユウさん」

「ああ。温泉旅館のオーナーか」

電話を貰ったのは昔に仕事を貰った温泉旅館のオーナーだ
ちなみに何故敬語かと言うと、オーナーが街で絡まれてた時に俺が助けたから。以降、仕事を貰う関係になった

「実は、また旅館の人手が足りなくなりまして」

「わかった。何時もみたいに手伝いに行けばいいんだな。それで日付は？」

「ありがとうございます。ゴールデンウィークの最初の日です。それではよろしくお願いします」

「はいよ。毎度どうも」

電話を切ったらフェイトが訪ねてきた。

「お兄ちゃん。何処か行くの？」

「仕事で、近くの温泉旅館に行ってくる」

「実は、その辺りにジュエルシードの反応が出てるんだけど」

「嘘！」

そんな訳で、皆でやって来ました温泉旅館。

「それじゃあ、俺は仕事に行ってくるけど、二人はどうする？」

「私はジュエルシードを探してる」

「なら私はひとっ風呂浴びてくるよ」

「そうか。ならアルフが出たら、フェイトも休んで温泉に入れよ」

「うん！分かった」

そうして、旅館の中に入っていった。

「着替えはこんなもんか」

「ええ。それにしても団体客と言うのがまさか士郎さん達だったなんて驚きですね」

「まあな」

先にオーナーに団体客の名前を聞いたら高町家だったなんてな。世界は意外と狭いって事か。

そう思っていると、二人の子供が近ずいてきた。

「あんたが士郎さんの言ってた手伝いのひとね」

「士郎の子供の友達か？」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

「ユウ・クロサキだ。気軽にユウって呼んでくれ」

「じゃあ私もアリサで良いわ。よろしくユウ」

「私もすずかって呼んで下さいねユウさん」

「こっちこそよろしくなアリサ、すずか」

「じゃあ私達は温泉に行くから」

「ユウさんも仕事頑張って下さいね」

「おう。じゃあな二人とも」

二人が温泉に入っていくと、士郎が入れ替わってやって来た。

「やぁ。久しぶりじゃないかユウ」

「そうだな、お前が仕事の引退を手伝って以来だな」

「また、強くなったんじゃないか？」

「そう言うお前は衰えたな」

「仕方ないさ。翠屋を始めてからは平和なものだからね」

「じゃあ俺はまだ仕事があるから、ゆっくりしていけよ」

「ああ。今度は翠屋に寄ってくれよ」

「近くに来たらな」

「掃除でもするか」

そう思い、廊下を歩いていると、アルフがアリサ達に絡んでいた。

「お客様、他のお客様のご迷惑になりますので」

そう言いながら、アルフに念話をした。

「《これ以上仕事を増やすなよ》」

「《分かったよ》」

そう言いながら、しっかり念話でケンカ売ってんじゃねぇか。

そう思いながら、アリサ達にお詫びをした。

「スミマセンでした。アリサ様、すずか様、それと、初めまして。なのは様、相馬様」

そう言って一呼吸いれ、自己紹介をした

「なのは様の父、士郎の元仕事仲間で　何でも屋〈ホーク〉のオーナー。
ユウ・クロサキです以後お見知りおきを」

そう言って、名刺を四人に渡した。

「（めんどくさいなぁ。完全に俺のこと警戒してるよ）」

「なによ、さっきと口調が全然違うじゃない」

「まるで執事みたいだね」

「昔は執事が本職でしたからね。仕事中はどうしてもこの喋り方になってしまうんですよ」
そう二人に言いながら、念話で、

「《めんどくさいから聞きたい事はジュエルシードが発動してからな》」

「《一つだけ聞かせろ》」

「《私も聞きたい事が》」

「《だ～め。一つだけって言っただろ！じゃあ、相馬だっけ《剣崎相馬だ！》あっそう、なら何が聞きたい？》」

と聞き返した。しかし、ユウには相馬がするであろう質問に検討が付いていた。

「《お前がジュエルシードを集める理由だ。何故ジュエルシードを集めている》」

「《そうだ。あれはとても危険な物なんだ！》」

ハァ。めんどくさい

そう思いながら、仕方なく質問に答えた

「《あのさあ、俺はお前らの何十倍も魔法に詳しいし、ロストロギアの解析をする知識と技術もある。そこのフェレットはたかがジュエルシードを拾っただけだろ》」

そうユウに言われたユーノは何も言えなくなり、代わりになのはが、

「《じゃあ、危険な物だってことを知ってて、何で集めているんですか？》」

「《ま、簡単に言うと仕事だな》」

「《仕事だと!?そんな理由でジュエルシードを集めているのか!》」

「《そうだ!お前らにはわかんねぇだろうが、俺にとってこの“何でも屋〈ホーク〉”の仕事は俺の命より大事なんだ。だからジュエルシードが暴走しようが、結果的に地球が滅ぼうが仕事を優先するぜ》」

そうなのは達三人に念話で宣言した後、

「それじゃあ、仕事に戻りますから、ごゆっくりこの旅館を満喫して下さい」

そう言って、離れていった。

なのは、相馬、ユーノは、ユウが何故そこまで“ホーク”の仕事にこだわるのかユウが渡した名刺を見ながら考えたが、答えは見つからず夜になりそして、

「《この気配は》」

ジュエルシードが発動した。

夢の話と温泉旅館にて（死神の場合）（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんな訳で後書きです」

ユウ
「そう言えば報告があるんだろ」

赤黒
「そうなんです。なんと、この小説が２００００ＰＣ突破したんです」

ユウ
「そうか、ついには幻覚まで見始めたか」

赤黒
「いやいや本当だから。そんな訳でこの小説のＩＦを募集します」

例
フェイト／ステイナイト
「フェイト／ステイナイト　矛盾した少年と黒衣の英霊」

ユウ
「じゃんじゃん応募して下さい」

赤黒
「それでは次回も」

赤黒＆ユウ
「「お楽しみに」」

風林火山の林って戦いでは意外と使いずらい（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様感想ありがとうございます

風林火山の林って戦いでは意外と使いずらい

ーユウｓｉｄｅー

「ジュエルシードが発動したか」

そう言って、ジュエルシードを手に入れるために、フェイト達と合流しようと走りそして、

「ここは何処だ？」

道に迷っていた。

≪またですか。だから何時も勝手に移動しないで下さいねって言ってるでしょうマスター！≫

「くそ、今度こそたどり着けると思ったのに」

≪マスター、その台詞は、今ので１８５２回目ですよ≫

「数えるなよ。仕方ない。念話でフェイトに聞くか」

≪最初からそうしてくださいよマスター！≫

「へ～い」

「≪お兄ちゃん！今何処にいるの？あの魔導師達が来ちゃったよ≫」

「≪じゃあフェイトとアルフは、そのまま魔力を出しながら時間を稼いでいてくれ≫」

「《早くしておくれよ。あの白い魔導師はどうとでもなるけど、もう一人の魔導師は正直戦闘になったらユウじゃないと勝てないんだからね！》」

「《了解。５分で行く》」

そう宣言して念話を切った。

「さて、急ぐぞ、ジェラスファーストモードでセットアップだ！」

≪了解。セットアップ。ファーストモード！≫

ｌ相馬ｓｉｄｅｌ

「おい、ユウは来てないのか？」

「それをあんたらに言う必要があるのかい？」

まあそれはそうか。敵に情報を簡単に渡すわけ

「そうだよ。お兄ちゃんは道に迷っていたなんて言う必要……何でもありません」

喋った！！！ビックリした、こんな漫画みたいな展開本当にあるんだ。

そんな漫才をしていると、魔法初心者のなのは以外が、ここに近ずいてくる魔力を察知した。

「行くぞアクア。今度はこの前みたいに簡単には負けないぜ！」

「ギッタギタにしちゃおう！」

「出来ると思ってるのかい？あのユウに勝つなんて」

「思っているんじゃない。勝つんだよ！」

「アルフはあの使い魔を相手して、私は白い魔導師を」

「分かったよ。悪いけどあたしの相手してもらうよ」

「大丈夫なのユーノ君？」

「僕なら大丈夫。二人も頑張って！」

「場所を変えるよ。ここに居たら、戦いの巻き添えくうからね」

「まあそれが良いんじゃないか。さすがにこの場所で全力は出さねぇが、もしもってことがあるからな」

「来たなユウ！行くぞアクア」

「うん！せーの」

「「ユニゾン・イン」」

「さて。前の戦いからどれだけ力を制御出来るようになったか見てやるよ」

そう言いながら、二人は駆け出した。

ーユウｓｉｄｅー

俺はこの戦いが始まる前に、フェイトにある課題を出した。それは、

「俺の動きを見て、何故俺が勝ったか、その理由を考える」

と言う物だ

……その前に、少し様子見するか。

「ジェラス。セカンドモード！その後、カートリッジをロード！」

≪了解。セカンドモード！＆ロードカートリッジ！≫

ジェラスをセカンドモードにしてカートリッジを一発使い、前に使った技を放つ

「打ち出すは神の炎　神炎流居合い炎魔斬（エンマザン）」

「同じ技を二度も喰らうかよ。投影・開始（トレース・オン）天之尾羽張」

対して相馬は、あらゆる属性を無効果する天之尾羽張を投影した。

天之尾羽張

天之尾羽張は日本神話に登場する刀であり、また、神の名前でもある。

『古事記』の神産みの段において、伊邪那山支命が迦具土神を斬ったときに使った十拳剣の名前として登場し、その別名が天之尾羽張であると言われている。また、天之尾羽張についたカグツチの血から、建御雷之男神などの火・雷・刀に関する神が化生したとされると言う概念を元に相馬が新しく作り出した宝具

真名を解放すると、白いナックルが腕につき、そのナックルに触れた属性を無効果する能力

「真名解放　天之尾羽張（アマノオハバリ）」

相馬が真名解放し、白いナックルが腕に装着されたことを確認した後、迫り来る炎をナックルで殴り付けた。

「うぉら～！！」

ナックルが炎に当たった瞬間、まるで最初から無かったかの様に消えてしまった。

「今度はこっちの番だ。アクア、俺の目の前に水を待機」

「はーい」

アクアが水を操作して、相馬の目の前に待機させた後直ぐに、ある魔眼を発動させた

「複写眼発動。―もとめるは水雲≫≫≫雨崩≪　みずち≫」

複写眼を発動し、雨崩を待機させておいた水に向けて放つ。そうすれば、

「やばっ。発動前より威力が上がってやがる。仕方ない、滅すは“水”纏うは“身体”」

仕方なくユウは、消滅の闇を使い防いだ

「くそ、駄目だったか。じゃあ投影（トレース・オン）・開始」

全くダメージにならなかった為、少し悔しそうに舌打ちしたが、直ぐに頭を切り替えると干将莫耶を投影した。

対してユウは

「さて、そろそろお試し期間は終了だ。ジェラス、ファーストモード」

≪了解。ファーストモード！≫

そして、

遊びはこれまでだと言い、ジェラスをファーストモードに変更した。

「こっからは、俺がフェイトとは違う速さを見せてやるよ。ジェラス、カートリッジ・ロード！」

≪ロード・カートリッジ！≫

双剣を一度振り、カートリッジを一発消費して技を放つ

「風牙・一閃」

ユウが放った技は、地面に当たり、土埃を巻き上げ、気が付くとユウの姿が見えなくなっていた。

「何処に行った。白眼」

相馬はユウを探すために白眼を使い、全方位を見渡した。
そして、

「見つけた、はぁっ」

干将莫耶を降り下ろした。しかし

「な、居ないだと！！」

白眼で確認したにも関わらず、そこにユウは居なかった。そして後ろから声が聞こえた

「空を斬ること風のごとしってな！」

双剣の刃を首に突きつけられた。ユウのデバイス、ジェラスは質量兵器を元に作られた為、非殺傷設定にすることが出来ない。つまりこの瞬間、相馬二度目の敗北が決定した。

「じゃあこのジュエルシードは貰っていくよ、と言いたい所だけどね、俺と取引しない？」

「取引するかは内容を聞いてから決める」

「まっそれはそうか。ならこの取引の報酬に、このジュエルシードをやるよ」

「分かったの。何をすれば良いの？」

「駄目だよなのは。まだ相手は報酬しか言ってないんだから、まずは内容を全部聞いてからだよ」

「ごめんなさいなの」

「続きを話して言いか？そろそろ面倒になってきたんだが」

「悪い悪い。続けてくれ」

「それじゃあ報酬にジュエルシードをお前らに渡す代わりにそこのフェレットに、ジュエルシードが海鳴市に落ちた理由を教えてくれるか」

「それだけでジュエルシードを渡してくれるなら、分かりました話します。まず　……」

長かった為、分かりやすく一つ一つの出来事にまとめた。

ユーノ達スクライア一族がジュエルシードを発掘した。

←

発掘したジュエルシードを運搬中に事故に遭う。

←

海鳴市に落ちたジュエルシードを封印する為、使えもしないデバイスを持ち込み返り討ちにあう

←

そこの魔力適正があった現地協力者の高町なのはにお願いして封印する

と言った感じだ、それにしても

「ハァ。簡単に説明されただけだから詳しくはわかんねぇけど、これだけは言える」

「ユーノ。俺もお前に一言言いたい事がある」

「「お前バカだろ」」

見事にシンクロした。その後もユーノの説教は続く

「お前頭あるのか？使えもしないデバイスを持って何がしたかったんだ。自殺でもしにきたのか」

「挙げ句の果てには魔法のまの字も知らない民間人を危険に巻き込んでんじゃねぇかよ」

「スミマセンでした」↑ｏｒｚ

二人がユーノに説教してる間、なのはは終始説明の意味が分からず、頭の上に?を作っていた。

逆にユーノの説明が分かったフェイトはずっとオロオロしていた。

ユーノに説教してる間、ユウはマルチタクスをフルに使い、自分の考えを纏めていった

「（まぁ、多分運搬中の事故はプレシアさんのせいだな。そうじゃなきゃ、上手くジュエルシードが海鳴市に集中するなんて事は無いからな。だが、プレシアさんは人に迷惑をかけてまで自分の考えを押し付ける人じゃないだろうし。なら、やっぱし最初に考えた事であってるみたいだな。ハァ、めんどくせぇ～）」

ユウが自分の考えを纏めあげると、さっさと仕事に戻ることにした

「そんじゃあ、約束のジュエルシードだ。お前らも早く帰らないと士郎達が心配するぞ。フェイト、明日帰るから、その時に課題の答えを聞かせてくれよ」

「うん。じゃあ先に帰ってるね」

「ユウも早く帰ってきておくれよ」

そうしてなのはと相馬は、ユーノを連れて旅館に走って帰り、フェイトとアルフはそのまま飛んで帰っていき、ユウ以外誰も居なくなった

「本当にめんどくさいなぁ」

≪そんなこと言って、どうせ救うつもりなんでしょう。プレシア嬢もフェイト嬢も、そしてアリシア嬢も≫

「まあな。俺はこんな最低な結果を変えるために力を手にしたんだ

からな」

≪マスターがどんな道を選んでも、私はそれに従い、力を貸すだけです≫

「頼りにしてるぜ相棒！」

≪はい、マイマスター！≫

そんな誓いをした後、ユウも旅館に戻っていき、そして誰も居なくなった……

風林火山の林って戦いでは意外と使いずらい（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「黒衣の死神人気投票スタート！！」

ユウ
「ＩＦの話はどうした？」

赤黒
「それもやりますが感想が来ない事も見越して、人気投票でお茶を濁そうかと」

ユウ
「そうか……」

赤黒
「ではメンバーの紹介を」

Ｎｏ．１　この小説の主人公
ユウ・クロサキ

ユウ
「おい、勝手に話を進めるな」

Ｎｏ．２　第二の主人公剣崎　相馬

ユウ
「無視か。あくまで進行重視か！！」

相馬
「どーも（既に諦めた）」

Ｎｏ．３　原作の主人公
高町　なのは

なのは
「よろしくなの」

Ｎｏ．４　ユウの妹
フェイト・テスタロッサ

フェイト
「よ、よろしくお願いします／／／」

Ｎｏ．５　相馬のユニゾンデバイス
アクア

アクア
「よろしく～」

赤黒
「投票方向は、感想に一番好きなキャラと二番目に好きなキャラと三番目に好きなキャラを選んで投票し、その結果は１００００００ＰＣ位に為ったら発表します」

ユウ
「とりあえず、ＩＦの話も募集している見たいなので、感想お願いします（諦めた）」

赤黒
「それでは次回も」

ユウ&相馬&なのは&フェイト&アクア「「「「「お楽しみに（なの）（ね～）」」」」」

誘拐も、する前ならセクハラに見える（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様からステ〇ス迷彩とお菓子製造装置（１０ｃｍ）を頂きました。

さて、次回の更新は少し遅れると思います。テストめんどくさい（涙）

誘拐も、する前ならセクハラに見える

ーフェイトｓｉｄｅー

「それで、俺がどうやって相馬を倒したか分かったか？」

お兄ちゃんが仕事から帰ってきて、私に出した課題の答えを聞いてきた。

「どうやってって言ってもさ、普通に速く動いて倒したんじゃないのかい？」

「いやいや、速く動いたっつても俺のＭＡＸはフェイトより遅いぞ」

「なに言ってるんだい。最後にアイツの首筋に剣を突き立てた時、

明らかにフェイトよりも速く動いてたじゃないか！」

確かにあの時、私より速く動いていた。だけど、

「違うよアルフ。お兄ちゃんは私より速く動いたんじゃなくて、私より遅く動いたんだよ」

「？？？？。どういう事だい」

「お兄ちゃんはあの時、攻撃されるまでずっと遅く動いて、攻撃された瞬間に急加速したんだよ」

「へぇ～、そうだったのかい」

アルフは私の説明が分かったのか、納得した様子だった。

でも、口では簡単に説明したけど、実際にやろうとしたらとてもじゃないけど、成功なんてしない。

あの技は、相手が動くまでずっとスピードを遅くし続ける忍耐力に、

相手が攻撃してきた瞬間にスピードを上げる反射神経と加速能力の二つが必要になる。
一つ目は私も何とか出来るけど、二つ目の反射神経は数えきれない程の戦闘経験がないと出来ない。一体どれだけ戦えばあんな技が出来る様になるんだろうと考えていると、私の疑問が分かったのか、お兄ちゃんが答えの採点をしてくれた。

「良く分かったなフェイト。正直、分かるとは思わなかったぞ！」

そう言って私の頭を撫でてくれた。お兄ちゃんは何かあれば直ぐ私の頭を撫でてくる。それに甘えながらお兄ちゃんにあの戦い唯一の疑問を　投げ掛けた。

「唯一分からなかったんだけど、お兄ちゃんが何であの人の攻撃をかわせたの？」

「なに言ってるんだいフェイト。さっき、説明したじゃないか」

確かに首筋に剣を突き立てた時の速さの疑問は説明した。だけど、

「スピードの緩急だけじゃ、あの時の攻撃を回避した説明にはならないよアルフ。私が見てた時、あの人の攻撃はお兄ちゃんのＭＡＸでも回避出来ない位に完璧だった、だけどお兄ちゃんはあの攻撃を回避してたから」

私があの時思った疑問をお兄ちゃんに説明したら、凄くビックリした顔になった。どうしたんだろ？

ーユウｓｉｄｅー

ビックリした。まさか俺の“風”が分かったなんて、流石は大魔導師の娘と言った所か。仕方ない、この技を説明するのはフェイトを入れて“二人目”か

「それは俺が使った“風”（ふう）と言う技の力だ」

「一体どんな技なの？」

フェイトがウサギの様な可愛い目で聞いてきた、とりあえず頭を撫で続けながら風の、いや、ジェラスの説明を始めた

「風は俺が使ってる“風林火山”って言う技の一つだ」

「風林火山？何だいそれは」

「風林火山はジェラスのモードに付いている能力を応用して作った技なんだよ」

「ここからは私がマスターに代わって説明します」

助かるわジェラス。この話は余り人には話したくないからな。

「私には手数のファーストモード、速さのセカンドモード、遠距離のサードモード、そして、全てを備えたファイナルモードの四つの形態が備わっており、それに合わせて全ての攻撃を受け流す“風”、気付く前に攻撃できる“林”、圧倒的火力を使う“火”、そして、人には触れることの出来ない“山”と言った技を繋げて“風林火山

”と私達は呼んでいます」

「じゃああの時使った風はどんな技なの？」

「それ位なら俺が説明してやるよ。といっても風は技じゃなくて、ただ、人が反応出来ない絶対死角を常に付くだけの技だよ」

俺が風の説明をすると二人は信じられないと言った目をした。まぁ確かに、常に絶対死角に回るなんて、普通は無理だよな、そう“普通”ならな

「これがあの時相馬の攻撃を回避出来た理由だ、納得したかフェイト」

俺がフェイトに訊ねるとコクコクと頭を

動かした。可愛かったから撫でたけど。

次の日……

「ジェラス、一言言わせてくれ」

≪奇遇ですねマスター。私も言いたいことがあります≫

「「どうしてこうなった（んですか）」」

それは二人の魂の叫びだった。それは数時間前に遡る。

数時間前

≪良いんですかマスター。ジュエルシードを探すためにフェイト嬢と二手に別れたのにチョコレートを買い占めてたりして≫

「良いんだよ！チョコがないと頭が働かないし、直ぐキレるからな。お前だって知ってるだろジェラス」

そんな漫才をしながらチョコレートがギッシリ詰まった袋を抱えて、歩いていた

すると、リムジンが止められ、いかにも誘拐されようとしているアリサとすずかがいた

「（ハァ、ホントに面倒だ。）そこの男達」

誘拐犯達に声をかけた。誘拐犯達は見られた事に動揺し、アリサとすずかは助けが来たと喜んだ。
しかし次の一言でここに居る全員が驚いた何故ならば

「その子達はまだ小学生だぞ。セクハラはせめて後十年は待てよ」

これは誘拐じゃなくセクハラだと思っていたからだ

「あんた何処見てるのよ。私達はセクハラされてるんじゃなくて誘拐されかけてるの」

「誘拐か！大変だなバニングス家の一人娘は」

「そんなことどうでも良いから速く助けなさいよ」

「分かった分かった。その代わり、アリサのお父さんに俺の事を話してくれよ」

そう言うと誘拐犯の所に近付いていった。

「へへへ。威勢良く来たのはいいが、さっさとしn」

言い終わらない内に地面に潰された。

「あ、別に何も言わなくて良いから。何を言おうが全員潰すからな」

時間は一分にも満たない。たったそれだけで誘拐犯約四十人が気絶させられた。

「お前で最後だ」

「し、死ね化物!!」

そう叫び銃をユウの腹に突き立てた

「なぁ知ってるか?銃っていうのは意外と繊細に作られててな。銃口に異物があれば、暴発の危険があると言うことで、弾が発射されないんだ」

「だ、だからなんだってんだ」

「つまり、こうやって銃口に隙間が無ければ、銃は撃てないってことだ」

そう説明したらユウがその誘拐犯の意識を刈り取った。

誘拐犯達にとって、ユウが現れたことは間違いなく誤算だった。しかし、ユウを無視しそのまま車で逃げていればこんなことにはならなかった。誘拐犯達の最大の失敗は、ユウとアリサ達に話をさせたことだった。

そんなことをやってるときに、アルフから念話がきた。

「《ユウかい、今ジュエルシードを強制発動させた所なんだけど、あの魔導師達が来ちゃったんだよ！》」

「《ハァ！マジでか！？》」

そう念話でアルフと話ながらジュエルシードの魔力を探知したら、確かにジュエルシードが発動してて、その近くにフェイトとなのは達の魔力があった。

「《今から直ぐ向かう。それまで持ちこたえててくれ》」

アルフにそう頼むとアリサ達を送り届け、マッハでフェイト達の所に向かった

誘拐も、する前ならセクハラに見える（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんな訳でユウはお菓子製造装置を使ってチョコを食べてる為、ジェラスに来てもらいました」

ジェラス
「どうぞよろしくお願いします」

赤黒
「さて、今回はジェラスの設定について質問したいと思います

Q．ジェラスはなんでジェラスっていうの？
Aジェラス
「答えは作者さんから」

赤黒
「それではお答えします。この小説は死神がメインになっていて、死神を英語で書くとジェラス（Ｓｈｉｎｉｇａｍｉ）と書くため、

デバイスの名前がジェラスになりました

Q．ジェラスのモードが四つある訳は？

Aジェラス
「これは単純にマスターが全ての距離で戦う為です」

赤黒
「それでは次回も」

赤黒&ジェラス
「「お楽しみに」」

強い力には代償が必要　前編（前書き）

酸欠帝様感想ありがとうございます！
まだテスト準備期間ですが、良いアイディアが浮かんだ為、投稿します。
読んだ人は感想お願いしますm（＿＿）m

強い力には代償が必要　前編

ーアルフｓｉｄｅー

アルフがユウに念話をした後、何時もの魔導師達と対峙した。一人は魔導師になって日が浅い為、フェイトの相手には役不足だろう、もう一人の使い魔？にしても攻撃魔法はなく、アルフが相手でも特に問題ない相手だ。でも問題は最後の男の魔導師だ。見たことのない魔法（魔術って言ってたっけ）を使いユウ以外はおそらく勝負にならないでだろう、なら

「《フェイト。あの男の魔導師が動く前にジュエルシードを封印しちゃおう！》」

「なのは！先にジュエルシードを封印だ」

「うん！リリカルマジカル」

「ジュエルシード、シリアル１９！」

「封！」

「印！」

フェイトとあの白い魔導師のデバイスから閃光が放たれ、その閃光を受けたジュエルシードはそれまで放っていた光を失い、宙にたたずんだ。あたし達がジュエルシードを回収しようと近づこうとしたけど、あの男の魔導師がいるから安易に近づけない。

速く来ておくれよユウ

ー相馬ｓｉｄｅー

「やった！なのは、速く確保を」

「そうはさせるかい！」

ユーノはアルフが居るから、なのはの援護には行けないから

「俺がなのはの援護に行く。なのは、フェイトに言いたい事があるんだろ」

「うん！」

そう言ってなのははフェイトと対峙し、

「この間は自己紹介出来なかったけど・・・私、高町なのは！私立聖祥大付属小学校三年生！」

自己紹介をした、しかし

≪サイズ・モード≫

フェイトがデバイスを構えた為に、なのはも自身のデバイスレイジングハートを構えた。

「お兄ちゃんは優しいから忠告しなかったけど、変わりに私が言う。私は前みたいに手加減出来ないから出来ればもう、私達の前に現れないで」

「そう言う訳にはいかないの！」

その言葉を聞いてもなのはは怯まず、フェイトに立ち向かう。

空中でフェイト戦いながら、なのははフェイトに自分の考えを叫んでいた。

「話し合いだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事だってきっとあるよ！」

「……」

フェイトは何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

しかし、それでも自分が思っている気持ちをフェイトに伝える。

「ユウさんにも言ったけど、私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の落とし物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸

かったら嫌だから！」

「……」

フェイトはなのはの言葉を黙って聞く。

「これが私の理由！」

「……私は……」

「フェイト！答えなくて良い！！」

フェイトがなのはの気持ちに答えようとしたが、途中でアルフがそれを止める。

「優しくしてくれる人達の所で、ヌクヌク甘ったれて過ごしてきたガキんちょに何も教えなくて言い！！私達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの声で我に帰り、ジュエルシードの方へ向かっていった。そしてバルディッシュでジュエルシードに触れる直前に、フェイトはなのはの事を考えていた。

「（あの白い魔導師にはジュエルシードを集めるちゃんとした理由があった。なら私は？私は母さんがジュエルシードを欲しているから。

本当に？

私は本当に母さんがジュエルシードを欲しているからジュエルシードを集めているの？）」

そんなことを考えていたからだろうか、ジュエルシードから凄い衝撃波が襲ってきた。

「（とりあえずは原作通りの展開か）」

相馬は、フェイトが吹き飛ばされる前に立ち、広範囲を守れる盾ローアイアスを投影した

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.ー体は剣で出来ている。

熾天覆う七つの円環（ローアイアス）！！」

熾天覆う七つの円環

トロイア戦争の英雄アイアスが所持していた、英雄ヘクトールの投槍を唯一防いだと言われている青銅の盾になめした牛皮を七枚敷き詰めた盾。開いた花弁が如き形であるのは、かつて担い手が死に際し、流した血から、アイリスの花が咲いたという伝説から。

また、ヘクトールの投槍を七枚目で防いだ事から七枚目の防御力はかなり高い。

相馬の計算ではアクアとユニゾンした状態で出すローアイアスなら、簡単に防ぐ事が出来るはずだった。そう、

“原作通りだったなら”

「ぐあぁっ！！」

結果的に言えば防ぎきる事は出来た
しかし、ローアイアスの花弁は三枚欠け、相馬自身も右手に傷を負い、簡単な剣くらいしか投影出来ない位に弱ってしまった。しかも、まだジュエルシードは暴走したまま

「《大丈夫？相馬》」

「《ああ大丈夫だ！心配するなアクア》」

アクアには心配をかけまいと強がったが、封印に使おうとしてた宝具も使えず、残った手段は一つだけだった

「（成功するかはぶっつけだが、やるしかねぇ！）直死の魔眼＋複写眼！」

それは魔眼の同時展開。しかしこの技にはデメリットがあり、この場合複写眼のデメリットを無くす変わりに

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死

直死の魔眼のデメリット、死の概念が復活する

「ウガガガガガガガガガガガガーーーー」

死の概念は世界全てに死の線が走り、自分は生きているのか死んでいるのか解らなくなっていき、心が壊れてしまう。アクアがとっさに相馬の意識を刈り取った為に、心が壊れる事は無かったが、相馬の体を死の概念が乗っ取り、全てを殺す暴走体になってしまった。
そして、運悪く

「獣の様な魔力が出たから急いで来たら、どういう状況だこれ？」

「さぁ。私に聞かれても」

ユウ達が到着した。

強い力には代償が必要　前編（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「今回は直死の魔眼のデメリットと魔眼の同時展開について説明します。ユウが」

ユウ
「俺かよ！！しゃーない、簡単に説明してやるか」

直死の魔眼のデメリット
これは本来デメリットではなく、世界全てに死の線が走る位に強い力な為、デメリットが無い時は、見たい死の線だけを見れるようにしている、ちなみに、月姫の志貴は子供の頃に二度死にかけたことで直死の魔眼を得、子供な為に死の概念が薄く、その後に魔眼殺しのメガネをかけ始めたので心が壊れず、空の境界の式は、もう一人の識が死んだので、死に最も近く、最も遠い存在になった
（作者の考えの一つであって、この考えが正解とは言えない）
魔眼の同時展開

片目に違う魔眼をそれぞれ展開する。魔眼のデメリットは、厳密には一つだけしか解除出来ず、同時展開した場合より強いデメリットが発生する。（今回は複写眼の暴走の危険と言うデメリットより直死の魔眼の死の概念がデメリットとして強い為、こっちのデメリットが発生した）

ユウ
「とまあこんなもんか」

赤黒
「次回は暴走した相馬とユウが戦い、今度はユウの隠された力が発動します」

ユウ
「感想もじゃんじゃん募集していま～す」

赤黒
「それでは次回も」

赤黒＆ユウ
「「お楽しみに」」

強い力には代償が必要　後編（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、感想ありがとうございます！
ようやくテストも終わったので、最新話を更新します

強い力には代償が必要　後編

ーユウｓｉｄｅー

アルフの念話を受けて、とりあえずアリサとすずかを無事に届けた後、フェイト達の魔力を頼りに急いで来たら（途中何回も道に迷い最終的にはジェラスに道を聞いたことをここの記しておく）ジュエルシードも相馬も暴走状況だった。

「（今日は厄日だな。誘拐犯には会うわあんなに死の空気を纏った奴相手にしなきゃいけないわ、ハァ、ホントにめんどくさい）」

内心ため息をつきながら何時もと全く違う相馬の姿をフェイトの所に移動しながら観察し出した。

「（そもそも本当にアイツは相馬で合ってるのかよ）」

ユウがそう思うのも無理はない。何時もの相馬はＦａｔｅのアーチャーの様なバリアジャケット（赤の部分が薄い水色になっている）とアクアとユニゾンした為に蒼髪蒼眼の姿をしているが、今の相馬はバリアジャケットこそ変わっていないが右目は深紅、眼球部分には五方星の模様。そして左目は

「（あの蒼い左目が怪しいな、と言っても確証がないし）」

仕方なくユウは、フェイト達が何か情報が無かったか聞いてみた。

「フェイト、アイツが暴走する前に何があったんだ？」

「分からないよ。私がジュエルシードの確保に失敗してジュエルシードが暴走したのを助けて貰ったらいきなりああなったんだよ」

ふむ。フェイトの説明だけじゃ良く分からないな。せめてもう一つくらいヒントがあれば良いんだが。

ユウがそう考えていると、相馬の手に小さなナイフが現れ、動き出した。

「やべぇ。おい、そこの白い魔導師！さっさとこっちの来い。殺されたいのか！！」

「は、はい！」

なのはが後ろに回ったと同時に、相馬が動き出した。
まず、造り出した小刀位のナイフを逆さに持ち、物凄い速さで周りの物を切り裂いていった。そして極めつけは

「（オイオイ。暴走したジュエルシードまで切り裂いてるよ）」

暴走しているジュエルシードをまるで豆腐を斬るかのの様に切り裂かれ、霧散してしまった

「（最悪だ。封印を解放しようにも動きが速すぎて、詠唱をしてる間に殺られるな。あ～、ホントにめんどくさい）ジェラス、体の周りに風を纏わせろ」

≪了解しました。マスター≫

こちらに斬りかかってくる相馬の攻撃を、変換資質の風でいなしつつ、時間を稼ぐことにした

「（くそ、殺すのは簡単だが、こいつを殺したら逆に士郎に殺されるな。それがなくてもフェイトの前で殺しはちょっとな）」

と思っていると、ナイフがユウの作り出した風を殺した

「マジかよ。風を斬るとか士郎でも出来るかどうか分からないのによ」

ユウは、新しく風を作り出しては殺され、また作り出しては殺されを繰り返しながら、打開策をなのは達に聞いた

「なぁお前ら。アイツが暴走する前に何か言ってなかったか？」

「私達は相馬君の声が聞こえない位遠くにいたから」

「どんな些細な事でも良い！何か無いか」

「そう言えば、アイツが暴走する前にえ～と、確か「直死の魔眼＋複写眼」とか言ってたよ」

ユウは、アルフが言った魔眼と言うキーワードを聞き、相馬が使った魔眼を考え始めた

「（確か、複写眼と直死の魔眼だったか。複写眼は多分、魔法を複写して、コピーする力だと思うけど。問題は直死の魔眼か、想像通

りの能力なら対策は有るには有るんだが）」

そう思考しながらも、相馬の嵐の様な攻撃を双剣と風を巧みに使い、全て防いでいた

「（相馬が意識を取り戻さなくちゃ話にならないからな）」

ー相馬ｓｉｄｅー

あれ？俺は今の今まで暴走したジュエルシードの所にいたのに、いつの間に移動したんだ？と言うかここは何処だよ！

「ここは神の神殿です。と言うか貴方が転生する時も来ましたよね、忘れましたか？」

神様、お久しぶりです。転生した時以来ですね。と言うか俺、声に出してましたか

「いいえ。ただ貴方の思考を読んだだけですよ。天を司る神ゼウスたるもの、人間の思考を読むくらい簡単なんですよ」

へぇ～。って貴女ゼウスだったんですか！？って言うよりゼウスって女だったんですね

「そんな事より、何故貴方がここに居るか分かりますか？」

え～と、何でですか？

「ハァ。本当に分からないんですか？」

もしかして俺が魔眼の同時展開を使ったから……とか

「当たり前です！！全く、念のためにアクアに意識を刈り取れるようプログラムしてて正解でしたよ。また死にたいんですか？」

スイマセン。まだ死にたく無いです

「もう良いですよ。今回は直死の魔眼のデメリットをこちらから弱めておきますから。ユウに頼んで元に戻してもらって下さいね。私ではユウの様に上手に出来ませんから」

え～と神様は

「ゼウスで良いですよ。相馬さん」

じゃあゼウスさんで。それでゼウスさんはユウの事を知っているんですか？

「ええ。ユウとは私が神になる前から知ってましたよ。と言うより、私が神になったのはある意味、ユウの為みたいなものですから」

お願いしますゼウスさん！ユウの事を教えてください。

「仕方ありませんね。それでは相馬さんはユウの秘密を一つだけ教えてあげますよ」

ありがとうございます！！

「今は自分で五つの枷を掛けて封印してますが、その封印を解いた状態のユウは、私達とほぼ、同じなんですよ」

えええええ！！！

「それはそうと、あっちのドアを開ければ地上に出られますから、速く行った方が良いですよ。
ユウも貴方が素早く動くから、防戦一方になってるみたいですから」

何から何までありがとうございますゼウスさん。
それとゼウスさん、頼んでおいてなんですけど、そんな簡単にユウの事を教えちゃって良いんですか？

「相馬さん。私の唯一の趣味はユウの困った顔を見ることなんですよ♪」

ーユウｓｉｄｅー

「理不尽だ～！」

「いきなりどうしたのお兄ちゃん？」

「いや、何故か言わなければいけない気がした」

でもそんな事を言ってる余裕は無いんだよな、全く、さっさと意識取り戻せよ。そうしないと、今度はこっちが死ぬっての

そう思っていると、突然攻撃の嵐が止み、相馬が苦しみ出した

「ガアアア！！！！……ハヤ…ク……タノム……ユウ」

「よし、良く戻ってきた相馬。その頑張りに免じて、何故俺の秘密を知っているのかは聞かないでやるよ。ジェラス！封印一、二番を解放するぞ！」

≪良いんですかマスター？今日は急いで来たから何時ものストックは持ってませんよ≫

「仕方ないさ。悪いフェイト。相馬の目が何時もの蒼眼に戻ったら、急いでアジトに転移してもらえるか」

「分かった。でも無茶はしないでねお兄ちゃん」

「出来るだけ心がけるよ」

フェイトにお願いした後、自分に掛けた封印を解除する為、詠唱を始めた

我は風の担い手　　我が風は死を運ぶ力

第一封印解放確認

その声は無機質で

我は闇の使い手　我が闇は因果をも滅する

第二封印解放確認

何時ものユウではなく、
まるで機械の様な声

そして動きの無くなった相馬に手を当てて、消滅の闇を発動した。
しかし何時もの消滅の闇ではなく、まるで世界を消滅させるかの様
に感じる声

「滅するは“死”干渉するは“因果”」

そうユウが唱えると、相馬の瞳が何時もの蒼眼に戻り、今度はユウの瞳が薄い深紅に変わり、苦しみ出した

「ハァハァ（きっつい。久しぶりに強い吸血衝動だから……意識が……跳びそう）」

「おい大丈夫か？」

「問題ねぇ。ジェラス、さっさと再封印だ！」

≪もう完了してますよマスター≫

「そうか。フェイト、悪いが転移頼む」

「待てよ！」

「何だよ」

相馬は、今にも転移しそうなユウを呼び止め、喋り出した

「いや、助かった。ありがとなユウ」

相馬の発言に一瞬ビックリしたが、苦笑いしながら答えた

「それはこっちのセリフだ。フェイトを助けてもらった見たいだからな。その礼にお前を助けた。ただそれだけだ！ほら、お姫様が飛び出してきたぞ」

「相馬君大丈夫?すっっごく心配したんだからね！」

「悪かったよなのは。今度からは無茶はしないよ」

そのやり取りを聞いた後、その場から転移した。

そしてなのはと相馬のやり取りを見たからなのか、転移している時に、過去に似たような経験がフラッシュバックした

「ほら起きろよ?.?.?.。もう朝って言うかもう昼だぞ」

「うう、後三十日」

「長い！1ヶ月睡眠を決意させるとか、どんだけ朝弱いんだよ」

これはユウが、まだ幸せに暮らしていた、いや、幸せだと感じていた日の記憶。
しかし、これはもう手に入らない。この日常を捨て、力を手にしたのだから

そしてフェイト達が住むマンション

「ホントに大丈夫かいユウ？顔色が凄く悪いよ」

「ああ。悪いがフェイト、急いで俺の部屋から少し大きな瓶を取ってきてくれるか」

そうフェイトに頼むと、フェイトは急いで何時もの瓶を取ってきてくれた

「これであってるかな？」

「ああ。これで大丈夫だ」

そう言ってフェイトから瓶を受け取り、飲み干した

「それは何だい？臭いからして血みたいだけど」

「ああこれか。これは俺が魔法を使う為に必要な薬みたいなものだな。俺は少し特殊な魔導師でな、この薬が足りないと今の様になるんだ」

「そうなんだ。そうだ、そろそろ母さんにジュエルシードの事を報

告しに行こうか」

「なら、明日は朝からケーキを作ってプレシアさんに持って行くか」

「うん！」

フェイトと明日の予定を意見しあいながら、これからの事を考えていた

「（ジュエルシードが暴走したことで、管理局も重い腰を上げるはずだ。管理局がプレシアさんに気付く前に、例の策を進める必要があるな）」

そう一人で決意を始めた

「（それよりもまずは）作るならチョコレートケーキだろ」

「母さんは甘いケーキが好きじゃないからモンブランだよ」

「ハァ。もういっそ両方作っちゃえば良いんじゃないかい」

「「それだ！！！」」

こうして死神が決意を新たにし、歯車は回りだす。それを変えることは、神にしか許されない

強い力には代償が必要　後編（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「ハロハロ～。テストが終わってテンションの高い赤黒です。さて、本日のゲストは」

ユーノ
「どうせ僕なんて、二次創作になると皆知ってるから説明文が省かれて、出番が少なくなるんだ（ブツブツ）」

赤黒
「本編で殆ど出番の無いユーノ・スクライアのユーノ君です」

ユーノ
「作者さん。僕の出番はもう無いんですか」

赤黒

「大丈夫、ユーノ君にはきちんとそれなりに重要なポジションを用意してあるから」

ユーノ
「作者さ～ん。
嬉しいです。それで、そのポジションに僕が収まるのは何時なんですか」

赤黒
「A's終了後だな」

ユーノ
「作者さ～ん（涙）それって無限書庫に働く辺りの話じゃ無いんですか」

赤黒
「さぁ。それはどうでしょう？」

ユーノ
「作者さ～ん。こんなとこで伏線を張らないで下さい」

赤黒
「それでは次回も」

赤黒&ユーノ
「「お楽しみに」」

ユーノ
「ちなみにA，Sで闇の書の資料を僕が無限書庫で探す話は？」

赤黒
「多分無いです」

ユーノ
「作者さ～ん（涙）」

子供の事を考えない親なんていない（前書き）

酸欠帝様感想ありがとうございます！！

子供の事を考えない親なんていない

ーユウｓｉｄｅー

俺達はフェイトの母親で、俺の雇い主であるプレシア・テスタロッサの住む時の庭園に転移してきた。

「でも本当に大丈夫なのかい？昨日の戦いの疲れも取れてないのに、一人でアイツのとこに行くなんて」

「心配すんなよ。一人で行くって言ったって別に争う訳じゃない。ただプレシアさんに話があるってだけだからな」

「じゃあ私達はここで待ってるね」

フェイトがそう言ったのを聞いた後、俺は一人でプレシアさんの所に向かった。

「それで、何の用かしら？その様子ならまだジュエルシードを全て集め終わってない見たいだけど」

「ええ。その前に報告したい事があったので」

「何かしら？聞いてあげるわ」

プレシアさんに許可を貰ったユウは、プレシアさんに今までの出来事等を報告した。ちなみにユウの口調が何時もと違うのは、仕事の時は仕事の口調、プライベートの時はプライベートの口調と分けて使い、さらに、昔は執事もやっていた為、一つ一つの行動も気を配っているのである

「まず良い報告を。この短い期間でジュエルシードを約半分の八つ手に入れることが出来ました」

「貴方が付いて居ながらまだ八つなんて」

「ええ。その事を報告しようと思い、一人で来ました。我々以外にジュエルシードを集める魔導師が三人います」

「地球には魔法文化が無いと聞いていたのだけれど」

「その通りです。一人はおそらく地球で偶然魔導師になったようです。もう一人の魔導師はジュエルシードを見つけたスクライア一族の者です」

「ふぅん、そう。それでもう一人の魔導師は？」

「もう一人の魔導師は見たことの無い魔法を使い、私でも油断すればやられるような相手です」

「何ですって！」

これまで俺の報告を淡々と聞いていたプレシアさんだが、俺の最後の報告には流石に驚いたみたいだ。それもそうか。プレシアさんはある研究の過程で、俺が関わっていたプロジェクトの全貌を知っているからこそ、俺が油断すればとはいえ、負ける様な人間が居ることが信じられないんだろう

「その事を踏まえてプレシアさんにちょっとしたお願いがあるんですが……」

「言いなさい！特別に聞いてあげるわ」

「ありがとうございます。しかし、お願いと言っても難しい事ではありませんよ。ただ……」

そう言って一度言葉を切り、ジェラスを構え、

「そろそろ壊れて貰おうかと」

降り下ろした。そこに運悪く

「お兄ちゃん……嘘だよね……お兄ちゃんが母さんを……こ、殺すなんて」

「フ、フェイト？こ、これはだな……」

ユウは驚きの余り、仕事口調から何時もの口調に変わった事も気付かない、それ位驚いたのだ。自分の兄が母親を切り裂くような場面を見せない様にフェイトを時の庭園の前で待たせ、ここには入らない様に言っておいた。しかし良くも悪くもフェイトの事を信頼していた為、プレシアさんが大きな声で叫んだのを聞いたフェイトが様子を見に来ると言う事を見落としていた

ユウがフェイトに何かを言う前に、フェイトのプラズマランサーがユウの足元を撃ち抜いた。

「動かないで。お兄ちゃんはそんな事しない。なら貴方はお兄ちゃんの偽物だ！」

そう言うとプラズマランサーをユウに向けて殺傷設定で放ってきた。

「だあああ。誤解だ！俺は偽物じゃないし、プレシアさんも死んでねぇ！！」

「本当に？本当に母さんは生きているの？」

そう叫びながらフェイトのプラズマランサーを双剣で切り裂き、その言葉を聞いたフェイトは冷静になりプラズマランサーを撃ち出すのを止めた。

「なら、何でお兄ちゃんは母さんを斬ったの！」

しかし、攻撃が止んだとしてもフェイトが怒っている事に変わりは無い。仕方なくユウは、フェイトに全てを話す事にした

「斬ったのはプレシアさんじゃ無くて、プレシアさんが肌身離さず持っているデバイスを斬ったんだよ」

「じゃあ何で母さんのデバイスを斬ったの？」

フェイトの疑問は最もだ。しかしこの真実を聞いてフェイトはどう思うか。そう考え、フェイトに真実を告げるべきか迷っているユウに、ジェラスから念話がきた

「《マスター。真実を告げた方が良いかと》」

「《だがこれを聞いてフェイトは大丈夫なのか？これはフェイトの全てを否定するような事だぞ。フェイトに耐えられるかどうか》」

ジェラスと念話で話していると、いきなりユウとジェラス以外の人から念話で話しかけられた

「《なら私がフェイトに言うわ。アリシアの妹で、私の娘なのですから》」

「《プレシアさん。大丈夫何ですか？》」

「《ええ。》フェイト」

プレシアさんが真実を告げることを決めると、起き上がってフェイトに何時もと違い柔らかい口調で話しかけた。

「か、母さん……」

「フェイト。アルフを呼んで来てくれるかしら？全員が揃ったら話すわ。これまでの事を全て」

「分かりました母さん！」

フェイトがアルフを呼びに言ったことを確認し、ユウとプレシアが語り合った。ユウもプレシアも実は直接会ったのはあの時が初めてだった。しかしプレシアは〈プロジェクトJ〉の資料で、ユウはプレシアが造り出したある研究を知った時に、似たような知り合い方だが、唯一違うのは知った時の感情。プレシアは恐怖、ユウはただ純粋な興味だ。そんな二人の今共通の気持ちはフェイトの事だ

「私に敬語で話すなんて。私のせいね」

「その事に関してはノーコメントだ」

ユウも前の様にプレシアに対して仕事口調で話さなくなった。何故ユウが仕事口調で話さなくなったのかと言うと、今のプレシアは前と違いただ純粋に娘の事を心配する母親だからだ

「例えフェイトに嫌われたとしても私にはフェイトに真実を告げるわ」

「まぁ、フェイトがアンタの事を嫌うことはまず無いだろうな」

「何故そんな事が言えるのかしら？」

「簡単だ。フェイトはそれ位……」

フェイトがアルフを呼んで帰ってきた為、ユウは一度言葉を切り、
フェイト達の所に向かいながらさっきの答えを言った

「アンタの事が大好きだって事だよ」

「それで、アタシまで呼んで何の話だい？」

「駄目だよアルフ。母さんにそんな言い方したら」

「気にしないわフェイト。では話すわねあれは……」

そしてプレシアは語り出した。プレシア・テスタロッサの過去、そしてあの忌々しい大型魔力駆動炉暴走事件を……

子供の事を考えない親なんていない（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「さて次回はプレシアさんの過去編にいきたいと思います」

ユウ
「果たしてプレシアが語るフェイトの真実、そしてプレシアさんが持っていたデバイスの秘密とは。次回　魔法少女リリカルなのは黒衣の死神　第17話　「プレシア・テスタロッサ」にご期待下さい」

赤黒
「さらに、今アリシアを蘇らせるかどうかアンケートを行っていますので、そちらもよろしくお願いします」

ユウ
「それでは次回も」

赤黒&ユウ
「「お楽しみに！」」

プレシア・テスタロッサ（前書き）

酸欠帝様感想ありがとうございます！！
最新話を更新しました。

プレシア・テスタロッサ

これは魔導工学研究者、プレシア・テスタロッサとその一人娘、“アリシア・テスタロッサ”の物語。

プレシアがアリシアを授かったのはプレシアが二十八の時。生活のすれ違いから、アリシアが二歳の頃に離婚したが、仕事場の人間にも助けられ、仕事を続けながらも一人娘を育てていくことが出来た。

五歳の頃には、薄茶毛の山猫に「リニス」と名付け、可愛がった。

悩みと言えば、季節の変わり目にはリニスの抜け毛が多くて掃除が大変なこと。　アリシアが時々我が儘を言い、勉強があまり好きではないこと位の幸せな家庭。　こんな家庭が何時までも続くと、この頃は信じて疑わなかった。

この幸せが壊れ始めたのは一枚の辞令からだった。

プレシアがあるプロジェクトの設計主任として抜擢されたのである。

それは新型の、大型魔力駆動炉だった。

ただし、1からの設計ではなく他者からの引き継ぎで、それは十分な引き継ぎ期間もスケジュールが許さず、さらには、前任者の杜撰な資料管理、複数の人間が何度も変更した様子がある設計やシステム、絶対的に足りない日程に、プレシアとそのチームは毎日悪戦

苦闘の日々をおくっていた。
当然帰宅は毎日の様に遅くなり、アリシアは寂しげな表情を見せることが多くなった。

そもそも初めから不可能領域にあったスケジュールは、進捗を眺めた上層部によって幾度も修正・見直しが行われ、その度に新たな機能やシステムの追加案が一方的に出された。

なんとか組み上げたものが台無しにされ、何故そんなものが必要なのか判らない機能を追加させられる。依頼元の大手メーカーから直接降りてくる命令であり、新任主任のレベルではそれらに反論する権利すら与えられていなかった。

疲労と心労が重なり始めたチームをプレシアはなんとか励まし、懸命に開発を続けた。

この厳しい仕事をなんとかクリア出来れば、プレシアはかねてよりの希望だった管理部門に転属できることが決まっていた。

管理部は残業や休日出勤がいくらか少ない。

責任は大きくなるが、それだけの働きをする自信がプレシアにはあり、周囲もそれを認めていた。
そして、休日が多くなれば自分と幼い子との時間が多く取ることが出来るようになる。

アリシアが好きな週末のピクニックにも、もう少し大きくなったらきっと行きたがるであろう様々な遊興施設にも、ちゃんと連れてい

ってやれるようになる。

だからこそ、この仕事は問題なくやり遂げなければならなかった。

しかし、開発に終わりが見える気配はいつまで経っても訪れなかった。

上層部からの無茶な要求や、次々に入れ替わる指示や一方的な決定。それらに嫌気がさしたチームスタッフ達は一人、二人と現場から離れてゆき、プレシアはそれらの事後処理と再度の計画見直しに追われ続けた。

そして、本部から訪れた新たな人材が、プロジェクトの内情を支配し始めた。

「主任補佐」の肩書きで、立場上はプレシアの部下となっていたが、彼が現場を支配した。

本来は重要な確認が必要なはずのチェック機構は、彼の手によって何項目も削られた。立ち入り調査がない安全基準については、事実上無視するよう指示が出された。

プレシアはそれに反対し、強く抗議した。

現在開発している駆動炉は、つい最近理論が確立されたばかりの新たなエネルギー変換機能を使用している。いくら安全基準や確認を無視して完成させたところで、事故や破損が起こっては期間も費用も大きく無駄となり、信用も落とす。

度重なるそんな説得も、依頼元には全てが無視された。

主任補佐の遂行した「効率化」によって、プレシアが進行していた時よりも開発の進行が良くなっていたからである。

チームスタッフ達もその効率化には強い反対を示し、プレシアの意見が通るよう尽力したが、強い態度で望んだ者達は全て異動され、主任補佐の関係者が後釜に座った。

プレシアはそれでも諦めることなく、懸命に安全確認を行い、事故だけは起こらないよう最善の注意を払った。

大魔法を扱う魔導師だからこそわかる、巨大な力を扱うことへの畏

怖。
　魔法であれば、数十ある術式をほんの一行程間違うだけで暴発することがある。
まして、その駆動炉に使用されるエネルギーは、大気中の酸素を消費して魔力を生み出す新機軸の燃料であり、正式許可はいまだに疑問視されている危険物ではある。大規模な駆動炉に至っては、安全確認をし過ぎて困るなどという事は一切無い。

駆動炉の実機制作が始まり、プレシアは研究室を離れて工場近くの研究室に詰めることになった。
自宅からは遠いため、会社に申請して開発室の一室を寮として借り受け、アリシアとリニスも一緒にそこで暮らすようになった。
自宅近辺よりも自然の多い土地故にアリシアとリニスの遊び場は増えたものの、すぐ近くにいながらも殆ど一緒には居てくれない母に、アリシアの寂しさはつのるばかりであった。
そんなアリシアを抱きしめつつ、プレシアは願っていた。

開発が終わったら、少し休暇を貰うこと。
今回の駆動炉に関しての実績は、主任補佐があらかた持って行くは

ずである。
それに関してはとやかく言わない。管理部勤めはもう少し先でも良い。
なんなら、仕事を変えても良いのである。
修士課程を終えた一流の魔導師であるプレシアは、勤め先に困ることもない。
とにかく、たった一人の娘に寂しい思いをさせたくない。
プレシアは毎夜そう思っていた。

開発は、報告書上では順調に進んだ。
実機は組み上がり、燃料を入れての稼働実験まであと僅かとなった。
もはや殆ど安全チェック選任となっていたプレシアとそのチームだったが、燃料実験直前には、実機への接触が事実上禁じられていた。
疑問に思いながらも、設計図と確認書での安全チェックを続け、現場の工員に対しての安全基準マニュアルの作成に努めた。
その精度は上層部にも認められ、プレシアは特例として、主任職の他に「安全基準責任者」という役職を受けた。
素直に喜ぶ気にはなれなかったが、最初の稼働の終了と確認後、5日間の休暇が約束されたのは嬉しかった。

だが、その事故は誰もが予想しない形で、誰もが予想しえない規模で発生した。

稼働実験のための燃料注入の際、機関の一部が勝手に稼働を始めたのである。

プレシアはその時、修士生だった頃の友人を集め、稼働時の危険を防ぐための防御結界の展開指示を行っている最中だった。

プレシアは確かに、燃料注入は結界の展開が終わってからするように伝えた。

しかし、主任補佐は、遅れ始めた稼働実験の時間を効率よく修正するため、まさか危険があるとは思えなかった燃料注入を前倒しにしたのである。

プレシアが事態に気づいた時には、すでに機関の６割が稼働を開始していた。

緊急停止コードも受け付けなかった。
そうして、その時初めてプレシアは気づいた。
自分が申請し、書類上は受理されたはずの安全装置が、殆ど何も成されていないことに。
絶望しながらも、プレシアとそのスタッフはなんとか機関の暴走を停止しようと、このままでは爆発の危険がある駆動炉を、あらかじめ確保してあった安全地区へと転送することを申し出た。
しかし、上層部と主任補佐は、転送を不可とした。
停止は出来るはずであり、転送してしまっては再度実機の作り直しとなる。
暴走させないため、危険をなくすための安全基準をプレシアが作っているはずであると。

プレシアは後にこの時のことを夢に見て、死ぬほどの後悔で幾度も悶え苦しむことになる。
退職させられようと、賠償金を支払うことになろうと、転送させてしまえば良かったと。
この時が、プレシアが自らの運命を選ぶことが出来た最後の選択肢だったのである。

結果は、ごくあっけなかった。
緊急停止のための反応装置が、具体的な引き金となった。
本来その駆動炉が生じるはずの莫大なエネルギーは、予想を遥かに上回る破壊力を持って駆動炉を破壊し、その衝撃で工場内部は酷い

被害を受けたが、かろうじて張られたプレシア達の結界により、見学者やスタッフ達は被害の第1波を逃れることが出来た。

燃料だったエネルギーは付近一帯に爆散し、目を開けているのも辛いほどの金色の魔力光に包まれていた。エネルギーのすべてが反応を得て光と温度に変わっているのである。付近はまるでサウナの様な暑さだったが、正しい反応法でも特定濃度でもないため、熱や爆発による二次被害はないように思えた。

だが次の瞬間、プレシアや魔導エネルギーに詳しいスタッフは慄然とした。エネルギーの全てが反応しているのである。

そしてそのエネルギーは酸素と反応し、酸素を消費して光と熱に変わっている。

自分達が張っているのは、大気中の毒物や粉塵にも対応できる完全遮断結界である。

“だが、外の生物は……”

寮の一室で、アリシアとリニスはいつものように、遊び疲れて居眠りでもしているかのような姿で居た。
アリシアは部屋のソファにもたれるようにして横になり、リニスはその足元で前足をのばすような姿勢でうつぶせていた。
その脇には、先行していた医療スタッフが携帯用の酸素マスクを手に無言でうつむいていた。

プレシアは寮の部屋にも万が一に備えて防御の結界を張っており、爆発や災害がアリシアやリニスに被害を及ぼすことがないよう気遣っていた。
だが、酸素に反応する微粒子状のエネルギーはそれとは無関係に結界内に入り込み、付近の酸素を食らいつくしたのである。
さらに肺から吸い込まれた微粒子は、血中の酸素とすら反応する。
おそらくはわずか数呼吸、苦しいと思うより先の死のはずだった。
プレシアは娘と猫を見下ろし、まるで呼吸が出来なくなっているような感覚に襲われていた。いまだ付近の酸素が薄いというのは勿論ある。
だがそれ以上に、目の前の現実を受け入れることができなかった。
なにが起こったのか、何が起こっているのかが、うまく理解できな

かった。

ふと、プレシアはテーブルを見た。
子供用画材が散らばっているその脇に、アリシアのスケッチブックが落ちていた。
プレシアが見せてと頼んでも、恥ずかしいのかアリシアはなかなか見せてくれなかったスケッチブックだった。
プレシアは呆然としたままそれを手に取り、開いた。

そこには子供らしいつたない絵が何枚も描かれていた。
ケーキやクッキーといったお菓子の絵や、リニスをスケッチしたらしい絵があった。
だが、ページのほとんどは、ある女性の絵で埋まっていた。

「おかあさん」と脇に書かれた、優しく微笑むプレシアだった。

数秒の間をおいて、プレシアは声にならない声をあげた。
何かが壊れたような、まるで永遠に続くようなそれは、すでに声ではなく、慟哭だった。

プレシア・テスタロッサ（後書き）

後書きコーナー

ユウ

「今回はプレシアさんが関わっていた最新駆動炉実験の話でした」

相馬

「次回は駆動炉暴走後の話と、プレシアさんがアリシアを蘇らせる実験の話らしいな」

ユウ

「それでは次回「F（フェイト）」でもリリカルマジカル」

ユウ&相馬

「「頑張ります！！」」

相馬

「なあ、この台詞、俺達が言わなくちゃ本当にいけなかったのか？」

ユウ

「……言うな」

F（フェイト）（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様感想ありがとうございます！

今回でプレシアの過去編は終了します。
ちなみに活動報告で言った話す時に名前を書くかどうかですが、書かないことにし、全話を修正しました。

感想などを頂けたら作者の気力が高まります。

小説を読んだ皆、オラに感想を送ってくれ～

F（フェイト）

事件の原因究明に、管理局は立ち上がることはなかった。
安全基準の設計ミスは安全主任であるプレシアにかけられ、それに断固抗議したプレシアは会社を告訴し、事件については裁判で争われた

しかし、裁判でプレシアに勝ち目はなかった。
安全基準を担当したのはプレシアであり、それを管理しきれなかったのはまぎれもない事実だった。そして社は告訴を取り下げれば、プレシアの刑事責任を訴えることをせず、不幸な被害にあったアリシアについての賠償金を支払うとの意志を示した。

逡巡の末にプレシアはそれを受け入れ、ミッドチルダ中央付近から姿を消した。
事件については、プレシアが違法な手段で、違法なエネルギーを用いて行ったものであり、安全確認よりもプロジェクト達成を優先した、という形で記録が残ることとなった。

その後、プレシアは地方で魔導研究に従事するようになる。プレシアが就いたのは、当時は研究者の間で話題になっていた研究だった。なにかに取り憑かれたような没頭ぶりで次々と成果を上げていくプ

レシアに、新しい職場の同僚は恐怖すら覚えていた。
数年間のうちにいくつかのプロジェクトを成功させ、プレシアは作業成果と特許料によって大きな富を得、いつの間にか職場から消えていた。

プレシアが欲していたのはある研究のための資金であり、ノウハウだった。

アリシアの賠償金と自ら得た富により、プレシアは移動庭園を購入した。
以前の持ち主によって「時の庭園」と名づけられたそれは遺跡級の年代物であったが、動きさえすれば問題なかった。
アリシアとリニスの遺体は、保存液で満たしたポッドに厳重に納めていた。
「遺体の保存」であれば、より永時性の高い保存法もあったが、アリシアを遺体扱いする気はプレシアにはなかった。
死んではいないのだ。
ただ、眠っているだけなのだ。
保存液で眠る愛娘の目覚めを得るため、プレシアは時の庭園内部でひたすら研究に没頭した。

最初は、極小生物から始めた。

次に昆虫。爬虫類。そして、小型のほ乳類。

プレシアが達成しようとしたのは命の創造と再生だった。

そしていずれの動物でも、プレシアはそれらの創造と蘇生に成功していた。

だが創造自体は使い魔の大成と大差なく、誕生するのはあくまで魔法生物である。

蘇生も、死の直後でごく短時間であれば可能であったが、完全に死亡し終えたものを蘇らせることはできなかった。

「生命蘇生」は魔法における最大の不可侵領域である。

不可能領域と言い換えても良い。

魔法は、自然摂理や物理法則をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで作用に変える技法である。

生命を稼働中のプログラムとするなら、死はそれを完全に消去してしまう作業である。

数行壊した程度ならば修正も可能だが、莫大なソースをすべて完全

に消してしまった状態から、同じ状態で復帰させることはできようはずもない。
そしてプログラムが消えた瞬間に、プログラムを走らせていた容れ物も壊れる。
壊れた容れ物には、どんなプログラムを入力しても動くことは決してない。
動かすことは不可能ではないが、それは糸をくくりつけたり機械をいれたりして動かすのとそう大差のない行為であり、元の姿を取り戻すのからはほど遠い。
それが、魔法という技法から見た「死」の概念である。

そこでプレシアが考えたのは、任意のプログラムを書きこむことが可能な「新たな容れ物」としての人造生命の開発。そして、その人造生命への記憶転写だった。
方法はあった。
こんなことのためにではなかったが、アリシアの記憶はある程度保存してあった。
素材としてアリシアの体細胞を使用し、できあがった体にアリシアの記憶を与える。
アリシアの記憶を持ち、生前と変わらぬ姿を持つならば、それはプレシアにとっても、アリシアにとってもアリシア本人のはずだった。
人造生命研究の職についていたころ、開発チームは昔にあった研究から「プロジェクト　F．A．T．E」と名づけていた。
プレシアはその後の研究を合わせ、わずか数年で完全なる素体を完成させていた。
ポッドで眠るアリシアと寸分違わぬ姿。
培養液に浸かりながらも、静かに呼吸をするその体にアリシアの記

憶を転写され、「容れ物」は「新たな命」として目を覚ました

プレシアは悲願の達成を心から喜び、「アリシア」が全ての記憶を取り戻し、これまでのように微笑み始めるより先に、リニスの蘇生を行うことにした。

同様の方法で蘇生を行っても良かったが、猫の寿命はさほど長くない。
この方法で蘇生させた命は、本来の生命と同程度の寿命しか生きないのである。
いずれ訪れるリニスの死にアリシアが悲しむのは見たくなかった。
だから、主が生きている間は、完全破壊されるか契約破棄をしない限りは命を続ける　使い魔とすることにした。
より賢く、より主の心を汲む良きペットとするべく、プレシアはリニスを自らの使い魔として蘇らせた。

やっと戻ったかと思った「親子」の関係に、翳りが落ちるのは早かった。

様々な事が、違っていたのである。
蘇った「アリシア」はいまだ意識が曖昧なままながら、簡単な会話程度ならすることができた。
声は、寸分違わぬアリシアの声だった。
だが、喋り方にいくらかの違いがあった。
何がどう、というわけではない。単に意識がはっきりしないだけなのかもしれない。
しかし違和感が消せなかった。
プレシアは、「アリシア」を喜ばせたい一心で、使い魔として蘇らせたリニスを見せてみた。だが、「アリシア」はリニスのことを覚えていなかった。
懸命に説明しても「アリシア」はきょとんとするばかりだった。
だが、それでもおとなしくしている猫がかわいいのか、“右手”を伸ばしてリニスの頭を撫でた。
プレシアは愕然とした。
“この「アリシア」は右利きだった。”
それでも目の前の少女がアリシアであって欲しい一心で、さまざまなことを教え、思い出してくれるよう努力をした。

だが少女が記憶していたのは母との楽しい思い出ばかりであり、母に対して抱いていた深い愛情のみだった。

そして、数日が過ぎた時点で違和感は確信に変わった。
アリシアが受け継ぐことのなかったプレシアの魔力資質が、少女に

は正しく受け継がれていたのである。
そして、少女の魔法光は金色だった。雷光の煌めきのごとく美しく輝くその色は、プレシアにとっては自分から全てを奪った、あの忌まわしい光の色と同じに見えた。
もう、駄目だった。
目の前の少女が遠慮がちな笑みで自分を見上げる視線も、アリシアにそっくりな姿も、金色の魔法光も、すべてが自分の失敗を証明し、嘲笑っているかのようだった。
そしてこの「アリシアではない何か」は、自分の愛情やアリシアの過去を奪い取ろうとする、得体の知れない悪魔のごときなにかに見えた。

プレシアは一度少女を眠らせた。
そして、アリシアから転写した記憶のうち「自分がアリシアと呼ばれていたこと」を削除した。
なにかのきっかけでそれを思い出すことはあるかもしれないが、そんな事はもはやどうでもよかった。
廃棄してしまっても良かったが、曲がりなりにもアリシアの姿をした者を手にかけることは出来そうになかった。
そして、自分の魔力資質を継いでいるなら「使える」とも踏んだのである。
今回の方法が駄目だったとなると、ここから先はもはや明確に違法・禁忌の術となる。
そのための実行役が欲しかった。
幸いにして、少女は自分を母だと思いこんでいる。
それを利用すれば、懸命に働くだろう。
そういった意味では、いちいち詳細に命令をせずとも自律的に行動

できるという性能も有難い。
だが、それらの実行役として、一通り戦技や魔法を使えるようにするための教育者がいる。
ふと、足元の猫が自分を見上げているのに気がついた。
きちんと座り、命令を待つかのようにじっとおとなしくしている薄茶の山猫。

そうしてプレシアは、もう一つの失敗に気がついた。
アリシアが拾ってきた本当のリニスは、こんな猫ではなかった。
主人の都合など考えずに足元にじゃれつき、所かまわず背中を擦りつけて抜け毛をちらかす。気が乗らなければ呼んでも来ないが、来て欲しくない時にはよく甘える。
そんないかにも猫らしい猫だった。

だがいま足元にいる、主人を思い、主人のために行動できることのができる魔法生物は、リニスの姿こそしているが「リニスではない何か」だった。
使い魔にするということは、つまりはそういうことでもあった。

アリシアの偽物と、リニスの偽物。
偽物同士、まとめて放っておけば良いということにプレシアが気づくまで、そう時間はかからなかった。

人間を育てるのに比べ、使い魔を育成するのははるかに容易である。
自らの知識と技術を圧縮して送り込むことで、上手くすればひと月あまりでほぼ完璧に近い使い魔が完成する。
プレシアの魔力を受け継ぎ、プレシアが保有している多くの魔法や知識を操る教師。
維持は大変だが、ずっと生かしつづけることもない
育成が済んだ時点で契約を終了して消滅するよう契約すれば、面倒も減る。

そうして作成したリニスに人の姿を与え、あの偽物を育てさせればいい。
独立した人格を持つであろう使い魔に事情のすべてを説明するのは面倒だったし、妙な忠誠心を持って自分の目的を邪魔されたり、離反されても困る。
真実を伝えることなどない。
研究で忙しい間、自分の娘の面倒を見て一流の魔導師に仕上げて欲しい、と命ずれば、もとが母性の強い山猫である。愛情を持ってあ

の偽物を育て上げるだろう。

あの偽物をアリシアと呼ぶのは嫌だったが、名前がないというわけにもいかない。
数秒考えて、プロジェクトの名「F．A．T．E」……フェイトとでも呼べばいいと気づいた。
名前を考えてやったりしては、まるであの子の親のようではないか。
アリシアは自分のたった一人の娘であり、妹などいない。

何故アリシアの記憶を容れたのにもかかわらず、アリシアとは違う「何か」が生まれたのか。プレシアはまず、この研究の元となった「プロジェクトJ．O．K．E．R（ジョーカー）」（以後プロジェクトJと書く）を調べることにした。

「プロジェクトJ」とは、過去の英雄ベルカなら聖王オリヴィエ・ゼーゲ・ブリヒト、覇王クラウス・イングヴァルト。
地球でいえばアーサー王やクーフーリン、神話ならヘラクレスとい

った英雄の意識と経験を得たクローンを造り出す、そして極めつけは、ベルカ大戦時代、どの王よりも強かったが、魔法の才が無かったために迫害され、人知れず民から王と呼ばれた歴史に残らない王、その名も拳王。魔力を持ったクローンに拳王の経験を埋め込めば最強の戦士が誕生する。そう、このプロジェクトの名前通り最強のジョーカー（切り札）が。

プレシアはこの資料を見て愕然とした。プロジェクトFの原点の研究がこんな研究だったことに。

確かに、この説明だけを聞けばそこまで驚くような話ではない。過去にはもっと凄い研究をしていた機関もあった。

しかし、このプロジェクトJは他の研究とは次元が違った。この研究では、クローンに他の意識を入れる、つまりは一つの体に二つの人格が入ることになる。当然拒絶反応などがあり、成功体は少なくなる。さらに、いろいろな薬品を投与し入れた英雄とほぼ変わらない肉体を短時間で造り上げる。そんな研究では量産は難しく、現にこの研究で成功体は7つしかなく、今は禁止されている。

資料を見終え、眠りについていたプレシアは久しぶりにアリシアの夢を見た。

それは、アリシアとリニスとピクニックに行った時、この時プレシ

アは駆動炉の仕事であまりアリシアに構ってあげられず、久しぶりの少ない休みだった。
この辺りからか、アリシアは我が儘を言わなくなり、心配かけまいとしていたが、この時アリシアは私に我が儘を言った。
それは、「妹が欲しい」といったものだった。

夢から覚めたプレシアは今の状況を考えた。
アリシアの妹にあたるフェイトには寂しい思いをさせているこの状況は、昔、自分がアリシアにさせてしまった状況と同じではないのか。
そのことに気づいたプレシアはフェイトに会って、自分のことを話してきちんと愛情を注ぐためにフェイトの元へ駆け出した。
しかし、それを近くで見ていたのであろう男に眠らされた。
最後に見たのは自分のデバイスになにかをしている男、それは奇しくも資料で見たプロジェクトＪの成功体の一人だった。

F（フェイト）（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんなわけで、最初は原作通りですが、プレシアさんは途中で自分の間違いに気づき、催眠のようなもので操られていたという設定にしました」

ユウ
「次回は現実に戻りフェイトとアリシアの問題を解決します。アリシアについてはまだ募集を続けているので意見をお願いします」

赤黒
「というか、監理局が来てないのに、次で無印終わるんじゃないか？」

ユウ
「まぁ、その辺りは作者の文才次第と言うことで」

赤黒
「うう。文才が欲しい」

ユウ
「それでは次回の黒衣の死神「死者蘇生って思っているより難しく無いんじゃないかと思う」を」

赤黒&ユウ
「「お楽しみに」」

死者蘇生って思っているより難しく無いんじゃないかと思う（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様感想ありがとうございます！！

死者蘇生って思っているより難しく無いんじゃないかと思う

～ユウｓｉｄｅ～

あ～あ。何かシリアスな空気になっちゃったよ。俺、こういうの駄目なんだよね～。
よし、ここは空気を変えるために俺が一肌脱ぐか

《言わせませんよマスター》

「《なぜだ。この空気を変えられるのは俺だけだろ！》」

《マスターが一肌脱いだら違う意味で変な空気になってしまいます！》

「《なんだと！！まるで、いつも俺が変なことを言ってるみたいじゃねぇか！》」

《そう言ったんですが、伝わってないみたいですね》

「私達がシリアスな空気になってるのに、デバイスと一緒に何やってるのかしら？」

「「はい。スイマセンデシタ～！！！！」」

「……ぷっ。あっははは」

「《ふう。やっとフェイトは笑ってくれたか。あ～あ、めんどくさかった》」

《何言ってるんですか。本当にめんどくさいのはこれからですよマスター》

「母さん。ひとつだけ、質問してもいい？」

「なにかしら？私に答えられるならなんでも答えるわ」

「私は、今でもアリシアの代わり？それとも……」

フェイトが次の言葉を言いきる前にプレシアはフェイトの体に抱きついた。

「何言ってるの。操られていた時はともかく、今は私の大切な娘よ」

「母さん……母さん～～」

フェイトがプレシアの腕で泣き出し、フェイトの頭をプレシアは優しく撫でていた。フェイトの生まれや、今までのプレシアのこともあるが、この瞬間だけは誰の目にもこの二人は親子に見えた。

「良かったねぇ。フェイト、あんなに嬉しそうに笑ってるよ」

「さて、感動のシーンはこのくらいにして、そろそろ本題に移ろうぜ」

「……（ジー）」

「……（ジトー）」

≪……（ハァ）≫

「なんでみんなして空気読めよみたいな目で、俺を見るんだよ！！」

《分かってるじゃないですかマスター》

「うっさい。バッラバラに分解してやろうか」

《調子に乗りました。スイマセンマスター！！》

「ハァ。まぁいいか。それでプレシア、約束だった組織の情報は？」

「ええ。確証は無いけれど、私をデバイスを使って操った人間は貴方の言った組織の人間だと思われるわ。あとそのその組織の名前だけれど、今大きくなっている反管理局組織の名前に貴方が言った組織が合ったわ」

「へぇ。正直見つかるとは思ってなかったが、プレシアさんの能力を甘く見てたよ。それで、その組織の詳しい資料は？」

「この組織の資料だけれど、残念ながら組織の名前と活動内容しか分からなかったわ」

「それが分かっただけでもたいしたもんだな」

「お兄ちゃん、この組織がどうしたの？」

「それは私も聞きたいわね」

「聞きたいって言ってもそんな深い関係じゃないぜ、ただ……」

ユウは一度言葉を切り、言葉を続けた。それはこの中でユウと関係の深いフェイトですらも聞いたことの無い声だった。
それは、自分の感情を無理矢理押さえ込んで出した声だった。

「ぶち壊してやりたいだけだよ」

「とまあ、この話は置いといて、アリシアをどうする?」

「どうするってどういう意味かしら?まるで、アリシアを生き返らせる方法があるみたいな言い方だけれど」

「いや、そういう意味で言ったんだけれど」

そう言った瞬間、プレシアがユウの胸ぐらを掴み、前後に振りだした。

「本当なの!?本当にアリシアを生き返らしてくれるの!!」

「か、母さん。お兄ちゃんが、そんなに降らないでよ～」

「……っは。ご、ごめんなさいね。アリシアのことになると我を忘れてしまうのよ」

「ううん。き、気にすんなよプレシアさん。俺も変なタイミングで言っちまったからな。
それで、話していいか？」

「ええ。大丈夫よ、今度は落ち着いて聞くわ」

「じゃあ話すな、この作戦の要は次元震を観測した管理局と、ジュエルシードを半分くらい持っていることだ」

そうして話し出した。この作戦はものすごくギャンブルせいの高い作戦で、プレシアも、そして一緒に戦っていたフェイトとアルフでさえも成功するか疑問に思う作戦だった。

「ユウ、ホントにこんな作戦が成功するのかい？」

「まあ、大丈夫だろ。信じているからな」

「誰をだい？」

「決まってるだろ。アイツのビックリ能力をだよ」

そうしてテスタロッサ家と死神は、禁忌とされている人体蘇生を成功させるために動き始めた。
この作戦が成功するかは神のみぞ知ることだろう

そして、『時の庭園』とは違う次元空間にその艦は航行していた。
次元空間航行艦船『アースラ』
時空管理局御用達の艦である。
艦長であり、時空管理局提督であるリンディ・ハラオウンはモニタールームへと向かっていた。
急がず、それでもゆっくりでもない。それが、彼女が歩く速度だ。
モニタールームに入ったリンディは任務中の数名のスタッフに近況を尋ねた。

「みんな、どう？今回の航行（たび）は順調？」

スタッフは皆、リンディに視線を向けた。

「はい。現在（せんそく）第三船足（船の速度の事）にて航行中です」

「目標次元到達には今から凡そ百六十ペクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが二組の捜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

艦長席に座りながらリンディはオペレーター達の報告を聞き、今後の対策を練ろうとする。

「失礼します。リンディ艦長」

少女といってもいい年代の女性が紅茶を淹れたカップを持って、リンディの前に置いた。

「ありがとねエイミィ。そうね、小規模とはいえ次元震の発生は…ちょっと厄介だものね」

リンディは紅茶を眺めながらも真剣な表情で今後を語る。

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと……。ね？クロノ」

リンディは全身黒づくめの少年に声をかける。

クロノと呼ばれた少年は自信に満ちた瞳を持って艦長席へと振り向く。

「大丈夫。わかってますよ艦長」

一枚の銀色のカードを持って、自信を持って答えた。

「僕はそのためにいるのですから」

そして、時空管理局が地球に到着し、この事件に関わっていく。しかし、誰も、これがすべて一人の計算通りの行動だということに、

今はまだ気づくことはない。

死者蘇生って思っているより難しく無いんじゃないかと思う（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「５００００ＰＶ８００００ユニーク達成しました！！」

ヒューヒュー、ドンドン、パフパフ

ユウ
「うん、良かったんじゃないか、そろそろ無印も終わる頃だしな」

赤黒
「次回、「ＫＹは病気ですが、お医者さんに相談されても困ります」あの伝説級に空気が読めない執務官が登場します」

ユウ
「（えーと、なになに）なお、感想を頂けたら作者の文才が上がるかも知れません」

赤黒
「カンペを読みながら言うな。
それでは次回も」

赤黒&ユウ
「「お楽しみに」」

KYは病気ですが、お医者さんに相談されても困ります（前書き）

最新話を更新しました。

今回、ようやく相馬が出てきます。

（ちなみに今回の後書きコーナーはお休みです）

―相馬ｓｉｄｅ―

なんだかんだあったが、こっちのジュエルシードはこの前のを入れて５つ、アイツらは多分６つ、残りが１０個か。この世界が「魔法少女リリカルなのは」とは少し違うみたいだがら、ジュエルシードの発動場所が同じだといって原作と同じようにこれからも話が進むとは限らないからな。
だけど前回のジュエルシードを封印しに行ったとき、小規模な次元震が起きたからもしあるならそろそろ管理局が来てもおかしくない。
そして俺達が管理局と繋がればまたアイツと、ユウ・クロサキとジュエルシードを賭けて戦うことになる。
なのはフェイトと話すために、俺は……

「投影・開始（トレース・オン）」

……とりあえずぶっ飛ばす為に……

夜……

「ってここはどこだ！？」

「ここは天界。って私に会うとき同じようなことしか言ってないような」

「き、気のせいじゃないですか？」

危なかった。そんな事言われたら俺にボキャブラが足りないみたいじゃないか。

「ああなるほど。ボキャブラリーが足りて無いんですね！」

「なぜそれを！俺のトップシークレットなのに」

「いや、トップシークレットと言われても、普通に思ったことを読んだだけですけど……」

「そう言えば前に来たときもこんな会話しましたね」

「覚えていたならやらないでください」

「それで、今回はなんで俺を呼んだんですか、ゼウスさん？」

「ええ。貴方も気づいてるかも知れませんが、ユウと戦うと今の貴方では勝てません」

「はい。気づいてました」

分かっていた。アイツの戦い方は英霊エミヤと同じ、今までの経験を使って戦うから心眼なんかもあるだろう。そして俺はアイツとは違い、圧倒的に戦闘経験が足りない。どうすれば……

「それを解決するために貴方を呼んだんです」

「はあ、それで何ですか？」

「それはですね。貴方が使うＦａｔｅのあるサーヴァントの能力と、英霊エミヤが使う固有結界……でしたっけ。その枷を外すことです」

「え！？ホントですか！！ってそう言えばエミヤの投影以外の能力使えなかったんですけど……」

「フゥ。気づいてなかったみたいだから説明しますけど、貴方はまだ体が出来ていないので、負担が少ない魔眼と投影、そしてランクＡレベルの真名解放しか使えないようにしていたんです。しかしそれだけではユウには勝てないでしょう。だからあるサーヴァントの能力と英霊エミヤの宝具、固有結界の枷を外してあげようと言うこ

とです」

「ホントですか！！」

ヨッシャー。確かに魔眼と投影だけじゃユウと戦うのは難しいからな。手札が増えるのは願ったり叶ったりだ。

「ですが、一つだけ注意しておきますね。サーヴァントの能力はそのままにしておきますが、固有結界の使用は本当の本当に最後にしてくださいね。何度も言いますが、貴方はまだ体が十分に出来ていない。貴方の将来になにか悪影響が出るか分かりません、最悪大量の魔力使用で死んでしまうかもしれないんです」

ゼウスさん……。ホントに俺のこと心配してくれてるんだな～。なら、

「大丈夫ですよ。俺はまだこんなところでは死にません」

ゼウスさんにこれ以上心配をかけないよう強がるしか無いじゃないか

「まったく、ユウとおんなじこと言って。（ボソボソ）」

「え？何ですか？」

「なんでもありません！！」

「そんな大きな声で言わなくても」

「私の話はこれで終わりですから、そろそろ地上に帰しますね」

「はい！何から何までありがとうございます！！」

「ふう。相馬さんは帰っていきましたか。彼ならユウのことを変えてくれるかもしれないから、ホントは平等でなきゃいけないんでしょうけど、頑張ってください相馬さん」

夜……高町家

っは、帰ってきたのか。ならアイツとはいつ戦っても良いように、新しく貰った力を明日試してみるかな。まぁ、でも今は

「さっさとあがってジュエルシード探しに行こう。こんな長い時間風呂に入ってたら逆上せちゃうよ」

まったく、呼び出す時くらい考えて欲しかったですよ、ゼウスさん

……

l???sidel

そこは、吹き抜けのホールのような場所だった。
雰囲気としては、証券取引所に近い。
一人の女性が、最も高い位置にある仰々しいシートに腰を掛け、モニターを眺めていた。
そこには、何らかのグラフがリアルタイムで更新され続けている。
そして、その中の一つが、極端に跳ね上がった。

ビーッ！　ビーッ！

途端に鳴り響く警報。

「魔力反応！　ランク、ニアＡＡランク！　こちらはジュエルシードと思われます！」

「隔離結界が張られています！　現地への被害、まだありません！」

「ですが、魔力パターンが局のデータベースにありません！」

「他にも、ＡＡＡランク、ＡＡランクの反応が多数！」

「と、ＡＡＡランクが多数！？」

「ＡＡＡランク級の反応、ジュエルシードと思しきものと戦闘に入りました！」

「艦長！　指示を！」

「現地には、クロノを向かわせます」

指示は、一言。だが、それを耳にした局員達は、指示通りに行動を始める。

「現地への転送魔法使用許可、下りました！」

「転送ポートの準備、ＯＫです！」

「艦長」

彼女の隣に控えていた一人の少年が、彼女に声を掛けた。十代中ごろの、黒髪の少年だ。目には、確固とした自信と、使命感が見える。

「出ます」

「ええ、頼みます」

会話は、最低限。だが、そこにあるのは、絶対の信頼。
彼は目礼し、その喧騒に包まれるブリッジを後にした。

―ユウside―

「おお、結界の張ってある所に行ったら、丁度ジュエルシードがあるなんてラッキー！」

「わぁお。生意気にバリアなんて張ってるよ」

「ジュエルシードは俺に任せてフェイトはあの白い魔導師を頼む」

「うん、分かった！」

アッチも俺と同じ考えみたいだな。なら

「相馬、封印魔法って持ってるか？」

「ああ、魔法じゃなくて魔術だがな」

もう魔術って魔法より何でもアリだな。

「じゃあ、俺がジュエルシードを露出させるんで、後よろしく」

「よろしくじゃねぇよ！！」

良いじゃねぇか、まったく

「そんじゃまあ、いくとしますか！ジェラス！サード・モード」

≪オーライ、サード・モードセットアップ！≫

ジェラスがフォルムを双剣から2丁拳銃へと変化した。しかし普通の2丁拳銃は片方が手のひらサイズなのに対し、もう一つは約二倍以上の大きさをしているのにもかかわらず、両方とも同じ色をしていた。全体的に黒いが、なぜか炎をイメージする、この銃の名は

「黒炎（コクエン）」

ユウがその名を呼んだ瞬間、体の周りをスフィアが現れた。その数はパッと見ででも百を優に超えていた。そして、

「穿て！！」

その言葉を合図に、百以上のスフィアがジュエルシードの暴走体である木に放たれた。
いくらジュエルシードの魔力を使い障壁があるとはいえ、大木をマシンガンで狙い撃ちするようなもの。障壁が耐えられる筈もなく、煙が晴れるとジュエルシードが宙に浮いていた。そこへ相馬が奇妙な短剣をジュエルシードに刺し、真名を解放した

「真名解放
破壊すべき全ての符（ルールブレイカー）！！」

破壊すべき全ての符（ルールブレイカー）

あらゆる魔術を破戒する短刀。直接的な殺傷力はナイフ程度でしかないが、魔力で強化された物体、契約という関係、魔力によって生み出された生命（ゴーレムや竜牙兵、肉体改造など。転生や完璧な生命の創造などは不可）といった魔術に関係するもの全てを「作られる前」の状態に戻してしまう究極の対魔術宝具。
裏切りの魔女の神性を具現化した魔術兵装。

相馬が使ったルールブレイカーは対ロストロギア用に改良した為、ジュエルシードの封印が完了した。

「さて、ここは若い二人が戦って勝った方がこのジュエルシードを手に入れるって事で良いか？」

「はい！」

「こっちは良いけどよ、なに企んでるんだ？」

「企むって程じゃない。ただ、フェイトは余り多くの魔導師とは戦ってないからな、そっちは純粋に魔導師に成りたてみたいだが、お互いに良い経験になればと思っただけだ」

「あっそ」

ユウと相馬は戦わず傍観することに決め、なのはとフェイトはジュエルシードの為に対峙した……フェイトの方は若干その気はないがユウにいいところを見せるために

決意を表すようにバルディッシュを構える。

≪デバイスモード≫

バルディッシュも形態を変化する。

「わたしは……わたしはフェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど……」

≪デバイスモード≫

レイジングハートも形態を変える。
なのははフェイトから視線を外さない。

「わたしが勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないってわかってくれたら……、お話聞いてくれる？」

「話くらい別に戦わなくても喋ればいいのに」

「「「黙ってろ（てください）（な）このＫＹ」」」

「シュン」

そんな二人とデバイスと使い魔の漫才をしている時、二人の魔導師が一気に加速して、間合いを詰めて互いのデバイスを振りかぶって、下ろそうとした。
絶対にぶつかり、何がしかの衝撃が起こると互いが思った。
だが、その衝撃はこなかった。
二人は驚く。
そこには全身黒尽くめの少年がなのはのレイジングハートを素手で受け止め、フェイトのバルディッシュを黒一色の杖で受けていた。

「ストップだ！」

少年はそう叫んだ。

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

相馬、ジェラス、アルフは同時にこの少年に対し、こう思った。

「（うわぁ、ユウ（マスター）より空気が読めない人間が居たなんて……）」

「っは、フェイト、ユウ撤退するよ！」

いち早く回復したアルフが魔力弾を放ち、逃げようとした。

「いや別に逃げる必要は……」

俺がアルフにそう言う前に、執務官が魔力弾をフェイトに撃ち、その衝撃で膝から血が出てきた。

白い魔導師が執務官になにか言っているが、まったく耳に入らない。

今俺が考えなくてはいけないのは、なぜフェイトから血が流れたか

だ。

――ドクン――――――ドクン――

「クッ、ハァハァ」

ヤバイ、早く『ヤツ』を追い出さねぇと

――良いじゃねぇか。俺と変われよ――

――ドクン――――ドクン――

うるさい、黙れ！さっさと俺の中に消えてろ

――フ、知ってんだろ？お前じゃ本気の俺は止められねぇってことを――

――ドクンッ――ドクンッ！――

止めろ、止めろっつってんだろ！！

――ドクンッ！―ドクンッ！――

さっさと、カワレッツッテンダヨ！！

――ドクンッ！！！――

突然苦しみ出したユウは、いきなり静かになり、

「ジェラス、枷を3つ外す」

そう言い切った。この言葉の意味が分からない全員は身構えた。ここに居る全員が感じ取ったのだ、ここに居る『ユウ』から発せられる殺気を

≪マスター？一体なにを≫

殺気が分からないジェラスは自身の主に問いかけた。しかし返ってきた返事はいつものユウなら決して口にしない言葉だった

「俺は命令したんだ。さっさとやるぞ、封印、一番から三番省略解放」

≪了解。一番から三番省略解放≫

その少ないやり取りをした瞬間、物凄い魔力が周りに広がり、ユウの見た目が変化し出した。

黒かった髪の毛は金色に、そして瞳は血のような赤。

そして『ユウ』が殺気を放ったまま全員に話しかける

「我が名は『火神幽』火神家当主にして千年を生きる鬼。そしてそこの餓鬼」

そして『火神幽』と名乗った『ユウ』は執務官を指差し宣言した

「とりあえず貴様は万死に価する!!精々惨たらしく死ぬがいい!!」

死刑宣言をした

時空管理局（前書き）

最新話を更新しますた

ー相馬ｓｉｄｅー

「バカな、お前は何を言っている?僕は管理局の執務官だぞ」

KYがなんか言ってるが無視だ、今は

「おいお前は……」

「お前だと!そこの雑種、我にもっと敬意を見せて話すべきだろう」

話聞け～!!お前は容姿から何まで完全に慢心王じゃねぇか!

「おい無視すんなよユウ」

「おお、お前は中々面白い力を持ってる奴だな、誇るがいい。我が貴様の名を聞いてやろう」

俺が言うことは決定なのね、ふぅ

「俺は剣崎相馬」

「ほう、なら相馬貴様には特別に我に質問することを許す」

「なら、ユウはどうなった?そしてその髪と瞳は一体……」

「そうだ!一体「黙ってろ雑種。誰が貴様に発言を許した」くっ」

「さて、質問に答えよう。言っておくが我はアイツの多重人格の内の一つなんてつまらない答えではない」

なんだ違うのか、なら一体……

「単純明解だ、ユウ、我、そしてもう一人は最初一つの人格として生きていたが、この体を媒介に使い始めた。ただそれだけのことよ」

「それじゃあ、アイツは3つの人格を持ってるってことか！」

「そうだ、しかし我が表に出る条件は少ない。体の血が足りなくなるか、ユウの大切な人間が血を流した時のみ。故にそこの雑種は万死に価する訳だ。さてそろそろ良いか？」

まあいいか。別にクロノは嫌いじゃないけど、今のは完全にクロノが悪いしな

「どうぞどうぞ」

「なら公務執行妨害で逮捕する」

クロノがそう言いながら飛び出そうとした瞬間、ギル……じゃなくて幽がクロノの目の前に立ち、蹴り飛ばした

「我が死ねと言ったのだ。とく自害するが礼儀であろう！」

そう叫び幽の周りにさっきのスフィアが待機していた。

「行け」

短い一言でスフィアがクロノへと突き刺さる

「くっ、」

クロノが足場を固め、プロテクションで幽のスフィアを防いでいた。
そして幽がクロノに近づこうとした瞬間、バインドで幽が捕まった。

「ほう、設置型のバインドか」

「ハァハァ、公務執行妨害で貴様を逮捕する。大人しく来てもらおう」

「そこそこやるようだが、雑種の分際で吸血の鬼の王、真祖たる我に向かって命令とは。だが、我は寛大だ。故に」

幽がバインドを破壊し、大型の銃を突きつけた

「我が誇る最強の一撃で消してやろう」

それが合図に幽の周りに回っていたスフィアが突きつけた銃に集まってきた

「闇をも照らす光だ、受けるがいい雑種」

幽が今まさに撃ち出そうとした時、俺がクロノの前に立った

「なんの真似だ？」

「ある程度ダメージを与えるのは良いが、殺すのは止めろ」

「ほう、なら嫌だと言ったらどうするつもりだ？」

「もちろん、お前を倒して止めさせるまでだ」

「そこまでにしてくれないかしら？」

俺達が互いを牽制し合っていたのを見かねたのか、モニターから一人の女性が現れた

「貴様は何者だ?誰の許可があって我の邪魔をする」

「私は時空管理局所属次元航行艦アースラの艦長リンディ＝ハラオウンです」

「管理局?ハッ。ここは管理外世界だと知ってこの雑種を送り込んだのか」

それについてはこの場で謝罪します」

ってこのままだったら話が進まないだろ

「気にしないで下さい。幸いこの子の傷も浅いみたいですから」

［それはよかった。それで、そちらの事情を聞きたいからこちらに一度来てくれるかしら？］

「我に貴様らの所にワザワザ行けと。頭が「まぁまぁ。分かりました」えぇい、邪魔をするでない」

だから話が進まないだろうが

［じゃあ、これから転送します。］

ミッドチルダ式によく似た魔法陣が展開され、四人の魔導師と二匹と屍は海鳴臨海公園から姿を消した。

かつん、かつん、と、俺達の足音が響く。

と、クロノが立ち止まり、俺達を……正確には、なのはの肩に乗るユーノを振り返った。って言うかいつ回復したんだ？……謎だ

「ここでなら、『変身魔法』を解除して大丈夫な筈だ」

ユーノは、今気付いたように答える。

「あぁ、確かに。これだけ魔力素があれば」

ユーノが変身魔法を解除するのか。なら知らなかったふりしないとな

「？」

なのはは分からなかったみたいで、首を傾げている。

「よししょっと」

ユーノの身体が光に包まれ、その光は大きくなり……

「ふぅ、やっと戻れた」

薄黄色のショートカットの、なのはと同い年くらいの子供になった。

「え、えええぇぇ～！？」

なのはは大いに驚いている。

「き、貴様……！？」

何となく、幽は予想はしてたみたいだ。アルフと一緒にいつも居るからか

「黙っててごめん。実は……」

「貴様、女だったのか！」

へ？

「……え？」

ユーノも驚いてるみたいだけど、俺も負けないくらい驚いている

「えっと、ユーノ……ちゃん？」

なのはも、頭が追いついていないようだ。

「女の子なのに、『くん』付けで呼ばれて嫌だったよね。ごめんね。これからは、ちゃんと『ユーノちゃん』って呼ぶからね？」

そうか。俺も、態度を改めないとな。相手は女の子（笑）なんだから。

「ん？どうしたユーノ？　ぷるぷる震えて。寒いのか？」

「駄目だよ、ユーノちゃん。女の子はお腹を冷やしちゃいけないって、先生も言ってたよ」

ユーノは、がばっと顔を上げ、叫んだ。

「ボクは、男だあああ！」

怒り狂うユーノをなんとか宥めすかし、クロノに呆れられながら、ある一室の前に来た。
文字は読めないが、多分、責任者が待っているに違いない。

「艦長、クロノです」

『入って』

ばしゅっ、とエアロックが外れ、扉がスライドする。

そして室内は……エセ和風インテリアで、飾り立てられていた。峠の茶屋にあるような、大きな和傘。ゴザを敷いて正座し、湯呑みで緑茶を飲んでいる。流石はリンディさん、ＳＦチックな白い内壁に、これっぽっちもマッチしていない。

「いらっしゃい」

ゴザに座り、艦長……リンディさんと、クロノと向かい合う。

……ところで、あのシュガーポッドにしか見えない物体はまさか、

「さ、お茶が入りましたよ」

差し出される湯呑み。

「……どうも」

匂いを嗅ぎ、一口。……ごく普通のお茶だった。

「お砂糖は？」

と、例の物体を開ける。中身は、白い顆粒。まごうことなき、砂糖だった。

リンディさんは、匙で砂糖を取ると……ばさっ。

入れた。緑茶に。砂糖を。

「……」

なのはが、怯えるように手を握る力を強めた。

――ばさっ。

もう一杯。

――ばさっ。

更に一杯。

そして、砂糖入り緑茶という、日本人としてはおおよそ認め難いシロモノ（リンディ茶）を、美味しそうに飲みはじめた。

（……オェッ）

テレビでは飲んでみたいと思っていたが、駄目だ。見ているだけで、口の中が甘ったるくなる。

それを見ていた幽が静かになったと思うと、髪も瞳もいつものユウに戻った。

「クソ、勝手に出てきて勝手に消えやがった。茶、貰うぞ」

ーユウsideー

「さて、まずはそちらの素性を明かしてもらおう。管理局というものについて」

相馬がそこの、リンディだったか。に問いかけた

「ええ、わかりました」

こうしてリンディさんから話を聞く。ふん、9割方嘘じゃねぇか…

……

「なるほど、世界規模の警察組織か」

「ええ、簡単に言えば、ですけど」

「なら疑問があるな。何故この『管理外世界』でそこの少年に『逮捕権』というものがあるのかを」

相馬も気づいたみたいだな。そう、この管理外世界では時空管理局の常識や法律は関係ない。

「それは申し訳ないことをしたわ。今回の件は、不問にします。」

「不問も何も、俺は元から無罪だ。『先に』攻撃してきたのはそちらだ。なんなら出るとこ出ても良いんだぜ」

「っ！」

ふん、こっちにプレッシャーを与えようったってそうは行かないんだよ。

「さて、ではユーノ・・・まさか人間だったとは思わなかったが、お前も説明したらどうだ？」

「え、あ、うん」

そして、ユーノはジュエルシードについての説明、この世界に来た理由を話した。

「なるほど、立派だわ」

「だが同時に無謀でもある」

リンディさんが感心し、クロノが呆れる。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収には、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ・・・・」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「悪いがそれは無理だ！」

「な、なぜそんな事がお前に言える」

「待ちなさいクロノ。そうですね、何よりまずは貴方の素性を教えていただきたい」

「ま、アンタなら検討が付いてるんだろうが」

そう言い、財布の中から一枚の名刺を見せた

「管理局特別捜査官、ユウ・クロサキだ。この事件はお前らが来る1ヶ月も早く権限を俺が持ち、捜査している」

「特別捜査官だと!?嘘を付くな。そんな名前は聞いたことがない」

「そらそうだ。特別捜査官は最低でも提督クラスでないと知り得ない。ちなみに階級でいったら提督クラスだ」

特別捜査官って、なんか凄そうだ

「お兄ちゃん。それで特別捜査官ってどんな仕事をしているの？」

「そうだな。わかりやすく説明すると、管理局の地位を利用する輩を逮捕したり、局員じゃ荷が重い事件を金で解決したりだな」

「管理局は正義の組織だ。利用する人間など居るハズがない！！」

ククク、正義の組織か……

「勘違いをしてるようだから訂正するが、去年でそのするハズがないと言った管理局員を何百人と逮捕してるんだが……」

「嘘だ！そんなわけが」

「それに、お前の母親からも依頼を受けた事があるしな」

「なっ！！！本当なんですか艦長！！」

「……ええ。本当よ」

「そんな……なら僕が信じてきた正義とは一体……」

「話を続けるぞ。《三人とも、話を合わせろよ》ユーノ・スクライアの話では、管理局に連絡したのは3ヶ月前。その3ヶ月間何もせず、いきなり後から表れ、アマツさえ『ロストロギア『ジュエルシード』の回収には、時空管理局が全権を持ちます』だ。でしゃばるのも大概にしろよ！！！」

俺も大概この取引にキレてるみたいだ。

「これからも『ジュエルシード』は二手に別れ、現地協力者の高町なのは、ユーノ・スクライアを剣崎相馬が中心に、同じく協力者のフェイト・テスタロッサとその使い魔のアルフを俺を中心に封印して行く。お前らはサポートとしてならこの件は不問にしてやろう」

どうだ！さっきのお返しだ。

「クッ。分かりました」

「なら私達は帰らせて貰う」

そう言い全員を転送ポートに乗せ、俺達の番になった……んだが、見ててイライラするな。仕方ない

「フェイト。先に行っててくれ、忘れものだ」

「分かった」

「よう執務官」

「ユウ特別捜査官！先ほどはとんだ失礼を」

「良いって。それより、信じてきた正義に裏切られた気分はどうだ？」

「正直、胸にポッカリ穴が空いた様です」

フェイトの為とはいえ、やり過ぎたな。

「これは俺の中の解釈だが、正義って言うのは悪と同じだ」

「なぜですか！？」

「正義とは人それぞれだからだ。管理局が正義なら、反管理局組織も、正義の為に動いてるからな。」

「なら僕たちがやってることは……」

「偽善だな」

そう言い残し、転送ポートに近づいた。

「あ、そうだ。偽善と正義の違いって分かるか？」

「？？？？？」

「多分、正義は名も知らぬ誰かの為に、偽善は知ってる人間の為に動くことだと思ってる」

最後にそれだけ言うと、転送ポートで海鳴臨海公園に戻っていった

時空管理局（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「さて今回のゲストは」

幽
「我が来てやったのだ。泣いて喜ぶがいい！！」

赤黒
「幽のイメージとしては、見た目ギルさん、性格、慢心無しの王様キャラです」

幽
「吸血鬼の王なのだ。アリを踏むのに慢心する必要がどこにある？」

赤黒
「次回「竜巻を止めたいな～♪そう、精々頑張って」を」

赤黒＆幽
「「お楽しみに（楽しみに待つことを許す」」

プロフィール3

プロフィール紹介
名前　火神幽（かがみゆう）

【年齢】　？？？歳

【身長】　１７８ｃｍ

【髪色】　金色

【瞳の色】　深紅

【容姿】　Ｆａｔｅの英雄王と同じ

【魔力光】　真紅

【魔力ランク】

？？？？

魔法術式・ミッド式　／古代ベルカ式

性格

【口調】　英雄王から慢心を無くした口調

【知能】　良い方だが、戦いでは頭ではなく、本能で戦うのであまり生かされない

【趣味】銃の試し撃ち

【特技】罵倒（本人に自覚無し）

【苦手なこと】話し合い（決してＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩではない）

【好物】苦い物全般

【嫌いな物】　甘い物全般

吸血鬼の王・真祖

ギルガメッシュの様に慢心するまでもなく、アリを潰すのに慢心も何もないらしい

戦いでは主に、サードモードと消滅の闇を多様する。

サードモードでは大量のスフィアを撃ちだし、スフィアを一点に集め止めを刺し、消滅の闇で防御する戦い方をする

ジェラスとは王と部下のような関係

フェイト（ブラコン王）ＶＳなのは（砲撃王）（前書き）

ｏｎｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様感想ありがとうございます！！

フェイト（ブラコン王）ＶＳなのは（砲撃王）

―相馬ｓｉｄｅ―

ユウがこの事件の権限を握ってから１週間で全てのジュエルシードが集まった。
そして、

「さあ楽しもうぜ相馬」

俺こと剣崎　相馬とユウ・クロサキが対峙していた。

「どうしてこうなった？」

それは二時間前にさかのぼる……

さて、これでジュエルシードは全部集まったな。え、海岸でのジュエルシードはどうなったって？

ありましたけど、

俺とユウ（チート組）がサクッと封印しましたけどなにか

「そう言えば今まで集めたジュエルシードをどうするんだ？ユウ」

「んなもん管理局に金で売りつける為に決まってるだろ」

「そんな不純な理由でジュエルシードを持たせられるか！」

「仕方ない。妥協して俺とフェイト、お前となのはが戦って、勝ったらジュエルシードを諦めてやるよ」

「なに仕方ないなぁ、って感じで妥協した見たいに言ってんだよ！妥協出来てないから」

「大丈夫！私負けないよ。フェイトちゃんに今度こそ勝ってみせる」

「私だって負けるわけにはいかない」

「アウェーか。俺アウェーなのか！？」

「気にするな。気にし過ぎるとはげるぞ」

「誰のせいだと思ってるんだ～～～～！！！！！」

そんな訳で戦うことが決まってしまいました。
ま、大丈夫か。原作だったらなのははフェイトに勝ってるんだから

そんなこんなでなのはとフェイトが戦うことが決まり、デバイスをセットアップしてから、しばしの沈黙が流れている。　フェイトの近接攻撃による踏み込み間合いからはやや遠く、なのはの射撃距離にはいくらか近すぎる。
そんな間合いにあって、二人は静かに視線を交わしていた。

示し合わせたわけでもなく、不意に二人が同時に魔方陣を展開する。
小型の魔方陣。詠唱不要の高速起動魔法だった

「ディバインッ！」

なのはの周囲に、桜色の光が次々と現れていく。

「ランサーセット！」

フェイトの周囲にも、雷光を纏う光球が一斉に発生する。
なのはの左手のレイジングハートが、真紅の水晶を輝かせる。

《ディバイン　シューター》

フェイトの右手のバルディッシュが、雷光色の水晶を瞬かせる。

《フォトン　ランサー》

それぞれの射撃魔法の発射体が、瞬く間に形成され、展開される。
なのはのディバインシューターが５つ、フェイトのフォトンランサーが４つ。

「シュートッ！」

「ファイアッ！」

それぞれの杖が降り下ろされ、射撃魔法が発動する。
高速飛翔するフェイトのフォトンランサーと、不規則に揺れながら弧を描いて飛ぶなのはのディバインシューター。並の魔導師相手であればたやすく防御を撃ち抜き、一撃必倒の威力を持つはずのそれらが惜しみなく撃ち放たれ、相手を目指して飛翔する。

「へぇ～。あの魔導師、結構強くなったんじゃないか」

「そう言うフェイトだってフェイトランサーのスピードが上がったんじゃないか」

「俺が鍛えたんだから当然だ。どうせお前の方も鍛えたんだろ？」

「いや、ある程度は教えたけど後は自分でなんとかしちまったよ」

「うわ、天才型かよ！」

……まぁ二人の師匠？であるユウと相馬に並なんて通じないが。

なのはは大きな回避運動で、ランサーをかわしてゆく。
直線飛翔のみのランサーは、大きく避けてもさほど問題がない。
もとより戦闘巧者のフェイトが、見合った状態からこんな避けやすい射撃を放つことに牽制以上の意味はない。なのはの防御は強力だが、受けることでも魔力は消費する。鋭く圧縮されたフェイトの攻撃であればなおさらである。激戦を見越して魔力温存のために選択した、本来は苦手な回避行動だった。
そして回避をしながらも、なのははすでに次の行動へと入っていた。
フェイトは襲い来るなのはのシューターの初弾を、紙一重の機動で回避する。
鋭い誘導をするなのはのシューターは、大きくかわすことができない。
回避するならば、寸前でかわさなければいけない。そして、それが同時に5発も飛んでくる。
フェイトほどの高速起動と回避能力があれば、自動誘導弾の捌き方はいくらでもあるのだが、なのはは任意の弾体を思念制御によってコントロール出来る。いまだ5つすべてのコントロールをすることはむりだが、二つ三つであれば同時に制御が出来る。
常に自分の死角を狙って飛来するシューターを飛ばさせたままでは自由な機動が阻害され、制空権を取ることが出来ないと考えたのかフェイトが動き、

「バルディッシュ！」

《イエッサー》

主の声に、戦斧が答えた。
バルディッシュの刃が角度を変え、近接攻撃専用形態『サイズモード』を使いぐん、と空中で加速をつけてフェイトはなのはに向かう。
迎撃のために襲いかかるシューターの弾体を、フェイトは光の刃で次々と切り裂いてゆく。ひとつ、ふたつ、みっつ。
不規則に揺れるシューターの光弾をあっさりと切り捨ててゆくその技量は、フェイトが積み重ねた鍛錬の密度がなさしめるものだった。
だが、４つ目のシューターは切り裂こうとした光刃をするりとかわし、フェイトを襲った

「……ッ！」

視界の端に、なのはが思念制御をしている様子が見えた。
危険。だが、好機でもあった。
フェイトはシューターを防御することをせず、空中で加速をつけてなのはに突撃した。

「！」

金の光を残して爆発的な加速をしたフェイトの斬撃がなのはを襲う
まずは一撃。
フェイトがそう思った瞬間、なのはの背中から一発のシューターが姿を現した。
無防備な自分を囮に、シューターを隠して迎撃するが、フェイトは動じない。

「アーク・セイバーッ！」

ぐん、と大きく振るった戦鎌から、光刃だけが射出され、ブーメランのように回転する光刃が正面から飛来するシューターを両断し、なのはに向かってゆく。

なのはがとっさに右手を挙げ、防御の魔方陣を発生させたが、フェイトの背後から迫ってきていたシューターの思念制御が外れ、目標を見失ったシューターは見当違いの方向へ飛んでいく
そしてアーク・セイバーを正面から防御することになり、なのはの魔力が削られる

「ああ、やっぱりあの魔法は最近作ったのか」

「もうフェイトにもばれちまったがな」

「そんなこと言って、どうせこの状況をひっくり返すような秘策を用意してあるんだろ？」

「まあな。そっちだって何か凄い技を隠してるんじゃないか」

「多分ビックリすると思うぜ」

「こっちも驚くぞ」

そんな会話をしながら、勝負は終盤に差し掛かる。

「《このままだとまずいね…なんか、動きが読まれはじめてるし》」

攻撃・防御・高速機動を繰り返し、なのはの魔力量は開始時の４割を切ろうとしている。

それはフェイトも同じだが、魔力残量が少なくなった時に取れる選択肢は近接戦闘ができるフェイトの方が圧倒的に多く、消耗戦で不利になるのは、基本的には一発の消費量の多いなのはの方である。

「《切り札は最後までとっとくけど…その前にちょっと、ひと勝負してみようか。付き合ってくれる？レイジングハート》」

《オーライ、マイマスター》

主の問いに、レイジングハートはどこか嬉しげに即答した。

背後から放たれたランサーを、なのはは振り向いて小さいプロテクションで弾いた

「……？」

フェイトの疑問の視線を受けながらもなのはは飛翔を止め、足元に大型魔法陣を、笑みさえ浮かべて自信満々に展開した。フェイトも静止し、様子を見る。

レイジングハートが魔法発動を上手く隠し、内部でどんな魔法を発動しているかは分からない。

罠かもしれない。フェイトはそう思い、バルディッシュもそう判断した。

しかしそれは、同時に好機でもあった。フェイトも同時に大型魔法陣を展開する。

フェイトの魔法の先生だったリニスから教わり、兄であるユウから改良のアドバイスを受け、詠唱のいらない必殺の魔法。

「いくよ、バルディッシュ！」

《イエッサー》

主の呼びかけに、閃光の斧が静かに答える。

フェイトの周囲に、フォトンランサーの光球がひとつ、ふたつ、みっつと次々に発生してゆき、その数はまたたく間に二十を越え、三十を越えた。

「あ……あれっ……？」

この時点で、なのはの当ては外れている。
なのはには射撃と砲撃しかないと踏んでいるであろうフェイトは、足を止めた自分に接近を仕掛けてくるか砲撃勝負に来るか、と読んでいたのである。
実際に射撃と砲撃しかないなのはであるから、近づいてこようと撃ち合いになろうと、砲撃を放つつもりでいた。だが、徹底的に魔力を注ぎこんだ、大威力の反応炸裂型砲撃である。
近接戦闘に対して使えば自爆めいたことになりかねない無茶な戦法であり、撃ち合いであれば相手の砲撃を破壊しながら撃ち抜く。
いずれにせよ、なのはが戦闘の素人だと既に読んでいるフェイトの裏をかき、自分が素人であることを逆手に取った戦法のはずだった。

「えっと、どうしようレイジングハート？」

表情に出さないよう慌てる主の心中を察しながら、レイジングハートは思考する。
双方既に魔法は発動している。こちらの回避率は絶望的な数字だが、防御しても削られるのであれば、動かないあちらに一発分の大ダメ

ージを与えるチャンスと見る。
さらにもう一つの魔法の準備も完了している。
そういった検討の後に、レイジングハートは冷静に提言した

《そのまま撃ってください》

「だよね！」

どうやら同じ事を考えていたらしく、即答して自分を構え直す主に再度信頼と愛情を深めつつ、レイジングハートは魔法起動の準備をする。
ディバインバスター・フルバースト。
なのはの所有魔法のうち、現在二番目の威力を誇る大威力攻撃である。

二人にはなぜか分かっていた。次の一手が最後になることを。なら、その一手を全力でぶつける

そしてフェイトの魔法の準備が整い、合計三十八個もある連射型の大型光球だった。

そして同時に魔法を放つ

「ディバイーーーーンッ！」

「フォトンランサー・ファランクスシフト！」

「バスターッ！」

「ファイアッ！」

なのはの砲撃とフェイトの光球がぶつかり合い相手に向かっていく。
そんな光景を見ながら二人は次の、切り札の魔法を放つ準備に入る。

なのはは深呼吸と共に、レイジングハートを掲げ、周辺の空域に浮遊する魔力を収束してゆく。

フェイトは『プラズマランサー・ファランクスシフト』をユウと一緒に進化させた魔法を準備した

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。」

先ほど放った魔法が消え、威力が互角だった事を確認した二人は自分の切り札を発動させた。

「「これが私の全力全開ッ！」」

「スターライト…ッ」

「プラズマランサー・ファランクスシフト！」

そしてその魔法を、解き放つ！

「「ブレイカーーーッ！（ファイアッ！）」」

轟音が巻き散られ、二人の魔導師が海に落ちるのをユウと俺が受け止める。
二人とも良い笑顔で気絶していた……

高町なのはＶＳフェイト・テスタロッサ
引き分け

フェイト（ブラコン王）ＶＳなのは（砲撃王）（後書き）

次回は主人公同士の対決になります

ユウ（死神）ＶＳ相馬（転生者）（前書き）

ｏｎｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様感想ありがとうございます！！

ユウ（死神）ＶＳ相馬（転生者）

ー相馬ｓｉｄｅー

「とりあえずなのはとフェイトを回復させるから一旦フェイトを貸してくれるか？」

「おう、任したぞ相馬」

「いやさ、自分から提案して何だけどいいのか？俺にフェイトを任して」

「大丈夫だ。こう見えても人を見る目は有る。お前ならフェイトを任す
って言ってもどうせ『アスクレピオスの杖』みたいな宝具を使って回復させるんだろ？」

ってちょつと待て、今聞き流せない台詞が聞こえたんだが

「おいユウ。なんでおまえ宝具のことを知ってるんだ！？」

「言い方宝具で合ってたのか。そりゃあ、何個か分からない物もあったが、干将・莫耶は中国の、ルールブレイカーは裏切りの魔女メディアの武器、こんな有名な武器、特に干将・莫耶はパッと見で分かるからな」

「はぁ、そうだ。俺は英雄の武器、宝具を魔力で造れるんだ。じゃあ、やるけどいいか？」

「おう！」

「投影（トレース）・開始（オン）」

そう言ってアスクレピオスの杖を投影した。

アスクレピオスの杖

アスクレピオスの杖とは、古代ギリシャで治療神として盛んに崇拝されたアスクレピオスの持物とされた杖。
杖に巻きつく蛇は、アスクレピオス神の珍獣としてアスクレピオスの神官たちに崇められた。

「真名開放　白蛇巻き付きし医神（アスクレピオス）の杖！」

「おお～、傷だけじゃなくて魔力も回復するのか！」

「さて、それで戦う本当の理由はなんだ？」

「本当も何もジュエルシードが目的だが」

「嘘だ！！！」

カナカナカナ

ひぐらしが鳴いた気がした。

「まぁ嘘だがな。本当の目的はお前だ」

「俺？」

「正確にはお前じゃなくてお前の力が欲しい」

「俺の力って宝具のことか？」

「そう、お前が勝ったらジュエルシードを渡すが、俺が勝ったら剣崎相馬を借りる」

なんか俺一人だけリスクの高い勝負だな、だが勝てば問題ない

「良いぜ、その勝負受けた！アクア、レイナ」

「俺たちもファーストモードで行くぞ」「「「「セットアップ（ユニゾン・イン）」」」」

そして戦うための言葉を唱える

「投影（トレース）・開始（オン）」

いつもの干将莫邪を投影した。しかしいつもの干将莫邪とは違い構造の甘さがなくなり、贋作とは思えない完成度の干将莫邪になっている。
対してユウは、

「ジェラス、第一及び第二封印省略解放」

《第二までの省略解放確認》

あれは幽になった時に使った力だ。アイツがああ言った後魔力が上昇した、ならこっちは動きを上げる

「複写眼発動、我（われ）・契約文（けいやくぶん）を捧（ささげ）げ・大地（だいち）に眠（ねむる）る悪意（あくい）の精獣（のせいじゅう）を宿（やどす）す・」

指先に魔力を集め、その集めた魔力を自分に纏わせ、通常の倍以上の動きで切りかかった、が

ガキーン

「残念。これは魔力を上げる力だと仮定して動きを上げたのには素直に賞賛しよう、だが」

ユウはここで一度言葉を切り、自分から離れた

「これは俺にかけた封印を解除するものだ、ちなみに省略解放は持続性に、通常解放は一撃の威力を高める用にだな」

「って言うかなんでそれを俺に教えた？」

「俺だけが相手の力を知ってるっていうのもフェアじゃないからな」

「なら俺に教えたことを後で後悔するんだな」

そうして俺とユウの切り合いが始まったのだが、

「（クソ、俺が切ればユウが空間把握で防ぎ、ユウがカウンターをしようとすれば俺がいち早く気づき回避する。これじゃあ千日手だ）」

ユウは攻撃を片手に持った剣で防ぎ、もう片方の剣でカウンターを決めるのが基本戦術のようだし、あの防御は今の俺じゃ突破出来るとは思えない、っつうか俺が大人になったとしてもあの防御を突破出来るとは到底思えない。
なら

「（戦い方を変えるか）」

そう思い、ユウの間合いから引いた

「（なんだ?戦法を変えるのか）ジェラス、サードモード」

《了承。サードモード》

ユウは俺が下がった事を警戒したのか、遠距離用のサードモードに変えた、だが少し遅かったな

「出でよ、王の財宝（ゲートオブバビロン）」

俺の後ろの空間が歪み、そこからいくつもの宝具が顔を出した。
そう、これこそがあの時ゼウスさんが固有結界と一緒にくれた能力、王の財宝（ゲートオブバビロン）だ。この中にはギルガメッシュが生前残した財が入っている。

「おいおいそこに見えている剣全部が宝具かよ」

ビックリした顔でツッコンだわりにしっかり迎撃の用意が出来てるじゃねぇかよ。しかもいま見える宝具より明らかに多いし、なら

「――――工程完了（ロールアウト）。全投影待機（バレットクリア）
これで同じくらいか？」

「ちっ、穿て！！」

ユウのスフィアが一斉に俺の元へ向かってくる

「――――停止解除（フリーズアウト）、全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）！！！」

ユウの放ったスフィアと俺が放った宝具がぶつかり合い数を減らしていくが、ソードバレルと王の財宝（ゲートオブバビロン）を合わせて、やっと相殺出来ている所を見て、決心がついた。

「（やっぱり使わないと勝てないか。別にここまで無理して勝たなくても良いんだろうけど、ここでユウに無理をしてでも勝たなきゃ、前に進めない気がするんだよな）複写眼発動求めるは焼原＞＞＞・紅蓮（くれない）」

指先で魔方陣を空中で描き、その魔法陳の中から炎が吹き出した

「やばっ」

ユウが当たる前に後ろに飛び抜き、ダメージにはならなかった。だが俺の狙いはこれでダメージを与えることじゃない。

「さらに、アクアたのむ。求めるは水雲＞＞＞・崩雨（・みずち）」

間髪いれず、新たな魔法陣を空中で描き、さらにその魔法陣を水の膜が覆って出てきた水の威力を底上げした

「こ、これは……水蒸気のせいで何も見えないだと！？」

そう、ユウの目の前を水蒸気で見えなくする、それが俺の狙いだ。

そして謳う、錬鉄の英雄の詩（人生）を

I am the bone of my sword.
ー体は剣で出来ている。

この詩は錬鉄の英雄の人生そのもの

Steel is my body. and nre is my blood.
血潮は鉄で　心は硝子

I have created overr a thousand blades
幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death
ただの一度も敗走はなく、

Nor known to Life.
ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to oreate many
彼の者は常に独り　剣の丘にて勝利に酔う。

Yet. Those hands will never ho

ｌｄ　ａｎｙ
故に、生涯に意味はなく。

そして変わる、世界そのものが、

Ｓｏ　ａｓ　ｌ　ｐｒａｙ.　Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ
ｗｏｒｋｓ.
その体は、きっと剣で出来ていた。

「な！世界そのものを変えるだと！」

「そう、これが魔法に一番近い魔術、固有結界　無限の剣製（アンリミデットブレイドワークス）この剣はすべて俺の魔力で造った偽物、だが偽物が本物に勝てない道理は無い、行くぞユウ、ついてこれるか」

「おもしれぇ、これだからお前と戦うのは止められない。ついてこれるかだと？ついていってやるさ！！」

その言葉を合図に飛び出していった。お互いの双剣がぶつかり合うが、俺は地面に刺さっている剣を相手に撃ち込む“ソードダンス”で距離を取り、事前に投影していた弓である剣を矢として撃った

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．《我が骨子は捻じれ狂う》

偽・螺旋剣（カラドボルグ）？」

カラドボルグ

古代ケルト神話に出てくるアルスター戦士、フェルグス・マク・ロイの所持する愛剣で、虹の端から端まで伸び、一降りで丘の天辺を三つも切ると言われる名剣
それを矢として使用するために自身でアレンジを施した宝具

「だぁーージェラス！」

《分かってます。ロード・カートリッジ》

「切り裂け！風牙・一閃！！！」

ユウが俺のカラドボルグを風を纏った剣で切り裂いた。だが爆発したカラドボルグのせいで煙がたちこみ、それに隠れながら双剣を投影し、投擲する。

「――――鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎ、むけつにしてばんじゃく）」

ユウはその双剣を弾く

「――――心技、泰山ニ至リ（ちから、やまをぬき）」

さらに俺双剣を投擲する

「――――心技、黄河ヲ渡ル（つるぎ、みずをわかつ）」

双剣をまた投影し、駆ける。ユウはいくら弾いても自分に向かってくる二対の双剣の対応に追われる

「――――唯名、別天ニ納メ（せいめい、りきゅうにとどき）」

さらに背後に両手を回し双剣を交差させる。交差した双剣は刃渡りが一メートルほどまで伸びる。

「――――両雄、共ニ命ヲ別ツ……！（われら、ともにてんをいだかず）」

そして大きく跳躍する。そして飛び回っていた双剣がユウを巻き込み爆発する。

「鶴翼三連！！」

双剣を振り下ろし、ユウを切り裂き、爆発を起こした。そして煙が晴れるとそこには血を流しながらも、倒れずにいた

「干将莫邪の能力か。これの伝説を考えたら妥当な能力だが、甘く

みてたが、俺を倒すにはまだ足りないな！」

ちっ、今ので決めたかったんだがな。今の鶴翼三連と固有結界の維持でそろそろ魔力が切れそうだ、思ったより固有結界の維持で魔力を使ったからな

「そろそろ体力が尽きそうになったから、次で最後にしないか？」

「ああ良いぜ」

流石に魔力ＥＸでも体力には限界があるからな。ユウは次の一撃の為なのかデバイスのカートリッジを変えた。
俺も次の一手の為にある剣を地面から抜いた

「ジェラス、セカンドモード」

《オーライ・セカンドモード！》

ユウも炎を使うセカンドモードに変え、迎撃の用意をした

「いくぜ、真名解放　転輪する勝利の剣（ガラティーン）」

真名解放した転輪する勝利の剣（ガラティーン）は辺りに炎を撒き散らしながらユウに向かっていく

転輪する勝利の剣（ガラティーン）

円卓の騎士の1人、ガウェインの持つ剣。アーサー王が振るう最強の聖剣「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」の姉妹剣である。
柄には擬似太陽を封じてあり、その出力たるやエクスカリバーに匹敵する。
エクスカリバーが星の光によって両断する剣ならば、ガラティーンは太陽の灼熱を以て敵を焼き尽くす剣。

ユウも剣を鞘に戻し、炎が鞘から漏れ出すくらい威力を高めていた

「神炎流居合い」

《ロード・カートリッジ》

「不勝炎斬(ふしょうえんざん)！」

ユウの炎が不死鳥の様に飛び、転輪する勝利の剣の炎(ガラティーン)とぶつかり合い、消し飛んだ。だが、ユウも俺もまだ最後の切り札は切っていない、俺は地面にあらかじめ刺しておいた剣に魔力を込め、ユウはフアーストモードに変えて、カートリッジも変えていた

「さて、分かってるとは思うが、お前の最強の攻撃を俺が最強の防御で防ぐ。防ぎきれれば俺の勝ち、防げなければお前の勝ちだ。異存はないな」

「問題ねぇ」

俺は魔力を込め終わった剣を掴み、降り下ろした

「今撃てる最強の一撃、受けてみろ。真名解放　約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！！！！！」

約束された勝利の剣（エクスカリバー）

人造の武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。聖剣というカテゴリの中では頂点に立つ。

人々の“こうであって欲しい”という想念が地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精錬された最強の幻想（ラストファンタズム）。栄光という名の祈りの結晶。星の触覚たる精霊に管理されていたが、一時的に人の王の手に渡る。

所有者の魔力を光に変換し、収束・加速させる事により運動量を増大させ、神霊レベルの魔術行使を可能とする聖剣。指向性のエネルギー兵器。第三者からは巨大な光の帯に見えるが、実際に攻撃判定があるのは其の先端のみであり、光によって形成された“断層”が通過する全ての対象を切断する“究極の斬撃”である。其の膨大な魔力は先端以外にも熱を持たせ、結果として地上を薙ぎ払う光の波と取られる。

さっき撃った転輪（ガラティーン）する勝利の剣が炎が広範囲に広がるのに対し、約束された勝利の剣（エクスカリバー）は範囲が狭い代わりにその威力はどの宝具よりも高い

「ジェラス、ブラッドカートリッジ」

《ブラッドカートリッジ・フルロード》

「滅すは“星の光”干渉するは“因果”」

ユウも最強の防御、消滅の闇を使い防御した。ぶつかり合う光と闇、
そして

「あーあ、約束された勝利の剣（エクスカリバー）　でも駄目だったか」

ユウは防御に成功した

「ふぅ。危なかった、ここまで追い詰められたのは久しぶりだぜ。
だから最後に俺の最強の武器でトドメをさしてやる」

そしてユウも謳う、だがその詩は固有結界の詩のようで、全く違う
ようにも聞こえる不思議な詩

我は風の担い手　我が風は死を運ぶ力

《第一封印解放確認》

我は闇の使い手　我が闇は因果をも滅する

《第二封印解放確認》

我は神炎を受け継ぐ者　我が炎は世界を滅ぼす

《第三封印解除確認》

そして変わるユウのデバイスの最後にして最強のモードへと

「ジェラス、ファイナルモード」

《ハァ、今回だけですからね。ファイナルモード》

ジェラスが双剣から大鎌へと変わっていく。それがユウが着ている漆黒のバリアジャケットと合わさるとまるで

「……死神みたいだな」

「ありがとう、俺にとっては最高の誉め言葉だ」

別にけなしたわけじゃなく、ただ純粋にそう思ったから口に出ただけなんだけどな

「喰らえ、“デスサイズ”」

迫ってくる一撃を避けることも、ましてや防御用の宝具を投影する魔力すらも残っておらず、俺は、俺が造り出した世界とともにユウ

に壊された

ユウ・クロサキＶＳ剣崎相馬

勝者　ユウ・クロサキ

ユウ（死神）ＶＳ相馬（転生者）（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「さて今回はユウＶＳ相馬の主人公対決となりました」

ユウ
「とりあえず後三話位で無印が完結するらしいな」

赤黒
「うむ、だけど最近リアルが忙しいから遅くなるかもしれないから出来れば８月に入るまでには無印を終わらせたいな～」

ユウ
「まぁ頑張れ作者。それでは次回『困った時はシ○ンロンに相談だ。でも使いすぎにご注意を』を」

赤黒＆ユウ

「「お楽しみに」」

困った時はシ○ンロンに相談だ。でも使いすぎにご注意を（前書き）

皆さんお久しぶりです。
この後も少し番外編がありますが、とりあえずこの話で無印は完結です

困った時はシ○ンロンに相談だ。でも使いすぎにご注意を

ー相馬ｓｉｄｅー

「知らない天井だ……ってネタをやってる場合じゃねぇ～！！アクア、レイナ、一体全体ここはどこだよ！！」

「落ち着け主よ。アクアはあの時の一撃でまだ起きぬ、そしてここは我にも分からぬ」

「ここはアルハザード。ってアルハザードとか言われても分からないか」

ア、アルハザードだって！！！だってあれは有りもしないおとぎ話じゃなかったのかよクロノ君

「仕方ない。あの後どうなったのか一から説明するか……」

ーユウｓｉｄｅー

「……ふぅ。流石に最後のはいらなかったな」

フラフラと立ちながらそう呟くと、ポケットから小瓶を出し、飲み干した

「それにしても、分かってはいたがこの歳で俺と1対1が出来、なおかつファイナルモードまで出させるとは、才能ってのは末恐ろしいな……」

本当は消滅の闇で攻撃を滅し、その後倒そうと思っていたが、まさか全力ではないとはいえ、互角になるとは予想外だった

「（腐っても星に鍛えられたとされる神造兵器ということか、才能ってのは羨ましいねぇ～、なんの代償も対価も無しであんな力を使えるんだから。……ホント羨ましいな、羨まし過ぎて殺したくなる（・・・・・・）な）」

《殺気を出しすぎですマスター！！》

「（おっと、無意識な嫉妬から殺気を出してたか）スマンジェラス、もう大丈夫だ」

ヤバイヤバイ。フェイトは俺との特訓である程度殺気には慣れさせたけど、あの白い魔導師は殺気には慣れていないんだろうな。
現に自分に向けられていない殺気に当てられて青い顔をしてるし

「んじゃあ、約束通り剣崎相馬は俺、ユウ・クロサキが少しの間借りるからな」

「あ、あの……」

「なんだ、白い魔導師ちゃん」

「私、白い魔導師じゃなくてなのはです！！」

なにこの子、カワイイな、っつうかなんでツインテールが勝手にピョコピョコ動くんだ？こういう子を見たら

「分かったよ　高町にゃのは」

つい弄りたくなる

「ち・が・う・の！！なのはだってば」

「そんなことはおいといて「おいとかないでほしいの」俺になにか

聞きたいことがあるんだろう」

「はい。でもどうして私がユウさんに聞きたいことがあるって分かったんですか？」

「仕事上、人の顔を見ることが多いからかな、それでなにを聞きたいのかな？」

「あの、相馬君になにを頼むんですか？」

「ちょっとした人助けだな、大丈夫悪いようにはしないさ。あ、そうだ忘れてた」

「サーチャーでこちらを見ているのだろうハラオウン提督、ならこれから私達は移動するので、追跡並びに、剣崎君から後でなにがあったのか質問することを禁じます」

「な、なぜですか？クロサキ特別捜査官」

「守秘義務って奴です。書類上は“善意”で強力ということになってますからね」

「はぁ、分かりました」

「んじゃあ、一旦帰ってから向かうよフェイト、アルフ」

時の庭園内

「まさか本当にアルハザードが虚数空間の中にあるなんて……」

「でも虚数空間では魔法が使えないのにどうやってアルハザードへ行くの？」

「良い質問だ。これが魔導師にとっては盲点なんだが、機械の力を使って行く」

「成る程！確かに盲点ね。魔法が使えないなら違う方法で行けばいいと言うことね、たしかに魔導師にとっては盲点だわ」

「ああその通りだ（プレシアさん性格変わりすぎだろ。もう別人じゃん）」

プルルルルル　プルルルルル

《マスター。アリスさんから電話ですよ》

「なんだアリス？」

《なんだじゃないよ。いくら僕が毎日暇だからって、こんなに待たせるなんて酷いと僕は思うんだけど》

「悪い悪い。じゃ転送してくれ」

《分かった。そこを動かないでね》

――シュン――

ユウとアリスと呼ばれた少女の会話が終わったと同時に転送され、そして誰も居なくなった

「っとそんな訳だ」

「いや、最後のはなんだよ。気になるじゃねぇか」

「気にするな、実際何もなかったんだから」

「ならあんな気になる言い方をしたんだよ！」

「気分だ」

「どんな気分だ～！！！！！」

「へぇ、君がユウと戦ったって言う剣崎相馬君だね」

「ん、もうプレシアさんと話し終わったのか？」

「うん！久々に有意義な話が出来たよ」

「そうか、なら相馬も起きたことだし、そろそろアリシアを生き返らせるかな」

「そうだねユウ。場所は広い方が良いと思うから広場を使ってよ」

「ちょっと待てよ。アクアはどうした？」

「ああ、彼女なら僕の研究を手伝ってもらってるよ。おーいアクアちゃん、相馬君が起きたよ」

「相馬　〜良かったよ」

「心配かけて悪かったなアクア」

「感動の再開もそこまでにしてくれよ。今度はテスタロッサ家の感動の再開を演出しなくちゃいけないんだからな」

広場

ーアリスｓｉｄｅー

ここからは僕、アリスがお送りします。皆さんよろしくお願いしますね

「どうしたアリス？いきなりお辞儀なんかして」

「気にしないでユウ、何でもないから」

「そんなことよりまだ広場って所には着かないのか？」

「もうちょっとで着くから、そんなに暇なら僕の知恵の輪貸そっか？」

「なんで知恵の輪！？」

・・・なんか嫌な顔をされた、面白いのに

「ねぇユ「俺もいらないぞ」まだ名前すらも言ってないのに！」

「だってアリスが作る知恵の輪はお前以外誰も解けないだろ」

そんなことないと思うけどなー

「（ヒソヒソ）あの子の作った知恵の輪ってそんな難しいのか？」

「（ヒソヒソ）ああ、難しいなんてもんじゃない。前に一度だけア

リスの作った知恵の輪を持ってどれだけ難しいか調べたことがあったんだが、賞金まで出したのに結局誰も出来なかったんだ」

「そろそろ着いたよ、二人ともいつまで喋ってるの？」

「悪い悪い、んじゃアリス、準備を始めるぞ。相馬はいつでもアスクレピオスを使えるようにしててくれ」

「おう、投影（トレース・オン）・開始」

「へぇ、これが投影か～、確かにその杖からは凄い魔力が出てるね。ってこっちも準備しないと」

そう言って僕はアリシアの周りに血の入った入れ物から血を流しながら円を作っていく

「何やってるの？アリスちゃん」

「これはユウが大掛かりな力を使うための準備らしいんだけど、詳しくは分からないんだ」

「ふーん」

そんな会話をしていたら、いつの間にか血の円が完成した

「よし、相馬君それじゃあお願い」

「了解。真名解放　白蛇巻きつく医神の杖（アスクレピオス）」

相馬君がアスクレピオスの名前を叫ぶと、死体のように（まあ死体なんだけど）冷たくなっていたアリシアの体に血の気が戻って来た

「さて、それじゃあみんな円の中に入ってくれ」

ユウの言葉でみんなが円の中に入っていく、そしてユウは血が入っていた（・・・・・・）入れ物の中身を飲み干した

「・・・我は風の担い手　我が風は死を運ぶ力

《第一封印解放確認》

我は闇の使い手　我が闇は因果をも滅する

《第二封印解放確認》

我は神炎を受け継ぐ者　我が炎は世界を滅ぼす

《第三封印解除確認》」

ユウの詩が終わるとユウの瞳の色がさっきの血のような深紅になる

「滅するは“アリシア・テスタロッサの死”干渉するは“因果”」

ユウがそう呟くとアリシアの体が黒く輝く。しかし

「どういう事、なんでアリシアが生き返らないの？」

相馬君もアクアちゃんも、プレシアさんですらも僕が何を言っているのか分からないみたいだ。大がかりな力を使うって事前に言ったからそれなりに時間がかかると思っているみたいだけど、実はその逆、ユウのあの力は過去の一部を消滅させ、因果に事実を変えさせるもの。だから本当は十秒もしないでアリシアが生き返るはずだった、しかしユウが力を使って一分以上経っても一向にアリシアの体に変化が現れなかった。

「くそ、思っていた以上に因果の変更が上手くいかない、っつうか明らかにパワー不足だわ」

「そ、それじゃあアリシアは生き返らないというの！？」

「大丈夫だよ母さん。お兄ちゃんがあんな余裕ってことはまだ何か考えがあるってことだよ」

正解だよフェイト。だいたい僕もユウとは付き合いが長いけど、本気で焦ったとこなんか見たことないよ。
それにしても、“お兄ちゃん”ねぇ～、これが終わったらこのネタで弄ろっと

「その通り！！でででっでで～～“持ってて良かったジュエルシード”！！！！」

ジェラスの中から約１０個のジュエルシードを取り出した。って言うか

「なんでドラ〇モン！！！！！！」

っあ、先に言われた。テスタロッサ家の二人とアクアちゃんはなんのことか分からず首を傾げていた

「それは気にするな、アリス、ここの結界は」

「問題なし、たとえここに核が落とされても大丈夫だよ」

「ならいい。

ジュエルシードよ、俺の願いはお前らの魔力だ！！」

そう言ってジュエルシードを発動させた。今までの願いとは違い、純粋な願いなためジュエルシードも暴走せず、その魔力がユウの体に吸い込まれていく

「問題解決。それでは気を取り直して、
滅するは“アリシア・テスタロッサの死”干渉するは“因果”」

ジュエルシードの魔力を取り込んだことで、アリシアの体がさっき
よりも黒く輝き、そして

「う、うぅん、　あれおかーさん？」

「アリシア、アリシアーー！！！！！」

「ちょ、痛いよおかーさん。ってここは何処？なんで私裸なのーー
ー」

・・・・あ、服着せるの忘れてた

アリシアの混乱が治った後、アリシアにこれまでの説明をした。
ここのことや、自分のこと、フェイトのこと、そして

「それで考えてくれたお兄ちゃん？」

「そらまあ、行くとこが無くなったから俺の手伝いをするのはいいけどさ、なんでアリシアまでお兄ちゃん？」

なんとアリシアまでユウのことをお兄ちゃんと呼ぶようになった

「だって妹のフェイトがお兄ちゃんってよぶなら、姉の私にとってもお兄ちゃんだよ」

「あっそう。それで相馬、転送場所はアースラの中でいいか」

あ、話を逸らした。ちなみにアリシアの体だけど、アリシアが生き返った時にこれまでの時間分成長して、今はフェイトと同じくらいになっている。・・・ご都合主義万歳

「ああ大丈夫だ」

「お前も帰ったら学校行けよ、まだお前は義務教育なんだから」

「へーへー、分かってますよ」

「ばいばいアリスちゃん」

「うん、ばいばいアクアちゃん、それじゃあ転送するよ」

「ああ、また（・・）な」

「は、またってど」

言い終わらないうちに転送された

「はぁ、別に悪いことではないとは言え、気が引けるわね」

「ま、サプライズだと思うんだな」

ー相馬ｓｉｄｅー

あの後は大変だった。リンディさんにさり気なく、だけどしつこく何があったか聞かれたり、なのはにフェイトのことをこれまたしつこく聞かれたり、言えるかよ、アルハザードに行ってユウと一緒にアリシアを生き返らせてましたなんて

それから数日後、やっと学校にも復帰した。アリサたちにも事実は隠して説明してあったから大丈夫だったけど、説明してなかったら・・・よかった、説明してて本当によかった

「今日は高町と剣崎が復帰してくれただけじゃなく、転校生が二人このクラスに入ることになったのと、新しい担任の先生が来ることになった」

へぇ～転校生と新しい担任かぁ、あれ、なんか嫌な予感が

「それでは入って来て下さい」

「はーーい」

こ、この声は

「今日からこのクラスに入ったアリシア・テスタロッサです。好きな食べ物はケーキ、好きな男の子のタイプは松岡修造みたいな人です、よろしくお願いしまーす」

「フ、フェイト・テスタロッサです。よ、よろしくお願いします」

いや、小学生に松岡〇造みたいな人はそうそう居ないだろ。というツッコミが出来ないほど俺となのははとても驚いた、なのはに至っては空いた口が塞がらない位驚いていた。ってなんで語り部口調？俺も思ってたより動揺してたみたいだ・・・ってちょっと待て、このパターンから行くと新任の教師ってまさか

「続いてクロサキ先生、挨拶をお願いします」

扉を開けて入って来た男を見た瞬間、俺もなのはのように空いた口が塞がらなくなった。
だってそこに立っていたのは今まで敵として戦ってきた

「新任のユウ・クロサキです。名前は違いますが転校生のアリシアと、フェイトは俺の実の妹で、家庭の事情からアメリカのボストンから大学を卒業したと同時に日本に引っ越してきました。まだ経験も浅いですが、妹共々よろしくお願いします」

ユウが立っていたのだから・・・って言うかボストンの大学って

「「「「「「ハーバード（大学）！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」」

この日、全てのクラスや学年から苦情を貰ったのは、言うまでもない

困った時はシ○ンロンに相談だ。でも使いすぎにご注意を（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「無印完結～♪と言うわけで今回初登場だったアリスちゃんに来てもらいました」

アリス
「僕だって暇じゃないんだ。手短にお願い」

赤黒
「さて、それでは今回の疑問をアリスちゃんに答えてもらいましょう」

アリス
「う～、仕方ない、それじゃあまずは、ユウが力を使う前に血で円を作ったことを説明するよ」

赤黒
「はいよろしく」

アリス
「三番目まで解放して因果を変えると、僕たちにも作用されるんだ。あの場合だと、ユウが因果を変えてアリシアを生き返らせても、僕たちの中では生きているのが当たり前になり、アリシアを生き返らせるという目的すら忘れてしまうのをあの血で防ぐらしいんだけど、詳しくはユウにも分からないみたい。あれはジェラスを作った人が考えたらしいんだけど、もう死んじゃったから分からないままだね」

赤黒
「ふ～ん、さて次回は番外編「とある死神のお仕事内容」です。次回も」

赤黒&アリス
「「お楽しみに（ね）」」

とある死神のお仕事内容（前書き）

酸欠帝様、ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、ペル＆コロ様感想ありがとうございます。
最新話の投稿と、今までの話の修正をしたのでよかったら見てください

とある死神のお仕事内容

ージェラスｓｉｄｅー

今回はマスターのいつもの仕事内容を紹介してみることにしました。

朝

マスターの朝は可笑しいくらい早いです。これはマスターが昔やっていた執事の仕事の影響らしいです、執事の時は何でもいつもの睡眠時間は二時間ですぐに重労働を始めなければならなかったとのことです。この時は、世界の大変な仕事ランキングの一位にランクインさせようかと本気で考えました。

そんなこんなでマスターが起きると、まずは朝食の用意と洗濯物の取り込みを始めます。言い忘れてましたが、ここには過剰な実験の被害者にされていた子供たちを育て、社会に出せるまで育てる孤児院のようなこともやっているため、この二つの仕事が終わる頃には

フェイトさんやアリシアさんたちテスタロッサ家の面々や、子供たちが席に座りマスターを待っている状況になっています

皆が朝食を食べ終わると、洗い物や洗濯をプレシアさんにやらせ、学校に向かいます。

学校に行くときは転送装置で近くで借りているマンションの一室に一度転送し、その後は歩いて向かう様にしています。最初の頃はアリシアさんが面倒だと言っていましたが二日で慣れてしまいました。

今日の授業は一時間目に算数、二時間目に国語、三時間目に科学室で実験、四時間目に体育、今日は四時間目の後急ぎの仕事と“いつもの子”のお世話をしに行くために午後から出かけることになっているのでした

算数

「んじゃあこの前のテストを返すぞ」

今日は前にやった算数のテストを返す日みたいですね

「みんなはどうだった？」

「いつも通りよ」

「私も変わらずかな」

「同じく満点だな」

「それにしても相馬はまだ分かるけど、フェイトとなのはの理数系の成績についてはビミョーに納得いかないのよね」

「フェイトとなのはは理数系の成績だけが抜群にいいからね～」

「なに関係ないような顔してるのよアリシア」

「へ、私!!私あまり関係ないような」

「何言ってるのよ!あんた入学して来た頃はフェイトと一緒に漢字の宿題を出されてたのに、なんで一週間で学年一位になれるのよ」

ここで皆さんの成績をご紹介しておきましょう

理系

相馬　　学年一位（満点）

なのは　　学年一位（満点）

フェイト　　学年一位（満点）

アリシア　　学年一位（満点）

アリサ　学年一位（満点）
すずか　中の中くらい
文系
相馬　学年一位（満点）
アリサ　学年一位（満点）
アリシア　学年一位（満点）
すずか　中の上くらい
なのは　中の下くらい
フェイト　かなり気の毒

「さぁ？なんでだろ」

「いまだにフェイトは漢字の宿題を出されてるってのに」

「うう」

「いや別にフェイトがダメってことじゃないと思うぞ。ただ単にフェイトの姉がおかしいだけだから」

魔導師にとって魔法制御や魔法構築なんかは理数系ですからね。ア

リシアさんも魔導師ではないですが、プレシアさんの頭脳を受け継いだのかそこら辺の魔導師より頭が良いですからね。
・・・文系については謎のままです

体育

「え～、今日の体育はドッチボールなんだが、寒いんで怪我しないよう二人一組で準備体操と柔軟体操をしっかりやるように」

「「「はーい」」」

「一緒にやろう姉さん」

「うん良いわよ、でもフェイト今回こそは私の真の力を目にするといいわ」

「ワーソレハタノシミダヨネエサン」

「ねえすずか、あの会話前もしなかったかしら?」

「ん～、でも前はたしかサッカーの授業の時に・・・「今回こそは見せてあげるわ、中国三千年の歴史が生み出した必殺シュートを!」って言ってたよ」

「いいんじゃないか、どーせ前回の結果とそう変わらないだろ」

「あははは、さすがにフォローしきれないの」

「よーし、チーム分けは出来たか？」

Aチーム
リーダー　アリサ
エース　すずか
バックス　なのは

「いい感じに分かれたわね」

「今回は勝たせてもらうよ相馬君」

「私は足手まといにならないよう頑張る」

Bチーム
リーダー　相馬
エース　フェイト
バックス　アリシア

「負けないぜすずか」

「みんながんばろうねー」

「ふ、ふ、ふ、ふ　今日の私は一味違うわ、なんてったって・・・・」

「そんじゃ試合開始」

ピーーーー

「今日の朝の占いで一位だったんだから」

「せんせー、アリシアちゃんが気絶しましたー」

「んじゃあ悪いが外野にいる中で誰か保健室に連れてってくれるか」

「・・・確かに一味違ったわね」

「ああ、開始早々アリサの投げたボールを顔面で受け止め、そのまま気絶だからな」

そう、この会話で分かった人がほとんどだとは思いますが、アリシアさんはスポーツがてんでダメなんです。
この前の体育のサッカーでも、シュートしようとボールを蹴ろうとしたんですが、空振りしてそのまま倒れ、後頭部を強打して気絶、そのまま保健室へ直行ですからね

「それではお先に失礼します」

「はい。お疲れ様でした、後は任せてくださいユウ先生」

道端
プルルルル～、プルルルル～、ガチャ

「もしもし、依頼されていたリバー提督様ですね。ご依頼が完了したのでご連絡しました」

「ええ、ご依頼されていた『ロストロギア密売組織の壊滅』は完了、っあ後その組織が所持していたロストロギアは私の優秀な部下が色々と詳しく調べているのでじきに私が、いえ『特別捜査官』が向かわれるかと、では」

「まったく、俺を罠にかけようなんて百年早いっつうの」

そうなんです、実はリバー提督は昔マスターに手柄を持って行かれたのを逆恨みし、マスターに依頼したのと同時にそのロストロギアの密売組織に連絡、マスターがきたら殺すよう依頼したみたいなんです。しかもご丁寧にロストロギアも不正に横流ししてたらしいので、アリス様曰く「センスの欠片も感じない作戦、これでよく提督になれたものと逆の意味で感心する」とのことです
そんな説明をしている内に目的地に到着したみたいです。

「おーい、来たぞー」

「あ、“はやてちゃん”ユウさんが来たわよ～」

「ありがとなシャマル、ユウ兄も上がってええよ」

「おう、はやて体のほうはどうだ？」

「今日はいつもより調子がええな」

「そうか、ま、あんまり無理するなよ」

「来たのですかユウ殿、なら私と剣の試合をして下さい」

「またかよシグナム、どーせ勝てねぇんだからいいだろ。それより兄貴、あたしとゲームしよう」

「いいぞヴィータ。すまんなシグナム、試合はまた今度」

「・・分かりました」

「それよりまずはお昼だ、なにかリクエストはあるか？」

「あたしオムライス」

「なら私はそばでお願いします」

「私はラーメンがええな、最近食べてへんし」

「じゃ私はサンドイッチにします」

「はいよ、それにしてもなんて統一性のないお昼だな」

「それでも作ってまうんやろ」

「まあな」

さて、マスターがお昼を作っている間にここの人たちの説明をしなければなりませんが、それはまた次回に

「なら私もお手伝いを」

「やめろシャマル、お前が手伝ったりしたらせっかくのお昼が、ただの黒い物体になる」

「あ～、ごめんなシャマル、これはさすがの私でもフォローしきれんわ」

「ううう」

とある死神のお仕事内容（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「さて、今回は作者が書いていて説明しきれなかった説明をしたいと思います。それではジェラスさん、よろしく」

ジェラス
『なのはたちとフェイトはどうやって仲良くなったの？』っと、これはマスターがアリサ様たちとフェイト様が仲良くなり、アリシア様はテストの点数のことから仲良くなったみたいです。
続いて『なのはたち魔導師組はアリシアのことをどう思っているのか』という質問ですが、マスターの因果操作はあったことをなくし、自分の計算道理に因果を修正させる能力なので、今の事実ではアリシア様は死なず、フェイト様の姉をやり、ジュエルシードは善意で集めていたということになっています」

赤黒
「次回はユウと八神家の出会いについて書きますので」

赤黒&ジェラス
「「お楽しみに」」

死神たちとヴォルケンリッター（前書き）

最新話を更新しました。
なんかご都合主義な回です

―ユウside―

「アリス、なにかわかったか？」

「うん、無限書庫のデータベースにハッキングをかけてみたんだけど、中々の情報を得られたと思うよ」

「へぇ、よくあんなとこハッキングかけようと思ったな」

「正直ハッキングより情報を検索するほうが大変だったよ。おかげで昨日は寝不足だからプレシアさんに説明を頼んで僕は少し寝かせてもらうね」

「ああ、おつかれさん」

今俺とテスタロッサ姉妹ははやての家に向かいながらアリスに電話をかけていた。え、今日学校はどうしたかって？今日は日曜だから学校は休みなんだよ

「ユウ、今説明するわね」

プレシアの（とりあえず呼び捨てでいいって言われたからこう呼んでる）説明を聞いて、頭をわしゃわしゃと掻いた

「（めんどくせー。なんで立て続けにロストロギアの事件に巻き込まれるかなー、ここって呪われてるんじゃねぇか？）」

そう思うのも無理はない。地球は一応管理外世界のはずなのに、ＡＡＡランクの魔導師が現れるわ、その父親は化け物じみた身体能力を持ってるわ、まだ一桁の子供が自分に一撃を与えられるほどの力を持ってるわ、挙句の果てには第一級指定ロストロギアを持つ少女が自分の知り合いなんて信じられなかった。

「（今度冗談抜きでお祓いしてもらおう）」

現実逃避してしまう位最近面倒な事が多かった

そもそもはやてとはテスタロッサ家のように関わりが（一方的な関わりだったが）なく、その主治医の石田という先生と知り合いで、その石田先生から個人的に頼まれた仕事だった。なんでも「自分が担当している患者は身寄りがいなく、９歳で車いすなのに一人暮らしをしているからその手伝いをしてほしい」との事で、当時まだアリシアを助けるためにジュエルシードを集めていた為、「また９歳かよ！！！！」と電話越しに叫んでしまったとしても仕方ないと思う。

そんな訳でいざその子の誕生日の前日６月２日に行き、なぜか２時間で赤の他人から兄へと大出世（昼ごはんを作ったのが効いたのだろうか？謎だ）今夜だけは一緒に寝てほしいと言われしぶしぶ一緒に寝れば、いきなり古そうな本が光り出し、中から出て来たピンクの女に剣を突き付けられ「貴様は何者だ！！！」と言われる前に、「それはこっちのセリフだ」と言わんばかりにジェラスを突き付け返し、殺気をぶつければはやてに「やめてやユウ兄！！」と怒られる。　なんて理不尽！！

しかもこの話にはまだ続きがある。その後シグナムは模擬戦、ヴィータには置いてあったアイス、シャマルにはこの世界の医療知識、でなんとか説得（ザフィーラはなぜか目を見ただけで信用したらしい、お前がリーダーのほうが良いんじゃないかと思ったのは秘密だ）した後空き部屋で寝かせ、次の日に自分たちと闇の書について聞いた後、気になり闇の書を詳しく調べてみればはやてから魔力を吸収していて、このままだと命に係わると分かり、もっと詳しく調べるためそれまで収集活動はやめるようはやてに頼んで言い聞かせた。そんなことがあってか兄と慕う奴らが最近増えた。別に嫌な訳じゃないんだがなぁ

っと、そんなことを考えている内に八神家に着いたみたいだ。

ーシグナムｓｉｄｅー

「はーい、分かりました、それじゃまってますね。ユウさんもうすぐ着くって、それと闇の書についても何か分かったみたい」

「なに、それは本当か！！」

「ええ、・・・ふふ、おかしいわね」

「何がだ？」

「ユウさんのことよ。まだ会って一週間しか経っていないのに皆ま

るで主のように信用してるんですもの、」

「・・・ああそうだな、確かにユウ殿はとても不思議な方だ」

あの人と会ったのは忘れもしない私たちが覚醒した時だ。私が最初に主に挨拶をしようと顔を向けると、主はやての側にユウ殿が居た。最初私は主に害をなす存在だと思い、ユウ殿に剣を突き付け、「貴様、何者だ！」と言おうとしたが最後まで言わせてもらえなかった。私が剣を突き立て喋ろうとした時にはもうユウ殿はデバイスをセットアップさせ、私と同じよう首筋に剣を当て、殺気を放った。あの時殺気を受けた瞬間悟ってしまった、私ではこの男に敵わないと。主はやてが止めてくれたので殺気は止んだが、主が止めなければそのまま私たちはものの数秒で殺されてしまっていただろう。

しかしユウ殿の説明を聞き、彼はあの冷徹な一面だけが全てではなかった。それどころか身内や知り合いにはすごく甘い兄のような存在であった。次の日に主はやてが私たちを家族だと呼び、ユウ殿が作り置きしてあったと言ったあいすくりーむと言う物を振る舞ってくれた。その美味しさに驚き（ヴィータはあのことが理由で兄と慕うようになったと言っていたな）さらにこの国の医療知識を教えてくれ、その知識の多さに皆驚き、私との模擬戦では私の訓練になるような戦い方をしてくれた。

中でも驚いたのは我々が闇の書の説明をしていた時のこと

「そっか～この子が闇の書ってもんなんやね」

主はやてはそう呟くと闇の書を手に取った

「ん、ちょっと悪いが少し闇の書を貸してくれるか？」

「それは別にかまわへんんけど、何するん?」

「いや、少し気になることが有ってな。気のせいなら良いんだが・・」

主はやてが闇の書を渡すと、その上に手を当て、集中し始めた。

一分位たった時、手を放したユウ殿はとても焦っている顔をしていた

「はやて、落ち着いて聞いてほしい。まだ時間はあるみたいだし、詳しく調べてみないことにはなんとも言えないが、このままだと心臓にまで麻痺が来て死ぬかも知れない」

私たちから闇の書の詳しい情報を聞いた後、少し考える仕草をしたが、すぐ顔を上げ「一週間だ。一週間の間にもっと詳しい資料を集めて来るから、それまで蒐集活動はしないでくれ」と私たちに約束した。

最初は私たちだけの情報では足りないからだと納得してはいたが、日にちが経つ内に理屈では考えられないほどに、早く蒐集に向かいたいと思うようになってしまった。それほどまでに今の主が優しく、そして私たちがその優しい主を失いたくないと考えるようになってしまった。

そして今日が約束の一週間。

ピンポーン

一体ユウ殿はどんな真実を見付けてきたのか

ーユウside1ー

「いらっしゃいユウ兄、と昨日話していた」

「双子の姉のアリシア・テスタロッサと」

「妹のフェイト・テスタロッサです」

「ま、こんなとこで立ち話もなんやからどうぞ遠慮なくはいってええよ」

「「お、おじゃまします」」

「おじゃまする（シャマル、念のため結界を頼む）」

「（ええ分かったわ）」

さて、結界も張り終えたしちゃんと話さないとな

「では、この1週間で俺が調べた結果、闇の書には重大な欠陥があることが判明した」

「欠陥ですって!!ですがそんなことを闇の書の騎士である私たちが知らないはずが・・」

「なら今まで使えてきた主たちは、蒐集を終えた後どうなった?」

「それは当然強大な力を・・・いや、思い出せない。我らが主に仕

え、そして蒐集を行い、その後一体どうなったのだ？」

「それは私が説明するよ」

そしてアリシアは語り出す、闇の書の真実を

「第一級指定ロストロギア、『闇の書（Ｂｕｃｈ　ｄｅｒ　Ｄｕｎｋｅｌｈｅｉｔ）』。転生機能、無限再生機能を併せ持つ。本来の名は「夜天の魔導書」、主と共に旅をし、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、そして研究するために作られた、収集蓄積型の巨大ストレージデバイス。

しかし、歴代の持ち主の何人かがプログラムを改悪。破壊の力を使う「闇の書」へと変化した。その改変により、旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生機能へと変化してしまった。

これらの機能があるため、闇の書の完全破壊は不可能とされている。また、真の持ち主以外によるシステムへのアクセスは認められず、無理に外部から操作しようとすれば、持ち主を呑み込んで転生してしまう。

ゆえにプログラムの停止や改変ができないので完成前の封印は不可能。

完成後は、持ち主が闇の書の意志（管制人格）と融合することで、「闇の書」に蓄えられた膨大な魔力データの魔力を行使できる。

当然蒐集した対象の魔法も使え、膨大な魔力がある分オリジナルを上回る威力を生み出す可能性もある。さらに、サポートも闇の書の意志が行ってこれるみたい。

でも、所有者に選ばれても、蒐集によって魔導書を完成させた後に管制プログラム・防御プログラム双方の認証を受けなければ管理者権限を得られず、機能の全てを使用することはできない。

そして、自律思考を持たない防御プログラムの破損によりこの認証が正常になされず幾度も暴走を起こしている」

ア　リシアのいきなりの大暴露でヴォルケンズたちが固まった。って言うかはやてにはまだ難しかったのだろう、頭の上に？を浮かべている

「えーと、ユウ兄つまりどういう事なん？」

「つまりだな、蒐集しても暴走してしまうからどうしようってことだ」

「ふーん」

「いや、ふーんって。一応はやての事なんだけど」

「いや、ユウ兄の事だからどうにかなる方法を知ってるんやないかなーと思って」

「まあ、見つけてあるけどな」

「本当か兄貴！！」

「や、やめろヴィータ。首がしまる、ギブギブ」

「あ、ご、ごめん」

「いい、そんじゃ説明するぞ。はやてを救う方法、それは・・・」

「それは？」

「蒐集だ！！」

「「「「・・・・・」」」」

「・・・いや、ユウ兄。さっき蒐集しても暴走してまうっていっとったやん！」

守護騎士からは冷たい視線。はやてからは漫才のように突っ込まれてしまった。

「言い方が悪かった。ただ闇雲に蒐集しても意味はないって言いたかったんだ」

「どういうことなん？」

「管理外世界の魔法生物から蒐集を行ってはやてを真の主に覚醒させ、闇の書の闇、防衛システムの改修をする。そうすればはやては助かるというのが、一週間で考え出した作戦だ」

死神たちとヴォルケンリッター（後書き）

次回から本格的に物語が始まります

番外編　死神同士のとある日常（前書き）

今回はｏｍｅｇａｚｅｒｏ様の「死神さんたちの日常」とのクロスになります。

それは寂しい別れの物語

番外編　死神同士のとある日常

－零ｓｉｄｅ－

「零さんまた映姫様が呼んでますよ」

「うげぇ、またかよ！ちなみにサボったりするのは「ダメです」デスヨネ～」

ん、ああ紹介が遅れたな。俺の名前は零。一応死神だ。好きなものは甘いもの。嫌いなことは面倒なことだ。っへ？なんか性格とか喋り方とか違うって！？それは作者の文才が足りないせいだから諦めてほしい「何さっきからブツブツ言ってるんですか？」

「気にするな」

「？？？」

移動中

「何の用だ？」

「おほんっ！私がここにあなた達を呼んだわけは・・」

「（あれ？なんかデジャブ）」

「遠くの世界で転生者裁きよ！という訳でその世界の神のとこに送

るから。っあ、ちなみにそこの神は最近なったの」

「最近なったって映姫様知り合いなんですか？」

「まーね。今時珍しく仕事熱心な子でね」

「座標は？」

「２１１．９５６８６５よ」

「んじゃ、行ってきまーす」

「はーい、行ってらっしゃーい」

ドゴーーーン

「あ、頭が割れるように痛てぇ～～！！」

着地に失敗して頭から落ちたようです

「えーとここの神サマはっと」

零が周りを見渡すと、自分の世界をジッと見ていた女がいた

「ユウの教師姿も良いけど戦ってる時のユウもカッコいいな～。やっはりここはそのカッコよさをビデオに録画して永久保存しようってここにそんな物無いよ～」

・・・訂正。自分の世界を見ながら悶えている変態がいた

「（・・・帰りたい。仕事もバリバリこなすから帰らせてくれ）」

零が自分から仕事をしたくなるほどこの女と接するのが嫌なようだ

「うぅ、ならせめてこの目にしっかり焼き付けて・・・ってひゃあ～～れ、零さんですか？」

「確かに俺は零だが」

「い、いつからそこにいたんですか？」

「えーと、ユウの教師姿も良いけどの辺りから」

「最初から居たんですか～～！！ち、違うんです、あ、いえ違うんじゃなくて、えーと、あの今のは、うーんと、そのー、はうぅ」

余りの恥ずかしさにオーバーヒートしてしまった様だ。

そして

「これがここの世界に逃げ出した転生者の詳しい資料になります」

「ふーん、能力はうえきの法則の『ロベルト・ハイドンの能力』か」

「はい、いろいろ迷惑かけてすみません。それではよろしくお願いします」

「はいよっと」

ーユウｓｉｄｅー

ん、なんか変な視線を感じた気が・・・気のせいか。それより今はシャマルと蒐集活動中だ。

「そろそろ休憩しませんか？」

「わかったよ」

さて、休憩中に食べようとしまっておいた行きつけの店のチョコなんだが、

「この一個は大切に食わないとな」

このチョコを買ったとき一悶着が有ったのだが

回想

「ようばあちゃん」

「ユウ先生かい？　いつもありがとねぇ」

ここはユウがいつも通っている駄菓子屋さん。ここのチョコレートを求めて毎日来ている。

「いつもの二つ貰える」

ついにはバーのような会話で通じるようになった、駄菓子菓子

「ごめんなさいね。今日はあと一個しか残ってないのよ」

「な、なんだって〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「ば、馬鹿な。確かにここのチョコは隠れた有名品。だがそのことを知っているのは地元のわずかな人間だけ。これがうわさに聞く孔明の罠ってやつか」

「はい、百円ね」

「あ、あんがとさん」

ん、切り替え早いって？気にするな、俺は気にしない

ってなことがあったからこのチョコはいつも以上に大切に食わないと

「そんじゃ、いっただっきまーす」

そのチョコを俺が食べられることはなかった。ちょうど俺が持っていたチョコレートに、鉄の大きな弾丸が当たり、粉々に砕け散った

―???side

俺の名前は　　だってあれ？なんで名前が言えないんだ？まあ良いか。俺は小説なんかでよくある転生者だ。

トラックにぶつかる→白い空間→「あなたは死にました。でもこっちのミスだから転生してください」

となった訳だ。ちなみに能力はうえきの法則の「理想を現実に変える力」を貰いました。砂漠からのスタートみたいだが、オリ主らしくハーレム作るか

「その前に能力の試し撃ちだ『鉄(くろがね)』」

そう言うと腕が大砲のようになり、そこから弾丸が飛び出した

「おお、流石はロベルトの神器。すごい速さだ「ノオオオオオオオ

オオオオオオオオオオ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」なんだこの声？」

見てみると空中で頭を抱えている男と、それを宥めているシャマルが

「ってシャマル！！そうか、あいつが神の言っていた俺より先に来た転生者だな。ならあいつとシャマルを消して悲しんだはやてを慰めれば・・・ぐへへへへ」

ｌ零ｓｉｄｅｌ

報告だとこの辺りにその転生者がいるらしいなってかんじで探していたんだが、

「絶対に砕けない『百鬼夜行（ピック）』」

・・うんこの技はデータにあったロベルト・ハイドンの『理想を現実に変える力』を使った神器だ。それは分かったんだが、

「砕けないなら完全に消滅させるまで　滅すは“鉄”纏うは“体”」

あそこで今百鬼夜行（ピック）を消した奴は誰だ？

「よう」

とりあえず挨拶してみることにした

「あ、これはどうも。じゃなく、まさかお前が犯人か！！」

「犯人？何の話だ」

「決まっている。俺の今日楽しみにしていたチョコを食べようとした瞬間粉々にしたのはお前かって聞いてるんだ！」

！！！その時俺の後ろに稲妻が走った

見てしまったんだ。おそらく神器の当たったであろう場所

そこには変わり果ててしまったナニカがあった

転生者が何か言っていたが気にはならず、そのもうなんだったのか分からないソレを手に取った

ほのかに香るカカオの匂い

ナニカを包んでいたであろう銀の包み

そうそれはまさしく俺の大好きなチョコレートであった

「あの～、あなたは一体？」

「なあ、なんでだよ！！」

「へ？な、なにが」

「なんでこんな事になっちまったんだよ！！」

ここから先はチョコレート好きの会話になります

「ぐす・・・仕事が終わって・・・直ぐ行ったけど、・・・この一個しか残ってなくて・・・・でも・・・でも・・・」

「ああ分かってる。お前はよく頑張った。こいつらだって最後まで愛してくれて幸せな気持ちで逝けたんだと思う。だから」

「俺、守れなかったんだ・・・・最後の一個だったから・・絶対残さないようにしてやるって・・なのに」

「ユウ」

「零」

ガシッ

「えーと、一体私はどうすればいいんでしょうか？」

知らんがな

「そんな訳で俺は、アイツの命を奪ったお前を許さない」

「いや、命って。あれチョコレートだよな！？」

「うるさい。お前に残された道はただ一つ。俺たちに倒されることだ」

「ふざけるな。そもそもチョコに命なんてねぇだろ」

「「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ！問答無用だ！！！」」

「調子に乗んなよ。オリ主の俺にたてついたこと後悔させてやる『鉄（クロガネ）』」

「ジェラス、一から三番まで省略解放」

≪分かりましたマスター≫

「“召喚”無名刀」

「お、零は刀を使うのか。っつうかデバイス無しかよ」

「俺のはこの世界でいうところのレアスキルといったとこだ」

「またレアスキル。俺が言うのもなんだけど、もうレアでもなんでもないな」

「気にしたら負けだぞっとそろそろ弾丸が来るぞ」

「分かってるって」
ここまでの会話で1秒
「俺に任せろ。ジェラス、ブラッドカードリッジ」
≪ロード・カードリッジ≫
双剣から空薬莢が出て、ユウの魔力が跳ね上がる
ここまでで二秒　そして
「風牙・一閃」
目の前に現れた弾丸を切り裂く
相手が鉄(クロガネ)を撃ちだし、それを切り裂くまでわずか三秒の出来事であった
「それで、一体アイツの力はなんなんだ?」
「悪い、口で説明するよりも情報を頭に送ったほうが良いだろ」
「頼む」
そんなこんなで
「ふーん、レアスキル『神器』十個ある違った能力をある程度操作、さらにもう一つのレアスキル『重力操作』を使って戦う。度重なる

レアスキルの実験で心が壊れ、この世界を物語の世界だと思い込み、自分はこの世界の主人公だと思い込むっと。ワーソレハタイヘンナコトダネ～」

「おいユウ、セリフが棒読みになってるぞ」

「気にするな。だって別にそこまで気にすることじゃないからな」

「え、結構重い過去だと思うんですが・・・」

シャマルさんや。それは違うぞ

「どんなにつらい過去が有ろうと」

「「チョコレートを粉々にした罪には関係ない」」

「はぁ、それがチョコの為のセリフじゃなかったらカッコいいんでしょけどね」

「うるさいシャマル。とりあえず収集が出来るまで弱らせるから離れていてくれ」

「わ、分かりました」

「なに喋ってやがんだ『花鳥風月（セイクー）』」

「喰らえ！『快刀乱麻（ランマ）』」

そう言い腕から巨大な剣を降り下ろした

ガキーーーン

「おお、これが情報にあった三ツ星神器か。確かに巨大で中々の威力なんだが・・・・」

「ん、なんかあったのか？」

「いやなに、相馬と、って相馬って言うのは俺と前に戦った奴なんだが、ソイツと比べたら悪いかも知れないけどさ。ソイツと比べたら子供騙しみたいな技だな～と思ってさ」

ああ、相馬ってあの神が自分からこの世界に送った転生者か

「なんだと！この俺様が弱いだと！！もう許さねぇ。塵一つ残さず消してやる『十ツ星魔王（マオウ）』」

すると、奴の目の前に超巨大な猛牛のような生物が現れた

「あれが十ツ星神器　魔王。・・・って魔王ってどんな技だったっけ？」

《頭に直接情報を送ったのに忘れたんですかマスター》

「俺らしいだろ」

《確かにらしいですが・・・・ハァ、すみませんがもう一度説明してもらえますか零様》

「俺も忘れた」

《この人たちお似合い過ぎる～～》

「「いやぁ、そんなに誉めるなよ」」

《誉めてないですよ～～》

「とジェラス弄りはこの辺りにしといて、零。俺があれどうにかするから、俺の所に来ないようにしてくれ」

「任せとけ、十分で良いか？「こんなの一分で十分だ」了解」

んじゃ、これでいいか

「我、死神零が命じる。魔を押しとめ、我らを守り給え！！結界魔具、『不壊の空間（コワレズノリョウイキ）』二十分の一」

「■■■■■■■■」

う～ん、何言ってるかサッパリだな

「な、何やってやがるそんな結界さっさと破壊しろよ」

ん、なんであんな叫んでるんだ？ああ、魔王に『全てを破壊する』みたいな力でも使ってたのか

「ま、こんなもんか。ジェラス、サードモード」

《サードモードセットアップ》

お、もう終わったのか。意外と早かったな

「スフィアを収束。チャージ１００％」

《ダークナイトブレイカー》

「ダークナイトブレイカー！！！」

「■■■■■■」

「ギャァ～～～～」

あ、なんかユウの砲撃の余波でやられてる。あっけねぇ

そんなこんなで

「こいつリンカーコア無いのかよ！」

「ええ！！それじゃあ蒐集が出来ないじゃないですか」

「ならこいつどうする零？」

「ならこいつは俺がもらっていくわ」

「いいよ。リンカーコアがなければただ邪魔なだけだし」

「確かにその通りなんだけどな」

「二人ともっと言い方があったんじゃ」

「気にしたら負けだ」

「一体何に負けるんでしょう？」

「んじゃ、こいつはもらっていくからな」

「ああ、さらばだソウルブラザー（零）また会おう」

「ああソウルブラザー（ユウ）よ。また会おう」

「ああ、チョコレートの事じゃなきゃ感動する状況なんでしょうけどね」

「俺とこいつを転送っと」

「さて、今日の蒐集どうしよう？」

「そうでした。なんやかんやで今日は全然蒐集出来ませんでした！」

「そういえばユウが言っていた店のチョコを買い占めたの俺だって言っとくの忘れてたな。まあいいか」

番外編　死神同士のとある日常（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「そんな訳で零とのクロスでした」

ユウ
「おい、なんだ前書きのノリは」

赤黒
「うむ、ただのノリだ」

ユウ
「まあいいか。それで、次の更新はいつなんだ？」

赤黒
「未定だっちゃ？」

ユウ
「キモい」

赤黒
「自分でもキモいと思った。ってなわけで次回も」

赤黒＆ユウ
「「お楽しみに」」

ようやく原作開始？（前書き）

タイトル通り原作が開始・・・したんでしょうか？

ようやく原作開始？

―ユウside―

「投影（トレース）・開始（オン）」

干将莫邪を投影し、俺に向かっていく相馬

「だああ、ジェラス一から二番を省略解放」

≪オーライ。一番と二番を省略解放≫

それをファーストモードの双剣で防ぐ

「なんでフェイトちゃんまでそっちにいるの？」

「なんでだろ、成り行きかな？」

フェイトとなのはもお互いのデバイスをぶつけ合い

「お前たちは一体、目的はなんなんだ！」

「答える必要があるか？」

シグナムと執務官（確かクロノって言ったっけ）と対峙していた

そしてヴィータは

「ふごふごふごご!!（この縄ほどけ!!）」

縄で縛られていた（エロい亀な縛りではない）

こんな事態になったのは今から約一時間前の事であったあ・・・・

一時間前・・・

俺とフェイトとザフィーラ、ヴィータとシグナムとシャマルの二組に分かれて管理外世界の魔法生物相手に蒐集していた時のこと

「は?待ってくれ。どうやら最近疲れがたまって幻聴が聞こえ出したみたいだ」

「いや、私も同じよう聞こえたのですが」

「いーや、、あれは幻聴なんだ。誰が何を言っても幻聴に決まってる、それで本当はなんて言ったんだシグナム?」

「≪・・・ヴィータが海鳴市で戦闘に入り、敵は白い魔導師と見たことのない魔法を使う魔導師です」

「幻聴じゃなかった~~（泣）もう嫌だ。ジェラス、アリスに通信、そんで俺が合図したらアジトに転送するよう言ってくれ」

≪分かりましたから、マスターは自暴自棄にならないよう注意してくださいね≫

そんなこんなでザフィーラにははやてのところに戻ってもらい、俺

とフェイトはシグナムたちのいるとこに転移した
そして
「俺はなのはの友だ「何やってんだこのバカヤローが！！！」え？」
いまだに馬鹿をやってるヴィータに飛び蹴りをした
「何時まで馬鹿をやってるつもりだヴィータ」
「馬鹿ってなんだよ馬鹿って」
「ああああ、もうめんどいから少し黙ってろ」
そう言ってヴィータをロープで縛りつける
「ったく、シグナムもなんでこの馬鹿を止めなかったんだ？」
「ふがふがが（誰が馬鹿だ）
「すみませんユ≪悪い、ここは俺を主として話してくれ≫主。止めようとはしたのですが」
「まあいい、今はこいつらから逃げることだ、シグナムは・・っと、今出てきた黒い魔導師を、フェイトは白い魔導師をそれぞれ相手してくれ≪シャマルはあの後方支援の敵を見張っててくれ、あと蒐集はするなよ」
「「了解（わかった）≪了解しました≫」」

そして話は冒頭へ戻る

「（チックショー、予定ではまだこいつ等と敵対する場時期じゃないってのに）≪とりあえず全員離脱するから合図したら目を閉じてろ≫」

念話で指示を出し、相馬から距離をとって懐から“あるもの”を出した

「あれはまさか」

お、相馬たちは気付いたか。気付いてないのは地球出身じゃない二人だけか

「全員目をつぶれ」

その声で目的は目つぶしだと気付いた執務官はあの使い魔（ユウはユーノの事を使い魔だと思っている）の上に乗り、相手は全員目をつぶされるのを防いだようだ、だがまだ甘い

「まだ光は来ないのか？」

やはり皆いつまで経っても強烈な光がこないのを疑問に思って目を開けたな

「≪今だ≫ハイざんねーん」

その一言は俺が持っていたフラッシュ弾の光でかき消された

「≪アリス転送を≫」

「≪はいはい≫」

「では皆さん、また今度」

ここから、闇の書事件の幕が上がった。そのことに気付くものは二人。一人は闇の書側のユウ・クロサキ。そしてもう一人は

―？？？？？ｓｅｄｏｌ

「これで私は引き返すことが出来なくなったということか」

「父様」

「大丈夫だ二人とも。必ず闇の書を封印してみせる、そのために二人とも」

「分かってるよ父様。リスクは高くなるけど、特別捜査官が相手なんだ。可能性が残っただけでも良しとしなきゃ」

そうだ、たった一人の犠牲で闇の書が封印できるのだ。迷うことは許されない、これしか手段が無いんだ

・・・すまない“はやて”君

ようやく原作開始？（後書き）

そんな訳で最後の人は誰だかわかりましたよね。

そしてリスクの高い作戦とは、と言った疑問を抱え次回に続きます

（おい！

色々とO☆HA☆NA☆SHIする回（前書き）

ｏｍｅｇａｚｅｒｏ様、酸欠帝様感想ありがとうございます。最近はこの二人にしか感想が来ませんが、毎回感想が有るだけましだとポジティブに考え、これからもがんばります。

でも感想はもっと欲しいです（泣）

色々とO☆HA☆NA☆SHIする回

「こんの大馬鹿野郎が！！！！！！！！！！」

ゴッチーン

「痛ったぁ！！！！！！」

八神家に戻るまで終始無言だったが、家に入り防音結界をシャマルに張って貰った後の出来事であったｂｙシグナム

「ふざけてんのかヴィータ。あれほど魔導師は襲わないって約束しただろうが」

「・・でもよう」

「でももテロもない。あそこで魔導師に蒐集したら最悪闇の書を修正してもその修正した魔道書を破壊しに来るかも知れなかったんだ」

「・・わかったごめん」

「まあ魔導師を狙ったのは今回が最初だったから闇の書が絡んでるとは思われないだろうし、念のため離れた世界で蒐集すればいい」

「それと、プレシアとアリシアだけじゃなくこれからはアルフとザフィーラにもはやての護衛に着いて欲しい」

「それについてはアルフに聞いてみないと分からないけど、どうして？」

「あくまで保険だが、このことから管理局が俺たちの捜査に本腰を入れた場合、管理局の上層部に俺たちを監視していた奴がいる可能性が高い」

それはユウが例の一週間の約束をする前の事。八神家に入った後、念話でヴォルケンリッターにだけ≪八神家を監視している奴が居る≫と教えていた。そのことを聞いたヴィータがその監視者を殴りに家を飛び出そうとし、それを止めるのに一苦労したことは割愛する

「なぜ管理局が本腰を入れた場合犯人が管理局にいると？」

「それは俺たちを監視していた者、仮にこいつらをXとしよう。こいつらは俺たち、いや、闇の書を監視している。だがそれは何故だ？闇の書が目的なら場所が分かった時点で奪ってしまえばいいのに」

「それは、闇の書は・・・っは、まさか」

シグナムやシャマルとザフィーラはわかったみたいで、なるほどと言った顔をしている。逆に分かっていないのはフェイトとヴィータだな。ってかフェイトは仕方ないとしてもお前はヴォルケンリッターとして分かってろよ

「ああ。おそらくこのXは頁が集まり、はやてが管制人格を呼び出さなければ闇の書をどうこうすることが出来ないと知っている。そしてそれは無限書庫でなければ到底知りえない。ここまで言えば分っただろう」

フェイトとヴィータはようやく分かった顔をした。

「この後の上層部の人間がXまたはXの協力者だって言う推理を聞いて貰えるか？」

「はい。それでなぜ上層部の者が怪しいと思われるのですか？」

「これまでの話で管理局の人間の中に、こいつはYとでも呼ぶか。そのYがいるって言う推理には納得したな」

コクコク

全員が首を縦に振る

「ならこのYは闇の書の知識がこの中の誰よりも高いと思って聞いてくれ」

ユウは全員がうなずいたことを確認し、自分の推理を話し始めた

「まず、ヴィータにはああ言ったが、あれだけの事では闇の書が関わっているとは気付かれないだろう」

「んだと！だったらさっきの説教は何だったんだよ！！！」

「黙っていろヴィータ！！ユウ殿は可能性が低いと言われたがお前があんな事をしなければ可能性はもっと低かっただろう」

「やめろ二人とも！！！！」

ユウが大声を出すと、二人とも頭が冷えたのか喧嘩を止め、静かになった

「だが、ある意味ヴィータのおかげでYの存在を特定出来る」

「どういう事なんだ?私のおかげでって」

「簡単なことだ。俺たちは今まで管理外世界でしかも魔法生物相手で蒐集を行ってきた。だが今回は管理局に通じている魔導師を蒐集しようとした。闇の書は知名度の高いロストロギアだし、その捜査官の中には闇の書の犠牲になった遺族がいる。つまり闇の書が関わっているのではないかと考える。だが、普通に行けば闇の書が関わっていると言う推測は否定される」

「なぜ否定されると?」

「ここであの時シャマルに蒐集させなかったことが生きて来るんだ」

「私ですか?」

「ああ。あの時シャマルが蒐集をしなかったから、管理局は闇の書が関わっているとは考えない。なぜならあの時俺たちは普通に戦っていれば苦戦はするかもしれないが、負けることはなかったはずだ。その戦いの隙をシャマルが付けば蒐集は出来た。しかしそれを俺たちはしなかった。だから管理局の人間はこう考えるはずだ　闇の書が関わっているならあの時蒐集をしなかったのはおかしい。なら闇の書は関係ないのかもしれない　ってな」

「なるほど。しかしあの時ユウ殿のことを主と呼んでしまったのですが・・・」

「あれで良い。軽い疑心暗鬼におちいった人間はまず目上などの人間に相談するはずだ。つまりこれから管理局が本格的な捜査に乗り

出した場合・・・・・」

「「「相談を受けた相手がYってことですね（だな）（だね）」」」

ｌ相馬ｓｉｄｅｌ

「今回の件は、各世界で報告されていた魔法生物襲撃事件と同一事件と考えていいだろう」

「その根拠は何だクロノ？今回はなのはが襲われただけで魔法生物は居なかっただろ」

「いままでの魔法生物には全てリンカーコアの衰弱が見られた。今回もなのはのリンカーコアが目的だったんだろう」

「リンカーコア？っは、まさか」

「闇の書か？」

「ああ、その通りだ。ってなぜ君が闇の書の事を知っている！！」

「この前ロストロギア事件に関する資料の中にハラオウンの名前があったから」

「「「・・・・・・・」」」

なんか変な空気になっちまったな・・

「まあいい、この事は僕の師匠に当たる人が助言してくれたんだ」

「クロノの師匠って？」

「ああ、僕の父さんの同僚だったグレアム提督の使い魔のリーゼ姉妹だ」

「それはそれとして問題は、高レベルの魔導師を追い詰めたのに蒐集を行わなかったことと敵の中にユウ特別捜査官が居るということか」

「アイツの事だから何か考えが有るってことか？」

「そんなことは問題じゃない。次にあの人が現れたら対処できるのは相馬、お前しか居ないんだぞ」

「言っとくが倒すなんて無理だぞ。せいぜい足止めをして時間を稼ぐのが精いっぱいだ」

「それでも十分すごいんだけどね」

「ならユウ特別捜査官は相馬に任せよう。時間が空けばアリアとロッテが捜査の手伝いに来てくれるらしい」

「そ、そうなのか（どういう事だ？ユウが闇の書サイドに行ったからか？）」

「これで少なくとも数では同じくらいになったね」

その頃、アースラ内デバイスルーム

「ＣＶＫ７９２？」

「そうなの、レイジングハートが要求してるんだけど・・・これって・・」

「ベルカ式・・・カードリッジ・・システム・・・・・」

同時刻、シグナムとの模擬選後のデバイスルーム（プレシアの自室）

「あら、珍しいわね。バルディッシュがパーツを要求してるわ。なになに、ＣＶＫ７９２？そんな物無いわ」

レイジングハートの時とは違い、バッサリである

「そういうのはユウに言いなさい。私はあくまで整備やメンテ担当。フルメンテやパーツの取り換える知識は私にはないわ。はぁ。ユウには私から言って見るからちょっと待ってなさい」

「≪ユウ、今ちょっと良いかしら？≫」

「≪ん、ちょっと待ってくれ、今はやてたちと「ノブタをプロデュ

ース」を見てるから≫」

「≪・・・懐かしいわね。ってそうじゃないのよ！今バルディッシュがパーツを要求しているのだけれど≫」

「≪ＣＶＫ７９２か？≫」

「≪よく分かったわね≫」

「≪今回の模擬戦でカードリッジを使われて負けたからな。フェイトは悔しそうにしてたけど、デバイスも悔しかったようだな≫」

「≪それと、バルディッシュにカードリッジシステムを入れる時にアリシアも近くに置いて良いかしら？≫」

「≪いいぞ≫」

深夜　八神家の全員が寝静まった頃

Ｐｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ

ガチャ

「あ、もしもし俺だよ俺。いやぁこの前に事故っちゃって」

「それは、ご愁傷さまだね、相手が」

「それで慰謝料に１０００万が必要なんだけど」

「君だったらそれくらい出せるだろ。というか君が素直にお金を出すなんて」

「さっさと貸せよ」

「かつてここまでふてぶてしい金借りを見たことがないのだが」

「そんな訳で久しぶり“ジェイル”」

「ああ、久しいねユウ」

「そんで今回はあの時の返事を言うために電話したんだ」

「おお、それはＯＫと取って良いんだね」

「まだだ。有るロストロギアを作成してほしい」

「それはどういう物だい？」

「ああそれは　　といった物だ」

「ふむ、時間はかかるが出来るだろう」

「それで、製作時間は？」

「そうだね・・・いまから取り掛かったとして１２月の後半頃には出来そうだね」

「了解。そんじゃ待ってるからな」

そんな会話があったような

色々とO☆HA☆NA☆SHIする回（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「さて、今回はＰＶ１０万突破に感謝な回になりまーす」

相馬
「そういえば　～黒衣の死神ＩＦ～の話はどうした？」

赤黒
「決まりました。それではドラムロールスタート」

デレレレレレレ

相馬
「何時の間に」

デン

赤黒
「マスターは遠坂凛　そして完結後、違うマスターで、と言った感じになりました。すみません慎二の性格改造を期待した方、この次は桜がマスターの話なのでひとまず遠坂凛編で我慢していてください」

？？？

「ちょっと」

凛
「さっきから黙って聞いていれば。私は桜の代用品じゃないわよ」

赤黒
「確かに凛じゃ、桜の代用は出来ないか（胸の辺りを残念な目で見ながら）」

凛
「な、何ですって！！！死に晒せ～～～」

赤黒
「ギャフン」

相馬
「それでは、～黒衣の死神ＩＦ～と一緒にこの黒衣の死神も楽しみにしてて下さい」

バキッ　ドガッ　ゴキッ

相馬
「そろそろ止めましょうよ凛さん」

凛
「そうね。こんな奴を殺して私の経歴に傷がつくのも嫌だしね」

相馬
「（そういう意味じゃないんだけど）」

赤黒
「全くだ。しかもそんなミニスカートで踏みつけたら、“黒い”パンツが見えるだろ」

凛
「ピキッ　放しなさい相馬。殺す！こいつだけはここで殺すのよ！！！！」

相馬
「うわぁぁ、誰か助けてーー」

この後凛さんはスタッフ（相馬）の必死の説得で落ち着きました

新しい力（前書き）

皆さんお久しぶり、赤黒です。
遅くなってしまいましたが、これからきちんと投稿します

新しい力

強装結界内

十名の管理局員がヴィータ、ザフィーラ、シグナムを囲んでいる。

「管理局か」

「だが、我々の敵ではない」

「なら、問題はこの結界か」

しかし、管理局員達は一斉に散開して行く。

「っ！？」

「上だ！」

頭上を見上げる3人。

そこには大量の魔力刃が配置されていた。

「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！撃ぇ！」

何者かの号令と共に、頭上より迫りくる無数の魔力刃。

「下がれヴィータ、シグナム」

「「ザフィーラ！！」」

着弾と同時に魔力刃が爆ぜ、魔力刃の放ち手、クロノの視界が遮られる。

「少しは…通ったか？」

煙が晴れていく。

そこには無傷のザフィーラとヴィータ、シグナムが居た。

「大丈夫かザフィーラ？」

「問題ない。この程度でどうにか成る程、柔じゃない」

「くっ、無傷とは」

「《クロノくん！》」

「《エイミィか。どうした？》」

「《武装局員、配置終了。それと強力な助っ人呼んでおいたよ！》」

「助っ人？まさか！？」

クロノが眼下を見下ろす。

そこには、なのはと相馬が並んで立っていた。

「レイジングハート」

「レイナ、アクア」

「「セーット、アーップ！！！」」

「「ユニゾン・イン！」」

『セットアップ、認識しました』

『新システムのチェック開始』

「な、なんだこりゃ？」

「レイジングハートが？」

『なのはちゃん、落ち着いてよく聞いてね！レイジングハートには、新しいシステムを積んでるの！』

「新しい・・・・システム？」

『その子が望んだの。自分の意思で…自分の想いで！呼んであげて。その子の新しい名前を！』

なのはは自分の相棒を見つめ、新しい名を言い放つ

「レイジングハート・エクセリオン！」

バリアジャケットが展開され、デザインも微妙に変わってる。

その頃、八神家では

「宇宙キター！！！」

「んー。今回はネタに走りすぎたって感じだな」

「まだや。まだ電王みたくここから人気が出るかもしれへんやろ」

二人で仮面ライダーフォーゼを見てました

「《ユウ、ヴィータたちが管理局の結界に捕まったみたいなの。助けに行って貰えるかしら？》」

「《フェイトを連れていくけど良いか？カートリッジシステムをバルディッシュに積んだばっかりだからデータが欲しいんだよ》」

「《いつの間に・・・まぁ良いわ。じゃあお願いね》」

「どうしたんや兄ちゃん？」

「ヴィータたちがヤバイらしいからちょっと行ってくるから、ついでに夕飯の買い出ししてくるよ」

「なら、野菜がきれてたから買ってきて貰えるか？」

「了解～」

てなわけで、結界の外

「フェイト、先に言っとくが、カートリッジはまだ安全性に問題が有るから、ザンバーフォームは余り使うなよ」

「分かった。行こう、バルディッシュ・アサルト」

《イエッサー》

「それでは、ジェラスカートリッジ・ロード」

《ロード・カートリッジ》

ジェラスの双剣から弾薬が飛び出し、刃に風が集まって行く

「風牙・一閃!!!」

結界内部

「私達は、貴方達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて？」

「闇の書の完成を目指してる理由だ！」

「あのさぁ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ。『和平の使者な

ら槍は持たない』」

「「？」」

「話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴がいるか馬鹿って意味だよ。馬ー鹿」

「な！いきなり有無を言わさず襲いかかって来た子がそれを言う！？」

「それにそれはことわざではなく、小話の落ちだ」

「ヴィータ・・」

「うっせぇ！いんだよ細かい事は」

場が白けきっていたその時、結界が割れ、轟音が響いた。

「ユウ兄！！」

「来てくれたのですかユウ殿！」

「さっさと帰るぞ。買い出しもあるんだからな」

「（おう。全員、目と耳を塞げよ。）アイゼン！」

ヴィータが手に持った光球をアイゼンで打つ。

その瞬間、周囲を爆音と閃光が包んだ。

「引くぞ」

「あぁ」

音が止み、視界が戻った時には全員その場から消えていた。

やっと目に見える原作ブレイク（前書き）

忘れていた設定

ユウやフェイト、アリシアはなのは達管理局に顔を見せて以来休んでいます。
理由はアリシアが寝込んでしまい、学校に行けそうにないといった、嘘っぽくない嘘で誤魔化しています

やっと目に見える原作ブレイク

ー相馬ｓｉｄｅー

アースラ内での会話

「アルカンシェルか。あんな物騒なもの、最後まで使わずにすめばいいんだけど」

「クロノ君とロッテさんはいなくて、ユーノ君も無限書庫で闇の書について調べているところだから、今日はエイミィさんが指揮代行なんですよね」

「責任重大だねエイミィ」

「ま、実質アースラのＮｏ．３だしな」

「ははは。ま、非常事態なんて早々起こるわけが・・」

エイミィさんがカボチャを手に取る。
すると部屋中にアラートが鳴り響き、目の前には『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ』と赤い文字が表示された

「なんだっけ。こういうの『お約束』って言うんだっけ？」

「言うなアクア。俺もそう思ったけどさ」

モニター室に行き、エイミィさんがモニターを操作するとモニター画面にはシグナム、フェイトにアルフの姿があった

「文化レベルゼロ。人間の住んでない砂漠の世界だね」

「結界を張れる局員の集合まで、最速で四十五分。ああまずいなぁ」

エイミィさんはモニターを操作しながらあれこれと頭を悩ませてるようだった

「ならエイミィ、私が行くよ」

「ロッテさん！・・分かりましたならここはロッテさんに「いや、アクアも連れていって下さい」って相馬君！！」

「今回の目的は応援が来るまでの時間稼ぎ。なら人数は多い方が良いですからね。アクアもここの人たちに負けない位の実力を持っているから足手まといにはならないはずです」

「・・・分かった。ならロッテさん、アクアちゃん。お願」

と言い切る前にまたさっきの様に部屋中にアラートが鳴り響き、目の前には『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ』と赤い文字が表示された。

「な、もう一ヶ所？」

エイミィさんがモニターを操作すると、モニター画面にまた別の世界でユウとヴィータにザフィーラが飛行をしている姿が映される。そして、ユウの手には闇の書が握られていた。

「ユウ特別捜査官が居るなら、相馬君、なのはちゃん、お願い」

「「はい！！」」

「それとなのはちゃん。くれぐれも、くれぐれも、無理に倒そうとか、深追いしたりとかしたら駄目だからね！」

「は、はい」

なのはの性格ならやりそうだけど。気のせいかツインテールも垂れてるような・・・そ、それより、アクアの居ない実戦はこれが始めてだから気を引き締めないとな

ーシグナムｓｉｄｏー

今回の蒐集はいつもと同じくテスタロッサと守護獣（ミッドでは使い魔）のアルフと一緒に行っている。理由としては、シャマルは出来るだけ管理局に姿を見せたくないと言うことで待機。テスタロッサの母親とその姉は主はやての護衛。そしてヴィータの暴走を止めるためにユウ殿とザフィーラがチームを組み、消去法で私のチーム

にテスタロッサとその守護獣（くどいようですがミッドでは使い魔）のアルフが入り別れた。
そして

「私に対して一人で大丈夫か？」

「大丈夫よ、問題ないわ。だって私たちは別に倒さなくても良いのだから」

「（くっ、少し不味いか）」

私は内心焦っていた。ここで一対一を私に対して仕掛けるということはそれだけの相手だということ。それはテスタロッサ達が相手にしている敵にも言える。そして、ぐずぐずしていれば管理局の応援が来て、たちまち捕まってしまう。なら素早く目の前の敵を倒して、テスタロッサたちと一緒にもう一人の相手を倒すのが定石。だが、

「（打ち込む隙がない）」

確かにそこそこの実力者だとは思っていたが、その認識は改めなければならないようだ。私が予想した以上の実力者だ

「《スマンテスタロッサ。助けに行けそうもない》」

「《大丈夫です。私、負けませんから。シグナムの方は大丈夫ですか？》」

「《ふっ。見くびられたものだな。相手が一人ならば、烈火の騎士に負けはない》」

テスタロッサとの念話を切り、相手に集中した。しかし、強敵な為、失念していた。

「・・・・そろそろか」

確かに一対一なら負けはないが、敵が増えれば負ける可能性が有ると言うことに・・・・

―相馬ｓｉｄｅ―

「へぇ～、前の時より剣が力強くなったな」

「どうもありがと、さんっ！！！」

ガキッ

相変わらず剣では倒せないな。安易に攻めればカウンターを喰らい、

かといって守りに入れば干将莫椰が壊される。なら

「壊れる幻想（ブロークン・ファンタズム）」

壊されそうになった干将莫椰を爆破し、距離を取った

「我（われ）・契約文を捧げ（けいやくぶんをささげ）・天空を踊る光の魔獣を放つ（てんくうをおどるひかりのまじゅうをはなつ）」

複写眼を使い、指で空中に文字を書く。するとそこから光でできた不定形の犬のような獣が現れ、ユウに攻撃を仕掛けてくる。だがユウも負けてはいない

「ジェラス、サードモード&カートリッジ・ロード」

《サードモード。ロード・カートリッジ》

「物量作戦だ。闇弾よ、穿て」

素早くデバイスのモードを変え、その銃から空薬莢が排出されると、大量のスフィアが現れ全ての獣は消されてしまった。だが、今更そんな事で驚く俺じゃない。

「そっちがその気ならこっちも物量作戦だ！！稲光（いづち）　水雲（みずち）　紅蓮（くれない）　光燐（くうり）！！！！！」

高速で魔方陣を４つ書き、それぞれ違う魔法を発動させた

「集まれ闇弾。闇の中の光と成せ」

《ロード・カートリッジ！！》

ガションガション

銃型のデバイスから先ほどの様に空薬莢が二つ排出され、ユウの周りにあったスフィアが銃口に集まり、まるでなのはの集束砲のようになっていく。だがなのはの集束砲と違うのは、周りのスフィアを集束させていること。そして、集束砲とは違い、たったの数秒以下で魔法を構成し発射することが出来るということ

つまり

《チャージ率１００％》

「撃ち抜け、ダークナイトブレイカー！！！！」

《ダークナイトブレイカー》

俺が放った魔法とユウが撃った砲撃がぶつかり合い、相殺した。まさかあれだけの量の魔法を発動させてダメージを与えられないとは思わなかったので、次はどうやって攻めるか考えていると、離れた所でヴィータに向けて長距離砲撃を撃とうとしているなのはの姿があった

「レイジングハートバスターモード！
ディバインバスター・エクステンション！」

「え、ちょ、まっ」

「ディバイィィィィン・・・・バスターーーーーーーーーー！！！！！」

ズドーーーーン

「あ、直撃」

つい現実逃避してしまった。あれは絶対トラウマになる。そんなんだから十年後に『管理局の白い悪魔』って呼ばれるんだよ、怖いから言わないけど。まぁヴィータなら大丈夫だろ。だってなのはが砲撃に入る前に、

「ナイスシャマル、ザフィーラ。よしこのまま逃げるぞ!!」

ユウとザフィーラが消えていたから。おそらくはシャマルがやったんだろうな。さて、アクア達は大丈夫だったかな?

ーフェイトｓｉｄｅー

私とシグナムが、アクアロッテさんと言った相手に集中していた時、事件は起こった。
いきなり仮面を被った男がロッテさんの後ろに現れ、リンカーコアを抜き取ったのだ

「あ、ア〝ァァァァぁぁぁ！！」

「な、貴様！！！」
シグナムは勝負の途中で水を差した仮面の男を睨み付けるが、彼が手にしているものを見て思わず停まってしまった。
それは自分達が今最も欲するもの。リンカーコアだ

「さぁ、奪え」

シグナムは血が垂れるのにも気付かない位唇を強く噛みしめ、右手に握られているレヴァンティンはカタカタと震えていた。だがはやての事を思い出し

「スマンが私たちは逃げさせて貰う」

男が持っているリンカーコアを受け取り、そう答えた。
私もこの子と戦いたいという気持ちも有るが、あの誇り高い『烈火の将』が自身の誇りより目的を優先させたのだ。自分もここは我慢

するべきだろう。アルフも不満そうではあるが、私が諦めたので素直に諦めるようだ。

そうして私たちは、蒐集が終わったら集まるよう決めていた合流地点に向かって移動した

ーユウｓｉｄｅー

なんとか逃げ切って合流地点まで来ると、もうシグナムたちは着いていた。そして今回の蒐集の成果や変わったこと等を報告し合ったのだが・・

「俺たちの他に闇の書の完成を望んでいる奴が要るってことか」

「でも、闇の書は完成してもマスター以外には使えないし、その後直ぐに暴走するんじゃなかったっけ？」

「そうなんだけど、知らなくて完成を望んでいるのか、はたまた知

った上で完成を望んでいるのか」

めんどくささで言えば後者が確実にめんどくさい。前者ならば倒してそれで終わり、だが後者は理由が分からないから迂闊に攻撃することも出来ない。

だから早いとこ頼んどいた物が届いて欲しい。まぁ、いくらあの変態が天災（誤字にあらず）だからってもう少しかかるだろ

な～んて、思っていた時期もありました

「ユウ・クロサキ様ですね。私はウーノと申します。貴方がドクターに頼んでいた品をお届けに参りました」

と、八神家の前で紫の髪をした女が一冊の本を渡してきた。いや、確かに早いに越したことはないんだけどさ

「早すぎじゃね？」

現在　１０月１３日

これは、俺とジェイルが電話で約束した日の二ヶ月以上前の出来事である

やっと目に見える原作ブレイク（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「さて、最近リアルだけではなくネットでもハブられているんじゃないかと不安で胸が一杯になりながらの更新です」

ユウ
「やっと終わりが見えてきたな。一時は本当に終わるのかと焦ったけど」

赤黒
「あ、ちなみにこの作品はＳｔｒｉｋｅｒＳが本編で、この話は言わばプロローグのような形になっています」

ユウ
「プロローグでこんなに躓く作者の文才（笑）」

赤黒
「クソ、全く言い返せない（泣）」

タブー（前書き）

この話を書く途中、二回もデータが消え、挫折しそうになりました。だが、それでも立ち上がった。この小説を待って居てくれる人たちの為に

ユウ

「いや無いから。そんなこと言っても全然かっこよくないから」

解せぬ

タブー

ーユウｓｉｄｅー

「それで、なんでこんなに早かったんだ?確か１２月辺りで完成するって言ってただろ」

「ええ。その予定だったのですが、ユウ様が出来るだけ早くしてほしいと言いましたので」

「確かに言ったな」

「頼まれてから作り終わるまで徹夜で完成させました」

「なぁ、バカなのかアイツは。出来るだけ早くとは言ったが限度が有るだろ!!なぁ、バカなんだろアイツ。天才だけどバカだよな絶対」

「まあまあユウ殿。遅いよりは早い方がまだマシではないですか」

「だから限度が有るって言ったんだよシグナム。これが１０月や１１月だったらこんなには怒らないさ、だがな」

頭に出来た青筋がピクピクと動く為、ユウがどれだけ怒っているかが分かる。

こうなる前にヴィータやはやて達は予め別の場所に移動させたので、

今ここに居るのはシグナムとはやて達を移動させようとして出遅れたシャマルだけだ

「何でよりにもよって今なんだよ！！！！１０月位なら蒐集も終わりに来て困らないが、まだ半分しか蒐集出来ていないんだよ、嫌がらせかアイツは、まったく」

「それとユウ様。ユウ様がドクターと古くからの友人だと聞きました」

「厳密には、今のジェイルは昔の奴のクローンだから正しくは友人だったが正解だけどな」

《それでも今までを見てみればあの頃の彼と変わりが無いように思えますが？》

「そうだな」

人にとって知り合いが二人居て、どちらかが偽物だといった場合、姿で判断するか、記憶で判断するかの二つに別れる。ユウもその例に違わず記憶で判断するタイプになる。ちなみに、ジェイル・スカリエッティにこの質問を昔した時は「ふむ、利害の一致。利害が一致すれば例え偽物であろうと私はそれを本物と認めるよ」とのこと。何とも冷めた返答だが、本当にそう思っているから困る

「確かに俺と君たちにとっての父、ジェイル・スカリエッティとは利害で結ばれた関係だ」

と、イライラしていた為珍しく皮肉な返答をしたのだが、意味が解っていないらしく頭に？を浮かべていた。

そもそもこのウーノという子は覚醒して間もないのか、体は大人、記憶は子供といった状態で、大きな声を出すと分かり辛いが微妙に泣きそうな顔になる為、正直やり辛かった。これも計算してやっているなら会った瞬間殴り付けてやると密かに決意した

「それでは昔、貴方以外で女の人の知り合いは居ませんでしたか？」

「・・・・誰に聞いた」

明らかに彼の周りの空気が変わった。今まではめんどくさがりながらも、ウーノのことを気にかける居心地の良い空気。だが今は何者も気にかけない、いや、まるで人を蟲としてを見ているような、そんな空気だ。そんな空気を作っているのはあの翡翠の瞳。何時もと違いその瞳からは何の感情もなく、例え自分がこの後殺されると聞いても変わらないと思わせる、それくらい彼の瞳には何も写っていなかった。

「あ、えっと、ど、ドクターが研究中に言ってたんです。今の私ですら彼女には及ばないと。で、ですから、ドクターと友人のあ、貴方なら何か知っているのではと思って」

声を震わせ、最後は涙声になりながらも理由を言えたようだ。いや、気絶しないで言葉を話せるだけでも賞賛に値するだろう。

彼の瞳にシグナムは、一つだけ心当たりがあった。それは闇の書の蒐集を始めて一月が経った頃。その日の蒐集が終わり少し早い時間に夕飯を食べていた時。

その時の話題は確か、過去の闇の書の主についての話だったはずだ。といっても過去の記憶を全て覚えているのはヴォルケンリッターの

中でもザフィーラだけなので、必然的にザフィーラが話し役になってしまった。ザフィーラは主でも余り喋らない為、最初は自分が会話をリードするということに慣れていないようだったが、時間が経つと興味深い話なども多く話すようになっていった。酷い扱いをした主や、道具として使っていた主の話。はたまた我々の覚醒で心臓発作を起こして死んだ主も居たらしい。中でも興味深かったのは主はやてのように我々を家族として向かい入れてくれる主も居たらしい。その主はその晩忍び込んだ魔導師の盗人に殺されてしまった、その魔導師は魔力を持っていないと見せかけるために専用のリミッターを使い忍び込んでいた。だが予想以上に手惑い、魔法で殺してしまった。その魔力を感じたザフィーラが一早く駆け付けたが、既に絶命していた。その経験を忘れず、その次の主に会う時から狼の姿で警護し始めたのだが、今は関係のない話だ。

その話の中で、「とある騎士団の団長の元に転生した時、シグナムとその時の主は男と女の関係になっていた」というものが出た。当然私にはそんな記憶はないが、ザフィーラがそういうならば本当なのだろう。そのことで主はやてにからかわれていた時「そういえばユウ兄にはそういう女性っておらんかったの？」なんて質問が飛び出した。この後、「ほなら私が貰ってあげようか？」なんて返しをしたかったのだろう。だが、そうはならなかった。その質問をされたユウ殿はウーノの質問の後と同じような瞳をした。そしてこう返すのだ

「「いや、全く心当たりがないな」」

と。そしてその後何時もの優しげな翡翠色の瞳に戻り

「「きつい言い方になって悪いな。だが本当に心当たりがないんだよ」」

なんてフォローも一語一句変わらずだ。フォローの時もさりげなく詳しい話を拒否してることから過去の話がタブーなのか、それともその女性に関することがタブーなのか。ただ一つ言えることは、ユウ殿にとってその過去は忘れてはならない記憶なのかもしれない。そう思う理由は騎士の勘、としか言いようがないのですがね

私がそんな感傷に浸っていると、突然ユウ殿の電話の着信がなり響き、その電話に急いで出た。

「もしもし」

「僕だ。早速だけれど、仕事の依頼だ」

「それはどちらの依頼だ？特別捜査官の方か。それとも」

「もちろん後者の方だ。というより前者の依頼以外では報告しないだろ。全く、こんな無駄な確認で僕の貴重な時間を浪費してしまったではないか」

「それこそ意味のない言葉だろ。この確認が一番大事なんだって」

「まあいいさ。詳しい資料はジェラスに送っておくから」

「ああ」

「悪いな。急な仕事なんで今から行かなきゃいけないんだが、ウーノはどうする？」

「ええ。ドクター一人では不安なのでそろそろ帰ります」

「そうか。気をつけろよ」

「はい。それでは失礼します」

そう言ってウーノはジェイルのアジトへ転移し、俺も目的の世界にアリスの転移装置で転移するのだった。

だが、この選択肢がその後の　　を変更できる最後の選択だったことを、この時の八神家も、ユウですら、知る由もなかった。

とある管理世界

「座標は本当にここで合ってるんだろうな」

「間違いありません。アリス様の資料に不備があったとは思えないですし」

「ということはガセか罠か・・」

悩んでいるとアリスから電話が入った

「すまないユウ。その依頼はガセだったよ。破壊してほしいと渡された資料にあった研究所は等の昔に無くなっている」

「ならその依頼者の目的はなんだ?」

「そのことで君に謝罪がある」

「なんだ?藪から棒に」

「ユウが居なくなって直ぐ、八神家が仮面の男二人に襲撃された」

「なっ!!!!ま、まさか」

この時になって気付いた。いや、気づいてしまったと言うべきだろう。あの時、自分自身ああなると思考が甘くなること。その絶好のタイミングでアリスから依頼の電話。なぜあの時もっと疑わなかったのだろう。もっと怪しまかったのだろう。俺をここに連れてくるのが、いや、もっとシンプルに、俺を八神家から遠ざけるのが目的だと

タブー（後書き）

そんな訳で順調にフラグを作りながらの次回です

闇の書　覚醒（前書き）

十月一発目の更新です。
前回の娘ＴＹＰＥでＦｏｒｃｅのアニメ化と囁かれてまして、友達に「アニメ化？ないない（笑）やるならＶｉＶｉｄが先だろ」と大口叩くが、ネットでの『アニメ化決まった』等の記事を見る度に、嘘になってしまうのではないかとハラハラして、今月号の娘ＴＹＰＥを見て，アニメ化は無いとホッとしたようなガッカリなような、微妙な気持ちの赤黒です。

では、長くなりましたが本編をどうぞ

闇の書　覚醒

ーユウｓｉｄｅー

ヤバイヤバイヤバイヤバイ

「ジェラス、ここから転移できる最短の場所を検索！！」

《もうやってます。ですがこの辺りは磁場の影響か、安全に転移出来る場所は近くても約１０キロ先です》

「チッ、俺がここに来るのも作戦の内って事かよ。まぁ良い、ジェラスはそのまま検索を続けててくれ」

《ダメ元ですがね》

「アリスはシグナム達と相馬に連絡だ」

「もう策を使うのかい？」

「ああ、正直こんなに早く使うとは考えていなかったから、まだアイツにしか伝えてなかったんだが」

「ユウでも予想外な事が有ると分かっただけでも収穫だよ。シグナム達にはユウの代理として指示しよう。相馬には僕からも頼むから

安心したまえ」

「ああよろしく頼む。（予想外か？いいやアリス、この状態は監視者を見つけた時に想定していた。俺が少ないとはいえ仕事で居ないときに襲撃されることをな。だがそれは確実では無い割ににリスクが高すぎる。だから早い段階でこの策はあり得ないと踏んだんだが・・・・）」

ユウは何時も何十と策を予想し、それに合わせて行動している。しかしどんなに多くの策を予想したところで考えているのは一人、故にどうしても偏った思考になってしまう。それが今回の結果だ。今回は敵が割に合わないリスクの策を使わなければならない程焦っていることまで読みきれなかった

「仕方ない。ジェラス、ジェイルに通信を繋げ」

《了解マスター》

「ユウ。ジェラスで私に連絡をしたということは・・」

「ああ。緊急の用だ。アイツは？」

「彼女かい？整備は既に終わっているよ」

「ならアリスの所へ送ってくれ」

「任せてくれたまえ」

「（さて、犯人は分かった。その後の策も有る。今度こそ、今度こそは変えて見せる。決められた運命って奴を）」

ー相馬ｓｉｄｅー

くそ、完全に油断した。まだ9月の終わり頃だから動かないと思ってたのに

「くっ、まさか管理局すらも囮に使うとは・・・」

シグナム達ヴォルケンリッターとフェイト、アルフは仮面の男が発動させたバインドで動きを封じられている。いや、それは俺たちにも言えることだ

「（アリアは蒐集されていたから、もう前線には出ないと考えていたのに・・）」

「なっ!?仮面の男が・・・」

「もう一人だって!!」

こうなったのは一時間前。地球でパトロールをしていた時、いきなり結界が張られ、ヴォルケンリッターとフェイトにアルフ、そしてはやてが現れた。全員が驚いている隙にバインドでなのはと俺、シグナムとフェイト以外が動きを封じられた。

そして二人目の仮面の男に捕まった

「この人数ではバインドも通信防御もあまり長くは持たん。早く頼む」

「ああ」

そう言い合うとシャマルからくすねたのか、闇の書が仮面の男の手に存在し、闇の書のページを開いて、シグナム、ヴィータ、シャマルに向け、三人の胸元からリンカーコアが摘出される。

三人とも苦悶の声をあげるが、どこ吹く風で蒐集を続けている

《主よ》

そんな時にレイナから念話が来た

「《何だレイナ》」

《奴から合図が来た》

「《・・・・分かった。クロノ、聞いているよな》」

「《既に確認は済んでいる。クロサキ特別捜査官の実力を知ってい

て今姿が見えないのはアリアとロッテだけ。９割９部グレアム提督と使い魔二人が犯人で間違いない》」

「《そうか。ならそっちは任せるからこっちは任せてくれ》」

「《元よりそのつもりだ》」

こんな風にユウと連絡を取り合う関係になったのは、アリアが蒐集される時だ。

戦いながら「《このまま戦いながらで良いから聞いてくれ》」と念話で話しかけ、そしてグレアム提督にその使い魔を犯人と予想し、（と言うよりはユウとアリスが調べた容疑者の中で一番犯人の確率が高いからしい）グレアム提督らが犯人だという根拠、更には犯人の動機まで念話で語り、そして、これからはある程度使い魔を泳がせて、いざ行動に移る前に現行犯で捕まえるつもりだから、自分に協力するか自分の邪魔をしない様にしてくれと頼んで（いや、喋り方では完全に命令だったけど）渋々俺が協力した訳だ。

そんな思考に陥っている間も仮面の男たちは蒐集を中止したりはしない。

相馬が思考の海にいる時も仮面の男は淡々と『闇の書』に告げる

『蒐集』

仮面の男に唆されるかたちで『闇の書』は蒐集活動を始める

「最後のページは不要となった守護者が差し出す。これまでも幾度かそうだったはずだ」

そうして悲鳴の様な、主を守れなかった嘆きの様な声を上げながらヴォルケンリッターは自らが身に付けていた物を残し消えた。

そして時間を空けずに今度は闇の書に原作には出てこなかった、恐らく蒐集が５００を越えると使えるようになる力を使った

『強制発動』

「ぐうぅっ」

仮面の男がそのキーワードを言った後、はやてが胸元を押さえうずくまった

「くはぁ……かはぁ」

苦しみながらも息を吐いているはやての頭上には蒐集を完全にではないが終えた『闇の書』が、足元にはベルカ式の魔法陣が展開していた。
そして

「うわあああああああああああああ！！」

はやてがあらん限りの声を上げた。
まるで獣の咆哮のように。
すると紫と黒が混じったかのような柱が、はやてを中心に生じた

「我は『闇の書』の主なり……。この手に力を……」

その中で虚ろな目をしているはやては『闇の書』を手にしていた。

「封印解放」

はやてが短く告げると『闇の書』は『解放』と短く発して、はやて

は肉体がどんどん変化していく。
成人女性の身体になってからショートヘアがロングヘアになり、露出している左足には赤いバンドのようなものが絡みつき、同じ様に右腕にも赤いバンドが絡みつく。
左腕には赤い紋様が施され、閉じていた瞳ははやてとは違って真っ赤だった。
両頬にも赤い紋様が浮かび、こめかみ辺りに羽飾りのようにも思える黒い翼が施されており、衣装も黒をメインとしてポイントカラーとして金色の装飾がなされていた。
背部にも黒い翼が展開され、はやては完全に闇の書の姿へと変貌を遂げた

「また全てが終わってしまった。一体幾度、このような悲しみを繰り返せばいいのだろうか・・」

その言葉はこの場にいる誰に向けられたのかはわからない。
独り言のようにも、誰かに助けを求めているとも思える内容だ。
すると闇の書の意思が顔を正面に向けてきた。

「我は闇の書。我が力の全てを……」

闇の書の意思は右手を前に出してから天にかざす。

『デアボリックエミッション』

『闇の書』が電子音声で発すると、かざしている右手に掌サイズの黒い魔力球が練り上げられていく。
それはやがて、闇の書の意思をも上回る大きさの巨大な魔力球となり、黒い閃光を周囲に纏わせて禍々しく存在していた。
だがすぐに発射しないところを見ると準備に時間がかかると思われ

る。
だがそれはあれ以上もの大きさの砲撃を射つということなのだが

ーユウｓｉｄｅー

「よし、このままあれを破壊すればあの力は俺の物だ」

「まぁ、俺の物云々は置いといて、まずは周りに気を使うことを覚えろ。『勝って兜の緒を締めろ』ってことわざ知らねぇのか」

「知らん。と言うか何だ貴様は？」

ああ。そう言えばこのことわざは日本の武士になぞらえたからミッドの人間は知らないか。っと言うか

「お前俺の事知らないのかよ？」

「あ〝あ〝〟、貴様なぞ知らんなぁ」

「（ウザッ）ま、まあお前があの使い魔を操っていたのは分かっているんだ」

「ああ、あの駒か。あの駒共（使い魔達）はよくやってくれた。私がちょっとどんなことをしても闇の書の主に絶望を与えるよう精神を誘導してやっただけで自分の主すら裏切ってくれるのだからな」

「成程。精神の誘導がお前の能力か。だが残念だったな、今執務官があの使い魔と提督の所へ向かった。これでお前の計画はオジャンだ！」

「ふふ、いいや。お前を殺してあれを破壊すれば俺の計画に問題は無くなる」

殺す。ユウの立場、特別捜査官は表向きには『管理局最強の魔導師』がなれるもの。だが本当は暗部の存在を知るものや、活発に動こうとしている反管理局組織の壊滅、さらに管理局が秘密理に研究した施設の破壊等、良くも悪くも、特別捜査官とは『管理局最強の犬』だからこそその存在は提督以上、いや、暗部の存在を知る人にしか知られていないのだ。

そして、そんな任務をしている為、殺すと言う言葉は人より多く耳にする。大抵は其処らのチンピラの様なただの脅し。しかし稀に本気で殺そうとしてくる者が居る。そしていざそうなった場合、脅しか本気かを見極めることは、特別査察官には必要な力だ。

では目の前の男は果たしてどっちか？

答えは・・

「（どちらにも属さない。確かに本気で殺そうとはしている、だがそれは本人の意思ではなく、こいつとは全く別の存在があの体を使

って動いている・・のか？）」

この様な人間を過去に一人見たことがある。その人間にもこいつと似た妙な力を使っていた。そしてペンタゴンの一人に分けていただいた力だと言っていた、ならこいつも

「お前もペンタゴンの一人に力を貰ったのか？」

「ペンタゴンの存在を知っているか。なら俺から生きて逃げれないと分「関係ない」な、なに！！」

「関係ない。お前が誰だろうとどんな力を使おうと俺は殺せない」

そう言ってＯＦＦにしていたスイッチをＯＮにする。

このスイッチを自由にオンオフが出来るようになったのは“彼女”のおかげだ。

昔

「理性が本能に負けそうになった時は、まず落ちついて大きく息を吐くんです。顔を拭ったりしても良いですね。そうすれば大丈夫！」

ああ、あの時は確か「それは緊張した時落ち着く方法だろ」って言ったんだっけか。そしたら、知ってましたよだの、間違ってなんかいませんだの言って、最終的には「ユウなら心配無しです。何てったって私『白炎の死神』の相棒なんですから」って言うんだ。そんなこと言われたら何も言い返せなくなるって分かってるくせに。

そしてこの会話から理性と限りなく本能に近い状態に変わるスイッチが生まれた。それは

「さて、殺すって言うなら殺されても文句はねぇよな」

左手で顔を上から拭う事。これが俺の殺合の時の、本能と理性が半々になった状態。

「それは俺の台詞ｔぐ、グフッ」

俺と奴が今まさに距離を詰めようとした瞬間、奴の腹から手が伸びてきた。いや

「（手が伸びてきたんじゃない。全く気付かせない位高速で転移して腹を突き刺したんだ）貴様、何者だ！」

「流石はユウ様。一瞬で“これ”から私に意識を変えるとは、正直もう少し遅れると思っていたのですが」

「お前は誰だと聞いている！！」

今度はさっきより強く言うと、サングラスをかけた執事姿の男は血の付いた手袋を変える手を止め

「おっと。私としたことが名乗るのを忘れていました」

と明らかなオーバーなリアクションを取り、ニヤけ笑いはそのままに自分の紹介をした

「私は“これ”に力を与えた者の仲間、ペンタゴンの一人で仲間からは『雀蜂』と呼ばれています」

「す、雀蜂!?まさか、お前は」

「ええ、ござっしの通りですよユウ様。いえ、『毒蛇』と言った方がよろしいでしょうか?または「ユウで良い、その名を口にするな!!」クッ、これは予想を遥かに超える殺気。この私ですら無意識に戦闘体制を取ってしまうとは」

「どうする?今殺しても良いんだぜ」

「止めておきましょう。今回はユウ様に迷惑をかけた“物”の始末と謝罪に来ただけですから。ではユウ様、この度はご迷惑をおかけしました。私はこれにて失礼させて頂きます」

雀蜂がペコリとお辞儀をした後、また一瞬で消えてしまった。恐らく他の能力者の力だろう、念のためアリスには逆探知を頼んだが徒労に終わるだろう。
今度は右手で下から髪を掻き上げる様に顔を拭い、(これがいつもの状態への戻り方)自身のデバイスと語り始めた

「それにしても、あの雀蜂とか言う奴」

《ええ。ペンタゴンの一人と名乗ったのですから奴の仲間でしょうが》

「そんなことは分かってるんだよ。問題はアイツの帰り際だ」

《何ですかマスター?特別変わった所は見えませんでしたが》

「バカ野郎!!お前は何処を見てたんだジェラス」

《（そ、そんな大事なヒントが合ったなんて）》

「アイツのお辞儀・・・・キッチリ４５度だった」

《ええ、そんな事だろうと思ってました。一瞬でもマスターに期待した私がバカでしたよ。それより早く皆さんのフォローに行きますよ》

「分かってるって、そう急かすなよ」

と何時もの恒例になりつつあるユウとジェラスの漫才が終わり、急いで闇の書を元の夜天の書に直す為、ビルとビルを足場に駆けて、闇の書の主人格が居るであろう場所に向かっていった。

闇の書　覚醒（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「どうも。タンスの角に小指をぶつけるより階段から落ちる回数の方が多い赤黒です」

ユウ
「よう。近頃家電に懲り始めたユウだよろしくな」

相馬
「何だ？この始まり方」

赤黒
「いや今回から定着させていこうかと」

相馬
「何故に？」

ユウ
「実はな。最近ニコニコ動画のゆっくり実況にハマってな。ここでも定着させようかとしてるんだ」

相馬
「今頃！！しかもそろそろ完結らしいのに！」

ユウ
「ま、マジかよ！どうなんだ作者」

赤黒
「そんな事より、そろそろ新アニメが始まりますね。『灼眼のシャナ?』『フェイト／ゼロ』『ベン、トー』『シーキューブ』『侵略イカ娘?』と期待の作品目白押し。さらに新作ゲームが出たためなのか『魔法少女リリカルなのはA，s』の再放送が始まります」

ユウ
「明らかに話を反らしたな。まあいい、そいいや相馬。お前予約したなのはのゲームどうした?」

相馬
「あ、あ〝ぁぁぁぁぁぁ。で出来ない（泣）」

赤黒
「まぁ、……ドンマイ」

ユウ
「そんな訳で次回も」

赤黒&ユウ
「「お楽しみに」」

ユウ
「で、そろそろ完結ってマジか）ヒソヒソ」

赤黒

「ああ。完結って言っても新しくＳｔｒｉｋｅｒＳ編に移るだけだ。今回はその為の伏線張りの回だからな）ヒソヒソ」

ユウ
「成る程。所で新作ゲームってこの小説が人気出たら俺達でれるか？）ヒソヒソ」

赤黒
「大人気小説になれば或いは）ヒソヒソ」

ユウ
「マジ。ヨッシャー人気出すために頑張るぜ～」

赤黒＆ユウ
「「オー！！」」

注（どんなに人気がでてもゲームには出ません。ご注意下さい）

闇の書の意思（前書き）

Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏが始まりましたね。

セイバー　執事服可愛いです
アーチャー　ＯＰ似合いすぎ
ランサー　イケメン特に目元のホクロが良い
ライダー　訳は分からないがそれが良い
アサシン　分身テラ強す
バーサーカー　お兄さんかっこよ過ぎ
だがキャスター、てめぇはダメだ

闇の書の意思

ｌ相馬ｓｉｄｅｌ

「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）！！」

右手を前方に突き出す。

そして、真名と共に顕れる光り輝く7枚の花弁。

ガガガガガガガガガガガガガガッ！

「ふぅ。まさか三枚も割られるなんて。自信無くすなぁ」

いくら時間をかけた砲撃とは言え遠距離では最強の盾（今の所は）であるロー・アイアスの花弁を砲撃で三枚も割られると言うことは原作よりもパワーが増してるって事。

「な、なのは、あの盾最高で何枚まで割ったこと有る？」

「え、ええと、確か模擬戦の時スターライトブレイカーで三枚位だったかな？」

「えええええ～～～～～～。と言うことはあの一撃、なのはのスターライトと同じ威力ってこと！！」

ううむ。実際はアクアとユニゾンしてなかった時だから威力はなの

はより上なんだけど、言わない方が良いかな？

「と言うか今まで敵同士だったのにいつの間に和解したんだよ！？」

「今さっき盾で砲撃を防いでくれてる時に」

そんな余裕があったなら少しはこっちを手伝ってくれてもと思った
俺は悪くない。
何でこんなツッコミが出来るほど余裕が有るかと言うとだな・・・・
・・・ビルを影にして隠れているからでした、正解者拍手

パチパチパチパチパチパチパチパチ

・・・・・・いやね、何が言いたいのかは分かりますよ。そりゃ俺だって転生者の端くれだし、チートな力も有るから俺Ｔｕｅｅｅとか、降臨・無敵・最強ＤＡとかやってみたいとは今更だけど思うわけさ。だけど、だけどね・・・・・・・・・・・・俺の相手が全員俺以上の超チートなんだよ、ユウとかユウとかユウとかさ（泣）

しかもリインフォースは原作でもなのはフェイトと二人がかりでも相手にならないチートなのに、原作以上に強いんだよチクソウ

って何の話だったっけ？あ、そうだ隠れて何をしてるかって話だったな。これからユウと合流して結界内に囚われているであろうアリサとすずかを救出、そしてフェイトを蒐集されずにはやてを説得？して夜天の書と闇の書の闇を分離と、これらの事柄をスムーズに行うシュミレーションしてたんだ。転生前も頭は勉強ばっかしてたせ

いか一流大学に入れるだけの頭は持ってたからこういったシュミレーションは（争い事は除く）得意なんだよなぁ。そのかわりこういう戦闘以外のシュミレーションは時間がかかる、と言うよりマルチタクスが凄い苦手なんだよねぇ。戦闘はエミヤの能力で何とかなるけど、貰った能力以外は転生前と変わらないからこればっかりは半年じゃ上手く出来ないのも仕方ないよね、ね？

スーパー言い訳タイム↑ほ、ほらさ、元々転生前はバリバリのって程じゃないけど年二回のコミケには毎回行く位のヲタクだったから争いには無縁だったし、二次小説でよくある赤ん坊からのリスタートって訳でもなかったからな。更には高町家で剣を教えてもらおうとした事が合ったんだけど、妙に反対されたんだよ。まあいきなり居候の九歳児が、「剣を教えてくれ」って言われて、「分かった」って答える訳ないよな。

そんな仕方のない理由で仕方なく隠れている、べ、別に俺がビビってるって訳じゃないんだからね。・・嘘ですビビってます本当にありがとうございました。

言ったでしょう俺戦闘経験なんて殆ど無いって。そりゃあ昔ははっちゃけてた時期もあったけど、そんな精々ナイフに向かっていく程度の経験、この世界じゃ全く意味無し。言うなれば、遠距離で拳銃の撃ち合いをしろって言っているようなもの。無理無理

っへ、なんでこんな落ち着いて喋ってるのかって？それはね・・・

「咎人達よ。滅びの光よ……」

右手をかざして、闇の書の意思は発する。

するとかざした右手に桜色の魔法陣が展開され雷雲を突き抜けるようにして桜色の光が無数、魔法陣に向かっていく

現在進行形で逃げながら現実逃避してるからです（泣）

「星よ集え。全てを打ち抜く光となれ……」

桜色の光球が肥大化していく。

「貫け。閃光……」

「フェイトちゃん。何もここまでしなくても……」

フェイトに抱きかかえられているなのははどこか緊張感のない台詞を吐く。

「至近距離からだと最悪相馬の防御の上からでも落とされる！距離をとらないと！」

ありがとうフェイト、それだけで俺は救われるよ
なんて事を思っていると

≪左方向三百ヤード。一般市民がいます≫

とバルディッシュ・アサルトが短く現状を報告した

「「え！？」」

「（やばっ。パニくりすぎてアリサとすずかの事すっかり忘れてた）」

「なのは！フェイト！それに相馬まで。って言うか何にその恰好？」

「だあぁぁぁ！うっさい！！後で全部説明すっから！」

「なのはたちが」

「「なんで私達！？」」

ってテンパりすぎて口調まで変わってるし！

「悪いが悠長に説明してる時間はなさそうだぜ。なのは、フェイト、ちゃんと後ろで障壁張ってろよ」

さて、これを使うのはなにげにこれが初だけど後でロストロギア指定にならないか心配なんだよね。そうなったらユウに何とかしてもらうけどさ。んじゃ、やるか

「起きろ、『乖離剣エア』」

王の財宝（ゲートオブバビロン）に手を伸ばし、一振りの剣を抜き出す。

顕れたのは刀身の部分が3つの円筒の重なった形の剣。そしてその表面には楔に似た文様が刻まれていた。

その円筒が声に合わせ唸りを上げて回転を始める。

回転は加速を続け、遠心力を加え、剣の威力をさらに高めていた。

回転した接続部分からは膨大な魔力が漏れ出しており、円筒は回転数を高め、人知を超えた烈風を巻き起こす。

極限を超えて高まった風圧は、世界をも切断する刃となって、乖離剣から噴出していく。

「天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）！！！」

隔離剣エア

英雄王ギルガメッシュだけが所有する乖離剣。
エアを最大出力で解放した時の名称は天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）
天地乖離す開闢の星は乖離剣エアによる空間切断で、圧縮され鬩ぎ合う風圧の断層は、擬似的な時空断層となる。
その威力は約束された勝利の剣（エクスカリバー）と同等か、それ以上の出力を持つ“世界を切り裂いた”剣。
対粛清ＡＣか、同レベルのダメージによる相殺でなければ防げない攻撃。

桜の奔流と空間切断

その二つがぶつかった瞬間、凄まじい衝撃波が襲った。
なのはとフェイトにはあらかじめ障壁を張るように言ったので大丈夫だろう。その後ろにアリサとすずかがいるから余計に。
そしてそのままスターライトブレイカーを打ち負かした。

その戦いを遠くのビルの屋上から見ている人物が居た。
一人はユウ・クロサキ、そしてもう一人は

「あれが予言の中心人物、剣崎相馬。そして私の上司になる男。・・・・・だけどあの程度じゃ私は認めない」

黒いワンピースを着、綺麗な蒼髪に翠の瞳をした女性が相馬の戦いを分析し、あの程度と評価した。つまり、少なくとも今の相馬と同レベルの力をこの女性は持っていると言う事になる。

「そう言うなレン。どれだけの力を持っていようが所詮はまだガキだ。それよりまたリボン付け忘れただろ。しかも髪の毛も梳かしてないし、仕方ないちょっとこっち来い」

そう言うと女性(レン)を自分の前まで移動させ、ポケットから櫛を取り、髪を梳かし始めた

「何時も思うけど、なんで櫛をポケットに入れてるの?」

「誰かさんが風呂から上がっても髪を梳かさないから癖になったんだよ」

「ふーん」

レンは自分の事を言われていると思っていないのか頭に？を浮かべていた

「もういい諦めた。力加減は・・」

と聞いた時には、このビルの屋上に着いた時から全く表情が変わらなかったレンの表情が気持ちよさそうに（ユウにしか分からない程の変化だが）していた。

「っと、終わったぞ。リボンは自分で巻けるか？」

「出来る」

渡されたリボンを頭に付いている核石を隠すようにに巻きつけた

「これからどうするレン？」

「ユウの予想通り」

「なら９７管理外世界の王に俺のデバイスとこの名刺を渡せ」

「仕事用の名刺と同じ」

「裏に特殊なインクで文字を書いてある。そこに目的が書いてあるんだ」

「分かった、アル転送お願い」

≪わっかりました。転送術式展開、転送開始ヒャッホーイ≫

「五月蠅いアル」

その一言を最後に消えてしまった

「相変わらず変なテンションのデバイスだな」

≪そうですね。っと見たところ相馬様が前線で他の二人はサポートに回っているようですよ≫

「お、アルフとゆ、幸村だったっけ?≪ユーノ様です。誰が親方ＬＯＶＥの真っ赤っか武将ですか≫そうそうユーノユーノ、この二人もサポートに回るから俺はもうちょい休むかねぇ」

≪サボらないでください、と言いたいんですけど仕方ありません。はやて様が起きるまでですからね≫

「了解、流石は相棒。話が分かる」

戻って相馬ｓｉｄｅ

「刃に以って血に染めよ。穿て。ブラッディダガー」

「王の財宝（ゲートオブバビロン）」

赤い魔力刃と無数の宝具がぶつかり合い爆風を起こす

「（さて、どうするか）」

離れれば魔法、近づいても盾で防がれ下手したら蒐集される。
だが盾を無視して攻撃できる破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）は使ったら管制人格に傷を付けた時点ではやての身に何が起こるか分からないから却下、元々威力のの低い破戒すべき全ての符（ルール・ブレイカー）は論外。っつうか比較に出す時点でありえない。
そしてこのまま攻撃していてはジリ貧、かといって動きを止めるにしても有効な宝具が思いつかない。

……あれ？軽く詰んだんじゃね？

いや落着け剣崎相馬。クールになるんだイケイケやれば出来る気合の問題だ出来る出来る絶対出来る出来ないって考えちゃダメだ出来るんだ俺は。出来たら今日から君も〇造だ

なーにやってんだろ、俺

ここまで来ると攻撃するのも馬鹿馬鹿しくなってくるな……、でも原作通りなら時間が経てばはやてが目を覚まして管制人格を止めてくれるんだけど、色々原作と変わってるからあんまり当てにできなさそうだしなぁ。
結局の所闇の書の意思に魔力ダメージを与えてはやてを叩き起こすしか方法は無さそうだな。となるとあの盾を突破し、尚且つはやて自身及び管制人格を傷付けないレベルの威力を持つ宝具といえば・・・・・ってあれ？

「なあレイナ。つかぬ事を聞くが俺って普通の魔法は使えたりするのか？」

≪当たり前であろう。むしろ今まではこの世界で言うレアスキルで戦っていたのだ、魔法が使えない道理はないし、一通りの術式は揃っているから今からでも使えるぞ主≫

「よっしゃ、早速やるぞレイナ。なのはたちもアシスト頼む」

「「うん！！」」

「行くぞ」

これはまず、フェイトがソニックフォームで撹乱し、なのはと俺で誘導弾を撃ち続けフェイトに攻撃する余裕をなくす。そうして防御に気を回してる間に説得して止めてもらう作戦だ。決して他人任せではない。

「おい、さっさと止まれよ。はやてもお前もこんな事望んでないんだろ！！」

「……それでもいい。私は主の願いをかなえるだけだ」

闇の書の意思は誰に聞いてもらいたいわけでもなく、独り言のように呟く。

「願いをかなえるだけ？そんな願いではやてちゃんは本当に喜ぶと思ってるの！？」

なのはが苦悶の表情を浮かべながらも彼女の台詞に反発する。

「心を閉ざして、何も考えずに主の願いを叶えるだけの道具でいて貴女はそれでいいの！？」

「我は魔導書。ただの道具だ」

「ふざけんな。お前は言葉は使える、心もあるんだ。そうでなかったら、本当に心がないならその涙はなんなんだよ！！」

「お前達に理解してもらおうとは思っていない。それにこの涙は我が主の涙。私は道具だ。悲しみなどない」

「悲しみなどない？そんな言葉、そんな悲しい顔で言ったって誰が信じるもんか！」

フェイトも自身のことのように悲しげな表情になりながらも言葉を続ける

「貴女にも心があるんだよ！悲しいって言っていいんだよ！」

「貴女のマスターは、はやてちゃんはきっと応えてくれる。優しい

子だよ」

「だから、頼む。はやてを解放して武装を解いてくれ。お願いだ！」

三人の言葉に彼女は沈黙していたが答えを発する前に、周辺に異変が起こり出した。

激しい揺れを起こす地震が起き、地面の一部を等間隔で打ち破り、マグマの柱が出現したのだ。

「早いな。もう崩壊が始まったか……」

「私も直に意識をなくす。そうなればすぐに暴走が始まる」

「意識があるうちに、主の望みを叶えたい」

闇の書の意思の想いを汲むかのように、闇の書が輝きだしてから、右手をかざす。

その直後になのはとフェイトを囲むようにして、無数の赤い刃が出現する。

赤い刃は導火線の短い時限爆弾のように輝きだす。

「闇に沈め……」

「ッチ。アクア水の防域」

相馬の指示でアクアが大気中の水分を集め、三人を覆いこみ、爆風を防いだ

「この・・駄々っ子ぉ！」

フェイトはバルディッシュ・アサルトを大きく振りかぶって中腰になる。
手甲、足甲に展開されている黄金の翼がバシュンと唸りを上げる。

「言う事を・・」

両脚に力を溜めてから、空を地面を蹴るようにして駆ける。

「聞けえええええええ！！」

風を感じ、風と共になるような感覚でフェイトは闇の書の意思に向かっていく。
対して闇の書の意思は突進するフェイトに何の警戒もせずに、左手に浮遊している『闇の書』の角度を百八十度変えた。

「お前も我が内で眠るといい」

フェイトには聞こえない声で呟く。

「はあああああああ！！」

バルディッシュ・アサルトを速度を殺さずに、流れるようにして振り下ろす。
ガキィンという音がフェイトの耳に入る。
闇意思が『闇の書』をかざして、黒い魔法陣を展開していたのだ。

「戻れフェイト！！」

「！？」

相馬が叫ぶが一歩遅く、フェイトの身体に異変が生じ始めた。
全身が黄金に輝き、力が抜けていくような感覚に襲われ始めていたのだ。

「フェイトちゃん！！」

するとフェイトを救いになのはも向かう

「お前も眠れ」

「（俺はまた救えないのか？いや、まだだ）あきらめてたまるかぁ！！！時を止めるギアス！！」

相馬の目が赤い鳥のような紋様になり、時が、いやここにいる相馬以外の体感時間が止まった。
しかしこのギアスは時を止めている間自分の心臓も止めてしまう弱点がある。だから

「なのはだけでも助ける」

そして時は動き出す

「そ、相馬君！！！！」

やがてフェイトと相馬は光の粒子となって、その姿を消してしまった。

『吸収』

『闇の書』は短く告げると、自身を閉じた。

「全ては安らかな眠りの地……」

闇の書の意思（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「はいはーい。遅くなりましたが更新しました」

相馬
「また新しいキャラと伏線だな」

赤黒
「さて今回の新キャラ、と言うかとあるアニメのキャラは一体誰でしょうか？ヒントは作者の携帯の待ち受けに一時期していたキャラです」

相馬
「誰も聞いてねぇよ」

さてここからは一度やってみたかった予告になります

蒐集されてしまったフェイトと相馬

フェイトは知らない女性となり金髪の男と話していた

「なぜ貴方はここまで自分を蔑ろに出来るんですか！？」

相馬は思い出したくない過去に直面する

「そう、俺が親と妹を殺したんだ」

そして一人で戦うなのはの前に原作では敵だった子が味方となる

「ユウが来るまであんたに力を貸してやるよ」

そして主人公は夢の中

「Z～Z～Z　うう～もう食べられない　んん～むにゃむにゃ」

次回　魔法少女リリカルなのは　黒衣の死神

「過去」

次回もドライブイグニッション

っあちなみにドライブイグニッションって直訳で『駆動装置点火』って意味らしいよ

赤黒
「それでは次回も」

赤黒&相馬
「「駆動装置点火」」

過去（前書き）

遅くなり皆さんスミマセン

遅れを取り戻そうとしたら最長の文字数になってました。

どうしてこうなったｏｒｚ

過去

―なのはｓｉｄｅ―

『状況確認。フェイトちゃんと相馬君のバイタル健在。『闇の書』の内部空間に閉じ込められているだけ。助ける方法、現在検討中』

エイミィの報告でフェイトと相馬はとりあえず生きていることは分かったが、助ける方法は分からないため、不安になりつつ闇の書の意思を見据える

「我が主も彼ら達も覚める事のない眠りの内に終わりなき夢を見る。生と死の狭間の夢――永遠だ」

闇の書を閉じ、前に浮かしながら彼女は淡々と告げる

「永遠なんてないよ。みんな変わっていく。変わっていかなきゃいけないんだ。わたしも。貴女も！」

なのはは俯いた顔を上げながら真っ直ぐにレイジングハートを構える。

とそこに、転移魔法で一人の、いや一人と言って良いか。小人のように小さな容姿をした者が現れた。

「あれ、あんたユウっていう、こうやる気のなさそうな、目が死んでる男を知らないか？」

いきなり現れた子は本人が聞いたら激怒するような情報で聞いてきた。まあ、否定するつもりはないが

「知ってるけど、今ここには居ないよ」

「マジでか。クッソー早く着いちゃったのかよ」

この子の言うことが本当ならば、ユウさんは今ここに向かって居るのであろう。彼であればこの相手を倒すことなど造作もない。ならば私は

「ねぇ、出来たらあの子を倒すのを手伝ってくれない？」

「……良いぜ。ユウが来るまで協力してやるよ。アタシの名前はアギト、アンタは？」

「なのは。高町なのは」

「よし、ならこの時だけアタシの力を使わせてあげるよ“炊き出しなのは”」

「高町なのはだってば！！誰も炊き出しなんてやってないよ！！！」

「悪い悪い、こっちの名前は覚え辛らくてな、た……旅立ちなのか？」

「知らないよ！！」

……その頃

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼
△▼▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

空が曇天に曇り、空気も重く、周りの建物も殆どが壊され、砕かれ、崩れていた。そんな町だった場所でフェイトは意識を取り戻した。

「えっと、ここは一体何処なんだろう？」

いくら記憶の片隅で引っ張り出そうとしても出てこない。
元々自分の記憶はアリシア・テスタロッサのもので、自分自身の記憶には心当たりがない。念のためにアリシアの記憶を見て思い出してみるがやはり思い当たる節がない。
それもその筈だ。アリシア・テスタロッサが死亡したのは約５才の頃で場所は母さんが働いていた実験場の近く。それに母さんは娘の自分から見ても子煩悩だ。こんな場所にアリシアを連れてくるとは考えられない。
そして私の容姿にも問題がある。今の私はバリアジャケットを着ておらずドレスの様な服装で体も成長していた、特にむ、胸が。

「こんな所に居たんだね■■■■■」

この人の言葉で分かった。今の私はフェイト・テスタロッサではない誰かになっているのだろう。
根拠は有る。この姿の人の名前に関わる事は聞こえない様になっているのだろうが、少なくともこの姿の人は名前は5文字。私もアリシア姉さんも4文字だから私達以外の人なんだろう。
そう考えていると、私の意思を無視し、勝手に口が動いた

「ええ。人を殺してそれを祝うなんて、こんな事を考えるのって可笑しいのかしら？」

どうやら私に出来るのは思考し、この会話を聞き続ける事だけらしい

「可笑しくはないさ。■■■■■とは違って、皆不安なんだ。だから大々的に勝利を祝うことでその事実を忘れたいんだろうさ」

「兄様、貴方はやはり……」

「ああ、行って来るよ。私が居ない方が士気も高まるだろうしね」

「なぜ、なぜ貴方はここまで自分を蔑ろに出来るんですか！！！」

「俺は……」

言葉を続けようとしたが、何かに気付き薄く笑った

「そうか、成る程。君はフェイトちゃんだね」

「！！！」

彼がそう言った瞬間私の姿が何時ものバリアジャケットになっていた

「いや、無理に話さない方が良い。これから君のある意識を封印する。覚えては居ないだろうが聞いてほしい。君は予言に必要なんだ、それと」

意識の封印やら予言やら良く分からない単語を並べた男の人は私の頭に手を置き、誰かに許しをこうような表情を浮かべ

「彼の側に居てくれとは言わない。けど信じててほしい」

そう言った。その時暗がりで隠れていた顔が月明かりに照らされて一瞬だけ見えた。

あれは……オッドアイの……右……あ、か

ーなのはｓｉｄｅー

「爆風でも食らっときな」

アギトちゃんが腕から炎の爆風を出すが、右手で盾を出して防がれる。でもこれで周りを爆風の煙で包み、見晴らしが悪くなる。そこに

「ディバイン・バスター！！！！！」

私の砲撃が襲う。これなら当たると思ったが、片手で砲撃を放ち防がれてしまった。

「ちょっ、嘘だろ！？あのタイミングでなければの砲撃を防ぐか普通」

《ミスアギト。マスターの名前はなければではありません》

ありがとうレイジングハート。でもどうしよう今のを防がれたら私に出来るのは……

《手段ならあります》

レイジングハート・エクセリオンは迷える主に答えを出した

《エクセリオンモードにしてください》

なのはは驚きの表情を隠せない。不安の色も浮かび上がっていた。

「だ、ダメだよ！アレはまだフレーム強化していないから使っちゃダメだって。私がコントロールに失敗したらレイジングハート壊れちゃうんだよ」

《大丈夫です、マイマスター。私は貴女を信じています。貴女も私を信じてください！！》

「レイジングハート……」

と私たちの会話を聞いていたアギトちゃんが

「おっ。何か秘策が有るのか？ならその時間くらいはアタシが稼いでやるよ」

とそう言って何処からかお札のような物を出した

「炎帝よ走れ！！呪相・炎天」

そのお札を投げつけると、そのお札から炎が吹き出し闇の書さんの動きを制限した

「今だ。砂塵のなすだ」

「だーかーら高町なのは。もうニュアンスしか合ってないよ。もういいや。いくよ、レイジングハート、エクセリオンモード！ドライブ！！」

なのはの命令と共にレイジングハートは紅珠部分を光らせる。
するとレイジングハートの四箇所に桜色の環状魔法陣が出現し、ヘッド部分が横に開き、機械部分が露出
、さらに杖部分の先端がスライドする。
ヘッドがより鋭くなり、紅珠部分付近にヘッドと同じカラーリングをしたシャープなウイングが出現する。
レイジングハート・エクセリオン・エクセリオンモードの完成である。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼
△▼▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

周りは炎に包まれ、今にも崩れてしまいそうな場所。そして二人で押せば何とか動かせそうな瓦礫の下敷きになっているのは俺の父親

「は、早く逃げるんだ相馬。私に構わず、行け！！！」

ああ台詞まで一緒だ。全く余計な事をしてくれたもんだ

俺、剣崎相馬は頭が良かった。いきなり自慢から入るのもどうかと思うけど、実際にそうだから我慢してほしい。

それはどっかの二次小説みたいにアンサートーカーを持ってるとか、そんな凄いものではなく、精々小学6年生の時には中学の勉強の殆どを理解していたと言った程度のものだ。そんな程度ならば世界中探せばいくらでも居るだろうが、この時の俺は天才の俺なら何でも

出来ると本気で信じていた。

中学に入ってカラーギャングの様なものを作り、他のチームと争ったりもした。
俺が作ったチームは一年で殆どの他チームを飲み込みその町で事実上の一番になり、人数も最初の頃に比べるのもバカらしくなるくらいの人数になった。
こんな時間が永遠に続くとは考えてはいなかったが、少なくともこの時にはまだ続くだろうと思っていた。

しかしこんな時間の終わりは直ぐだった。
チームの集会を終えて帰ると、家が燃えていた。
後から聞いたが、誰かが捨てた煙草の火が原因だったらしい。

俺は真っ先に家の中に入り父親を探した。
この後父親の「人の役に立つ正義の味方のような男になれ」との言葉を胸に叔父の居る東京に引越し、正義の味方として地域の清掃からカラーギャングの解体作業までやったり、その途中でＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのアニメを見てオタクになったりと色々あったんだ。
正直ゼウスさんに転生してほしいって話になった時、チートに喜んだって気持ちもあったけど、もう一つにゼウスさんを助けることが出来たって言う事実に喜んだって気持ちがあった。

だけどユウがアリシアを蘇らせた時思った、いや思ってしまったんだ。
この火事が起きたって歴史を消滅させれば親父は蘇るんじゃないかって。
だけどここでなら、ここで俺が親父を置いていかないで助けていれば、皆で馬鹿やって、就職どうしようなんて騒ぎながら結局皆でド

ンチャン騒ぎで盛り上がる。
そんな、平和な未来も有るんじゃないかって。でも

「（出来ないよなぁ。あんな顔を見たら）」

俺が変わりに蒐集された時、あんなに泣きそうでそれを誰かに悟られないようにした、そんな表情をされたら

「悪いな親父。まだアンタを助けるわけにはいかないんだ」

「そうか。あっちで惚れた子でもいたか？」

「分からないさ。なんせ皆まだ小学生だからね」

「まあお前の母親には負けるだろうが

「はいはい」

その言葉を聞いた親父は満足した表情を浮かべた。
そうだ、俺が正義の味方を目指そうと決めた一番の理由は、この満ち足りた表情の時どんな事を思っているか知りたくて始めたんだったな

「出口ならこの瓦礫の向こうだ」

出口の場所を知ると蒐集された時のバリアジャケットになっていた

「じゃあ親父、行ってくる」

「おう。当分こっちに来るんじゃねぇぞ」

「分かってるって。投影・開始（トレース・オン）」

エクスカリバーを投影し空間を切り裂いた

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

暗くて上も下もないような空間に私服姿の八神はやてはいた。

（う…………うん。眠い。）

閉じていたゆっくりと両目を開くと目の前に黒い衣装を纏っており、両腕両脚を露出している銀髪の女性が立っていた

「そのままお休みください。我が主。貴女の望みは全て私が叶えます」

彼女の言葉をはやてはぼんやりと聞いている

「目を閉じて、心静かに夢を見てください」

彼女は優しく、はやてに告げた。

はやてはこの女性の言葉に誘われるように意識をもう一度手放そうとしたが、彼女の言葉に一つ気になり、思考し始めた

（私は、何を、望んでたんやっけ？）

ぼんやりとしながらも思考を最大限働かせていると

『夢を見ること。悲しい現実は全て夢となる。安らかな眠りを』

姿は見えないが、さっきの女性の声がはやてに眠りを誘うように囁いた

（そう……なんかな？）

はやては疑念に思いながらも、身体を襲う心地よさに支配されようとしていた

「わたしの本当の望みは……」

はやてはぼんやりとしながらも口を動かして、声に出す。

両目は先程と変わらず半分閉じた寝ぼけ状態だった

「健康な身体。愛する者達とのずっと続いていく暮らし。眠ってください。そうすれば夢の中で貴女はずっとそんな世界にいられます」

彼女の誘いにはやては

「せやけど、それはただの夢や」

ハッキリと拒絶の意思を告げた

「私は、こんなん望んでない」

もう一度、はやては現状に対しての『否定』の言葉を目の前の女性にぶつけた

「貴女も同じはずや！！違うか？」

「私の心は騎士達の心と深くリンクしています。だから騎士達と同じ様に私も貴女をいとおしく思います。だからこそ貴女を殺してしまう自分自身が許せない」

闇の書の意思はその胸に秘めた思いを口にした

「自分ではどうにもならない力の暴走。貴女を侵食する事も、暴走して貴女を食らい尽くしてしまう事も停められない」

彼女の悲しい声を聞いたはやては

「覚醒の時に今までの事は少しはわかったんやろ？望むように生きられへんかった悲しさ。わたしにも少しはわかる。シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた」

彼女の言葉に対しての自分気持ちを話していく

「けど忘れたらあかん」

そしてはやては車椅子からゆっくりと立ち上がると、目の前にいる女性の左頬に手を当てる。

「貴女のマスターは今はわたしや。マスターの言う事はちゃんと聞かなあかん」

するとはやてと闇の書の意思を中心に足元には白く輝くベルカ式の魔法陣が展開された。

ーなのはｓｉｄｅー

アギトが放った火柱が消えたが、予想通りダメージは無かった。なのはは追撃をするためレイジングハートを闇の書の意思に向けた

「ひとつ覚えの砲撃。通ると思ってか？」

なのはより高い位置に佇んでいる闇の書の意思は、両掌に黒い魔力球を出現させた

「通す！レイジングハートが力を貸してくれている！命と心を懸けて応えてくれている！」

レイジングハートのカートリッジ射出口からカートリッジが二発排出され、ヘッド部分から桜色の翼が左右に二枚ずつ展開される

「泣いてる子を救ってあげてって！」

《A・C・Sスタンバイ》

レイジングハートが発すると同時に、なのはの足元に桜色のミッド式魔法陣が展開され、時間と共に魔法陣の輝きが更に増す。
今までとは違うと感じたのか闇の書の意思はは表情を変える

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム！」

《オープン！》

するとレイジングハートのヘッドから桜色の刃が出現した

「エクセリオンバスターA・C・S！！ドライブ！！」

左手に出現した黒い魔力球を渦を巻くような防御壁に変化させて防ごうとする。桜色の刃が防御壁に触れて、火花が飛び散り

「届いてぇ！！」

防御壁を桜色の刃は食い込み、レイジングハートは更にカートリッジを排出し、その度に魔力が増幅されていく。

「ブレイク……」

食い込んだ桜色の刃の先端から桜色の魔力球が構築されていく。

「まさか……」

彼女の動揺が篭ったかのような声がなのはの耳に届いたが、畳み掛ける。

「シュートォォォォ！！」

「はあ……はあはあ……はあ……」

なのはは右手で左肩を押さえながら呼吸を整える。

左手に握られているレイジングハートは先程の魔法による負荷を防ぐために排熱処理を行っていた。

ガシュンとヘッドの一部分がスライドして蒸気が噴出される

（ほとんどゼロ距離。バリアを抜いてのエクセリオンバスターの直撃。これでダメなら……）

しかし煙が晴れると、そこには身体に傷らしい傷はない闇の書の意思が佇んでいた

「もう少し頑張らないと、だね」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼
△▼▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

はやては車椅子に腰掛けて両手で闇の書の意思の両頬に手を当てていた。

彼女は、はやてと視線を合わせるようにして膝をついている

「名前をあげる。『闇の書』とか『呪いの魔導書』なんて言わせへん。わたしが呼ばせへん！」

「わたしは管理者や。わたしにはそれができる」

「……無理です。自動防御プログラムが停まりません。管理局の魔導師と兄上の知り合いと言う者がが戦っていますけど、それも……」

「停まって……」

はやては闇の書の意思の両頬に触れたまま、両目を閉じて念じるように呟いた。

するとそれに呼応するかのように足元の魔法陣が輝きだす。

「ん、なんか様子が可笑しいぞ？」

アギトとなのはが構えていたが急に動かなくなり疑問を浮かべていたら

「《外の方！管理局の方！そこにいる子の保護者の八神はやてです！》」

「はやてちゃん！？」

声の主がはやてだと知り、目を丸くする。

「《もしかして管理局の方って、なのはちゃんなんか？》」

「うん。色々あって今アギトちゃんと一緒に闇の書の意思、じゃなくて夜天の書の意思さんと戦ってるの」

「《ごめん。なのはちゃん。アギトちゃん。その子を停めたってくれるか？魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が走ってると管理者権限が使えへん。今そちらに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから》」

はやては大まかになのはとアギトに伝えるがなのはには難しかったのか目をパチパチとしばたかせながらも状況を理解しようとする

「ま、要するにぶっ飛ばして起こせって事だろ」

「良く分かったの」

「夜天の主の名において汝に新たな名をあげる。強く支える者。幸福の追い風、祝福のエール……リィンフォース」

暗闇に満ちた空間は、はやての優しさの光に包まれた。

「新名称『リインフォース』　認識、管理者権限が使用可能になりました、ですが防御プログラムの暴走は止まりません、管理から切り離された膨大な力は、直に暴れ始めます」

「うん、まぁそれは何とかしよか、兄ちゃんもおるやろうしどうにかなるやろ、行こうか、リインフォース」

「はい、我が主」

はやてが出てきたのとほぼ同時にフェイトと相馬が出てきた。

「おいで。わたしの騎士達」

はやてが術式を発動させると足元に白いベルカ式魔方陣が現れ、その中から守護騎士が現れた

「我等、夜天の主の元に集いし騎士」

シグナムが瞳を閉じたまま言う

「主ある限り我等の魂、尽きる事なし」

続いてシャマルが目を閉じたまま言う

「この身に命ある限り、我等は御身の下にある」

ザフィーラが告げる

「我等が主。夜天の王。八神はやての名の下に！」

最後にヴィータが両目を開いて高らかに宣言した

「夜天の風よ、我が手に集え！　導きの風！　リインフォース！　セーットアップ！」

そして掛け声とともにはやての体が騎士甲冑に包まれていく。

髪の色は薄くなり、瞳も青に変わる。

「おーす、皆お疲れ。じゃこれから作戦通りにあの闇の書の闇を破壊するから」

「って最初からこうなることが分かってたのかよ」

「まあね。じゃあやるかアギト」

「おうさユウ」

「「ユニゾン・イン」」

「ってお前ユニゾンデバイス見たことないって話は何処いったんだよ」

「ああ、あれ。あれは普通に嘘。だってあの時は敵同士だったから」

「あっそう」

疲れた顔を浮かべながらもうコイツの言う言葉は真に受けないと心に決めた相馬だった

過去（後書き）

はやてたちを救出することに成功したなのは達。
後は闇の書の闇を破壊すれば事件は解決だ。

そして現れるなのは達に似た少女達。
彼女達の正体とは、っていうかなのはのゲームをやったことがある人なら普通に分かるはず

「我にひれ伏せ塵芥共」

「今の僕ってカッコイイ？」

「この二人がスミマセン皆さん」

頑張れ星光、負けるな星光、作者はマテリアルの中で星光の殲滅者が一番好きです

次回

魔法少女リリカルなのは　黒衣の死神

『闇の書の終焉』

ぶっちゃけ作者はこの話の為だけにをＡ'ｓを書いていると言っても過言じゃないです

闇の書の終焉（前書き）

ようやくここまで来れました。

ちなみに理解って英語でリーズンと言うらしいですね。書いていた時に初めて知りました

闇の書の終焉

ーアギトｓｉｄｅー

「「ユニゾン・イン！！」」

アタシとユウが久々にユニゾンすると、ユウの黒髪が金色に、翡翠の瞳は緋色へと変化して、ユウの感情がアタシに伝わって来た。

「（期待はしてたけどやっぱ変わらねぇか）」

そう。普通ならユニゾンデバイスとユニゾンしたら、ある程度の感情がユニゾンデバイスに伝わる様になっている。
だけどユウからは何も伝わってこない

「（まあ高々一年足らずで何が変わるとは思ってなかったけどな）」

ユウとアタシの出会い四五年前のとある違法研究所だった。
元々アタシはレプリカではないオリジナルの古代ベルカ式のユニゾンデバイスだ。だからなのだろう。気が付いた時には非合法組織の研究所に貴重なサンプルとして囚われていた。そして多くの実験で心身共に傷つき、疲弊していつか壊れてしまうのではと覚悟していた時にそれは起こった。
突然大きな音がしたと思ったら天井に穴が空いて一人の男が現れたんだ

「ここが最深部で間違いないよな？」

《ええ。今回は珍しく地図通りに進みましたからね》

「それで、お前がオリジナルの古代ベルカ式ユニゾンデバイス『烈火の剣精』で間違いないな？」

「う……ま……まチガ」

自分としては久しぶり、いや、思い出した時には既に研究所に囚われていたから人と話すのは初めてだからもう少し話したかったが、言葉が何故か喋り辛かった

「無理に喋らなくて良い。人は、長く会話が無い場合、次第に話す事自体が困難になってくる。人間と体式が似ているユニゾンデバイスにも同じことが言えるらしいな」

そう言うと突然現れた男がアタシのことを興味深く観察し始めた。改めてこの男を見たが、はっきり言って異常だ。アタシがこの研究所に居る間に世間のファッション等が変わっていなければこの男を見た全員が全員「異常だ」と判断するだろう。

見た目は二十代中盤で黒いＹシャツの様な服とズボンを着て（これがこの男のバリアジャケットなのだろう）そこそこカッコイイと言える容姿をしているが、今も滴っている返り血が全て台無しにしている。

黒かったバリアジャケットは返り血でどす黒い色になり髪の毛は元が黒かったのか赤かったのか分からなくなっていた。

それだけ返り血を浴びると言うことはここに来るまで数多くの研究者を殺してきたのだろうが、この男は全く動揺している様子はない。

「さてお前はここで死にたいか？死にたいなら勝手に死ねば良い。だが」

とそこで言葉を切ると血だらけの男は

「生きたいって言うなら俺が救ってやる。自殺願望が有る奴を助ける程暇な訳じゃないからな」

と言って右手を差し出した。

しかし長い実験のせいでアタシの心が壊れ始めているからなのか、その男の瞳には、希望も、絶望も、快楽も、恐怖も、悲哀も、悦楽も、憤怒も、喜愛も、歓嬉も、苦痛も、慟哭も、羨望も、自嘲も、嫌悪も、好奇も、諦観も――――何も写ってはいないように見えた。

ーユウside ー

「それでアレ（闇の書の闇）をどうにかする方法は？」

「そんな焦るなって。クロノ執務官頼んでいた件は？」

「はい。貴方の言われていた通りグレアム提督から闇の書を封印す

るためのデバイス、『氷結の杖デュランダル』を譲り受けました」

「やはりな。完成した闇の書は魔力を蒐集する必要が無いから自らは動かないっつう闇の書唯一の弱点をついて破壊・または封印すると思ってたがやっぱり封印する方だったか」

ユウはアリスから闇の書の情報を聞いた時からグレアムが行う作戦が読めていた。そして相馬の時とは別にクロノに通信を入れていたのだ「グレアムは闇の書を永久封印する筈だ」と。

「さて、エイミィ・リミエッタ執務官補佐殿。闇の書の防衛プログラムの解析結果は？」

「は、はい！　あれは単純なバリアでは有りません！　４層構造の複合バリアです！」

ちなみに、何気にこれがユウとエイミィの初会話だったりする

「４層と言うと？」

「はい。まず第１層目から魔法遮断バリア、物理無効バリア、高エネルギー粒子対流バリア、そして最後の第四層目は超高温のエネルギー膜によるバリアです！」

「成る程ね。そうなると戦力が心許ないな……仕方ない。まだ使うつもりは無かったが」

そう呟くと一冊の魔道書を取り出した。その魔道書は表紙が真っ黒で何も書かれていなかった。そして

その魔道書を左手で持つと

「相馬。約束の物」

と言って右手を差し出した。それに対し相馬は

「分かった。けどなんに使うんだ？」

と愚痴りつつ一つのカードリッジを取り出す

「あー。それ私があげたカートリッジ！！」

それは相馬が闇の……いや、リィンフォースとの戦いの前に相馬がカートリッジが一発欲しいと言われたのであげた物だった

「戦力の増強だ。見てな」

そう言い右ポケットからもう二つのカートリッジを取り出すと三つの弾丸を開いた魔道書の上に落とした。すると、まるで生きているかのように弾丸を食らうように取り込むと勝手に閉じてしまった。そして魔道書を今度は右手に持ち変えると右ポケットから小瓶を取り出して魔道書に一滴垂らした。

それが魔道書に当たった瞬間光り輝き、その姿を変えていった。真っ黒だった表紙は濃い紫色へと変化し、その上には赤黒い色でベルカ式の魔法陣が描かれていた。

そして

「起動せよ“曇天の書”」

と声高らかに魔道書を起動させた。するとユウの足元から紫色のベルカ式魔法陣が現れ、曇天の書から三人の騎士が現れた

「我等曇天の書を守護する存在」

「主の命とあらば」

「どんな願いも叶えよう」

「私の名は星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）」

「僕の名前は雷刃の襲撃者（レヴィ・ザ・スラッシャー）だよ」

「我の名は闇統べる王（ロード・ディアーチェ）だ」

「「「何なりと命令をマイマスター」」」

その姿は

「ふ、ふぇーーーー！！！！私がもう一人！！！」

「わ、私も居る」

「私もおるわ。なんか高飛車っぽいんやけど」

そう現れた曇天の書の守護騎士はなのはとフェイト、はやてに姿が瓜二つだった。違いとしてなのはに似たシュテルは髪を結んでおらず、フェイトに似たレヴィは髪の毛が青く、はやてに似たロードは帽子をしておらず髪も銀色で背中の羽は４つといったものだが、それを除けば同じ顔をしていた

「どういう事ですか!?なぜ彼女たちの姿が」

「さっきのカートリッジか」

「正解。この曇天の書は喰らった魔力を持つ人間を元に造られる。そして一人になると喰らった魔力の内一番高かった魔力を使うことが出来るらしいんだけど」

「何か問題でもあるのか?」

「問題って程ではないけど、一人だと高い魔力で活動出来るんだが、三人だと魔力量も三分の一になるんだよ」

そんなに上手くいかないらしい

『暴走開始まで、後二分!』

「最後に確認するぞ。ホントに良いんだなはやて?」

「これは最後の闇の書の主だった私が背負わなアカン罪や。後悔はしとらん」

「そうか。なら、命令だ。主の指示に従い闇の書の防衛プログラムを破壊せよ！」

「「「Ｙｅｓ，Ｍｙ　ｌｏｒｄ．　！！！」」」

すると闇の書の防衛プログラムが現れた。……うん。あれは完全にキメラといっても差し支えないんだが、頭の部分にある人みたいなのがすげーミスマッチだな。残念

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

まずユーノとアルフが周りの触手を縛り

「縛れ！鋼の軛！でぇぇぇぇやぁぁぁっ！！」

ザフィーラが切り裂いていく

「第一波はヴィータそれと高町なのは！」

「おし！ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

そう言うとヴィータとなのはが前に出る

「おう！鉄槌の騎士ヴィータと黒鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

≪ギガントフォルム≫

グラーフアイゼンの槌の部分が分解し、そこに紅い光が集まって先程よりも大きい槌が付加される

「轟天爆砕！」

さらにヴィータがグラーフアイゼンを振りかぶると、何十倍もの大きさに巨大化した

「ギガントシュラーク！！」

そのまま振り下ろし、バリアを粉々に粉砕した。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン、行きます！」

≪ロードカードリッジ≫

カートリッジを四発ロードすると、レイジングハートから出ている光の翼が少し大きくなった

「エクセリオン、バスター！！」

レイジングハートから衝撃波が放たれ、なのはに向かってきた触手をなぎ払う。

そして、四つの砲撃が放たれてバリアの一点を囲んだ。

≪ブレイクシュート≫

「ブレイク・シュート！！！」

さらにピンク色の砲撃が放たれ二層目のバリアも破壊された

「次、シグナムにフェイト、それとレヴィ」

「うん！」

「ああ」

「僕の番だね！」

まずシグナムが前に出た

「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣、レヴァンティン！　刃と連結刃に続く、もう一つの姿…！」

カードリッジと一発ロードし、鞘を柄尻に合わせるとレヴァンティンが姿を変える

≪ボーケンフォルム≫

「翔けよ！隼」

≪シュツルムファルケン≫

レヴァンティンから矢が放たれ、直撃すると爆炎とともに三層目のバリアも破壊された

「フェイト・テスタロッサ。バルデッシュ・ザンバー。行きますッ！！」

≪ロード・カードリッジ≫

バルディッシュがカートリッジを三発ロードすると足元から金色の魔法陣が現れる

「曇天の書　力の守護者雷神（レヴィ・ザ・スラッシャー）の襲撃者と僕の相棒バルニフィカス。行くよ！！」

「「「同調（シンクロ）モード・パワー」」」

二人が消えレヴィに魔力が集まると、フェイトのようにカートリッジを三発ロードすると水色の魔法陣が現れ、さらにフェイトとレヴィが体験を一回転させ衝撃波を放ち、触手を薙ぎ払う

「撃ち抜け！雷神！！」

≪ジェットザンバー≫

「雷刃滅殺！極光斬！！」

二人の刃がバリアを貫き防衛プログラムにまで届いた。しかし防衛プログラムも反撃とばかりに砲撃を撃とうとする

「ザフィーラ！！」

「応！楯の守護獣ザフィーラ！砲撃なんぞ撃たせん！！」

ベルカ式の白い魔方陣を浮かべ、砲撃の魔力を集めていた砲台に鋼の軛を突き刺し、砲台ごと切り裂いた

「はやて、ロード」

「同調（シンクロ）モード・キング」

はやてが夜天の魔導書をロードが曇天の書を開き杖を構える

「彼方より来たれ。ヤドリギの枝　銀月の槍となりて撃ち貫け！」

「何処から来たれ。色彩の剣　白金の檻となりて封殺せよ！」

はやてとロードの足元に魔法陣が展開される。

「石化の槍！ミストルティン！！」

「絶対の檻！ジョワユーズ！！」

空中に白と紫の魔法陣が現れ、そこからまず紫の剣が降り注ぎ紫の檻となる。その間から白く光る槍が突き刺さると、刺さった場所から石化していく。
そして重力に耐え切れず崩れていくが、直ぐに再生を始めてしまう

「うわっ！」

「なんか…すごい事に…」

『やっぱり、並の攻撃じゃ通じない！ダメージを入れたそばから再生されちゃう！』

「だが攻撃は通ってる事も事実。作戦は継続だ執務官」

「はい！行くぞ、デュランダル！」

≪オーケーボス≫

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ」

海面と一緒に防衛プログラムを凍らせていく

「凍てつけ！！」

≪エターナルコフィン≫

そして完全に凍りついた

「ラスト、五人同時攻撃だ」

「「「「「うん！（おう）（はい）」」」」」

「「「同調（シンクロ）モード・リーズン」」」

なのはの周りから魔力の粒子がレイジングハートの先に集まっていく。

「全力全開！スターライト！」

フェイトの周りからは雷荒れ狂い、金色の魔力刃に降り注ぐ。

「雷光一閃！プラズマザンバー！」

はやての杖の先端が輝き黒い魔力が集まる。

「ごめんな、おやすみな。響け！終焉の鐘…ラグナロク！」

相馬の後ろの空間から取り出した剣が唸りをあげて魔力を高めていく

「天地乖離す（エヌマ・）！」

シュテルのデバイス、ルシフェリオンの先端に朱色の魔力が集っていく

「集え明星。全てを灼き消す焔となれ！ルシフェリオン！」

「「「「ブレイカーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」」」」

「開闢の星（エリッシュ）！！！！！！」

なのはたちのフォースブレイカーに相馬の一天地乖離す開闢の星≪エヌマ・エリッシュによって大爆発を起こし防衛プログラムはその殆どが消し飛んでしまった

「シャマル、コアは？」

「見つけました」

「なら俺の前に転送してくれ」

「はい。体内コア、転送」

シャマルの旅の鏡で俺の目の前に体内コアが転送された

「さて、ここからは俺の独壇場だジェラス一番及び二番を完全開放」

≪了解。一番と二番の扉をを完全開放≫

「滅すは“闇の書”干渉するは“歴史”」

その言葉と共に負の感情と呼べる全てが襲ってきた

殺意も、破壊も、攻撃も、心配も、不安も、悲しみも、悲観も、怒りも、孤独も、寂しさも、苛立ちも、恨みも、不信感も、疑心感も、否定も、僻みも、いじけも、落ち込みも、胸酔も、憎しみも、嫉妬も、自惚れも全てが。

その全てを受けたユウは

「・・・・・くふふふふ、あはははははっっっ！！！　あはははははははははははは！！！」

笑っていた。それも一般人がする笑いではない。壊れて狂った笑いだ

あはははははははははっっっ！！！ふぅ」

そんな笑いが終わると真面目な顔になって

「この程度で俺の精神が壊れると思うなよ。それでも壊したいって言うならこの百倍用意してきやがれ！！ジェラス三番も完全開放だ」

≪三番の扉完全開放≫

するとユウの瞳が濃い深紅へと変化し、その変化と同時に闇の書のコアが完全に消滅した

「コアの消滅完了。これで全部終わりだ、三人もお疲れ」

「いえ」

「やっぱり僕ってさいきょー」

「ふん。当然だ」

「そんな訳で悪いがザフィーラ、ちょっと肩貸してくれないか？正直疲れた。はやても疲労で気絶したみたいだしついでに頼む」

その近くではやてが急に倒れた為シャマルがアタフタしていた。って言うかお前が慌ててどうする

「では執務官の乗っていた船の医務室まで運ぼう」

「ああ、頼む。ユニゾン・アウト」

アギトとユニゾン・アウトしてそのまま睡魔と言う闇に落ちていった

闇の書の終焉（後書き）

無事に闇の書を消滅させることに成功したなのは達。

そこで語られるはやての背負う罪とは

次回

魔法少女リリカルなのは　黒衣の死神

『たった一つの冴えたやり方』

たった一つの冴えたやり方（前書き）

これにてA’s編は終了。空白期をちょびっとやってこの小説は完結です

たった一つの冴えたやり方

－ユウｓｉｄｅ－

「……なあプレシアよ」

アースラの訓練場では砲撃や誘導弾が飛び交っている

「何かしらユウ？」

その外では結界魔導師が必死になりながら結界を制御している。あっ、一人倒れた

「何でこんなことになったんだっけ？」

相馬やアギトも泣きそうになりながら結界維持に借り出された。って砲撃が貫通したな、今

「さぁ？」

元凶のハラオウン提督はいち早く安全な場所に避難していたのをリミエッタ執務官補佐が見つけ、結界維持をやらせ、真っ先にダウンした。

ああ、全く。世界は、いつだってこんなはずじゃないことばっかりだ

さて、こんなカオスな事になった切掛けは、俺が目覚めた辺りの時だ

「おはよう、そしてお休「む前に説明してくれないか？」ッチ」

当然の反応だよな。だから別に二度寝が出来なくて悔しい訳じゃないんだからな

「疑問って？」

「闇の書のデータ等が綺麗サッパリ消えてる事についてだ！！」

そう。実際に見てはいないが闇の書の事、無限書庫にも、果てはその事件すらも無かった様に消えているのだろう

「それは俺が闇の書を消滅させたからだ」

「それは見てたから分かってる。俺が言いたいのは「勘違いするなよ」何をだ？」

「俺が消滅させたのは闇の書だけではなく、その存在その物を消滅させたんだ。だから存在していない物を探しても見つかるわけないだろ」

俺の言った真実に八神家とテスタロッサ家以外の人間は唖然として開いた口が塞がらなかった。

まあそうだろう。何故なら暴走した主が大量の犠牲を出してきた第一級指定ロストロギア『闇の書』が歴史から無かったことにしたと言ったのだから

「最初は闇の書の体内コアを露出した後、アルカンシェルを宇宙空間で使う作戦だった。だがこの作戦には一つ問題あった」

「問題？それは一体何なのですかユウ特別捜査官」

執務官も疑問に思ったのだろう。この作戦はさっきの戦いと同じように見えるが、俺の力よりもアルカンシェルを使う方が安全であり、万が一失敗した場合にも地上ではない為、この作戦の方が危険も少ない。

だが

「それは闇の書本来のバグが原因。管制人格、リィンフォースだったか。こいつが残っている限り、遠からず防衛プログラムが再生して暴走する。そして元の復元機能が既に存在しない為、暴走しない状態には戻せないことからこの作戦は却下した。流石の俺もはやての新しい家族を消したくはないからな」

「だからユウ兄にお願いしたんや。守護騎士達も、ましてやリインフォースも居なくならなくても良い方法を」

「それがユウの力『消滅の闇』の能力を使う方法だったというわけ」

はやての説明にプレシアが続く。だけどこの方法にもデメリットはある

「このやり方は闇の書の歴史が無くなるだけだから、闇の書の犠牲者は生き返らない。だから他の死因になる。例えばクロノ執務官の父、クライド・ハラオウンは闇の書が無い為、エスティアの暴走事故って事になってる筈だ。そうだろハラオウン提督？」

「ええ。確かにクライドさんの死因は公式発表でエスティアの燃料庫の爆発とあったわ」

そう。この方法のデメリットとは闇の書の事を覚えているのがここに居るはやて達以外いないということにある

「き、君はその事がどんなに辛いか理解しているのか！！」

執務官がはやてに言い寄る。はやて以外覚えていないと言う事は、はやてだけが自分のしでかしたことを覚えている。そんなことを気にしない性格なら良かったが、残念ながら自分より他人の心配をしてしまう優しい子だ。だから守護騎士も主の事を信頼しているのだ。そんなはやての良心の呵責に苛まれたまま、生きていくしかない

「分っとるよクロノ君。でも最後の闇の書の主として、罪だけは忘れたくなかったんや。それに管理局に入っても元闇の書の主って目で見られんからな」

最後は茶化すような口調で言ったがそんなことは考えてはいないだろう。なのは嬢たちも執務官の言葉で心配するような目ではやての事を見つめていた。するとユウの持つ『曇天の書』の守護騎士が入って来た

「ユウー、ここ物凄く広いよー」

「こらレヴィ。主をユウと呼び捨てにするとは何事か。我の品格が疑われる」

「ロードも呼び捨てにしてますけどね。すみません主、会議の途中

でしたか？」

「いや、今終わったところだ」

「改めて見ると本当になのは達に似てるな」

相馬のセリフでここに居る全員の視線が三人に集まった

「そうだわ。ここに居る全員で模擬戦してみない？」

ハラオウン提督の発言でおかしな空気になってきた。
シグナムやフェイトがバトルマニアなのは知っているが、誰かこの提案を疑問に思え

「我が前にひれ伏してやる塵芥ども」

「僕がさいきょーだもんね。ロードたちには負けないよ」

ああ。やっぱりこの二人もか。せめてシュテルはこの馬鹿げた提案に反対して

「ふふふ。競いましょう。どちらが強いのかを」

うん分かってた。こうなることはなんとなく分かってたさ。

そして

「えー、と言う訳で、全員の親睦を深めるために、ベルカ式騎士対ミッド式魔導師、７対７の集団戦を始めるぞ」

なぜか俺が審判に借り出された。はぁ

「ルールは戦闘訓練準拠で、攻撃の非殺傷設定、さらに武器持ちの奴は相手のバリアジャケットを抜かないよう設定しておけ。あとシュテルとレヴィの二人はシンクロ禁止な」

「ええー」

「分かりました主」

後で調べたら二人でもシンクロ（一人になってその分の魔力を残った守護騎士に与える事）が出来たようだ。レヴィも戦闘中に使う気だったようで不満そうにブーブー言っているのをシュテルが宥めている。お疲れシュテル。だが俺が言わなきゃお前も使う気だったろ。あの時一瞬お前のポーカーフェイスが崩れたのを見てないとでも思ったか

「そんでリーダーはミッドチームは執務官、ベルカチームははやてだ」

「なぜだ主よ。なぜ我ではなくこの子烏がリーダーなのだ」

「だってお前守護騎士の能力とか知ってるか？集団戦の知識は？」

「うっ。し、仕方ない。今回は子烏にリーダーの座は譲ってやろう」

作戦会議中

ベルカチーム

「ヴィータとザフィーラが前衛、シグナムとリィンフォースは遊撃な」

「「「はい（おうっ）」」」

「シャマルは私とロードちゃんの後ろや」

「はいっ」

「待て子烏。ロードちゃんとはなんだロードちゃんとは」

「マッチアップは入れ替え早めで、主砲４人の大きいのとクロノ君のバインドのチャージタイムを取らせたらあかんで！」

「我を無視するな！！！」

ミッドチーム

「クロスレンジは引きつける程度であまり付き合うな。フォワード組ははやてとシャマルの捕獲か撃墜を最優先。なのはとシュテルは（こっちは事前に許可済み）ユーノを上手く壁にして火砲支援を頼む」

「「うん！（はい）」」

「んー、つまりどういう事？」

「はぁ。レヴィは黙っていてください。後で説明します」

「全員用意は良いか？」

「行くぞ。管理局指揮官3名と守護騎士2名に使い魔2名！高度な連携戦を教えに行くぞ！「！」

「「「おーっ！！！」」」

「ちょっ、だから僕は使い魔じゃないって！！」

「よっしゃ！魔導師の皆に騎士の戦闘を見せたろ！」

「「「おうッ（はいっ）」」」

「だから無視するなと言っておるのが聞こえんのか子烏共！！！！！」

「試合開始ー」

そんな模擬戦が終わって夜の八神家。

あっ、模擬戦の結果？なのは嬢とフェイトの空間攻撃にレヴィとシュテルの大技、はやてとリィンフォースとロードの広域攻撃がぶつかって訓練室が犠牲になり終了だ

「それにしても月が綺麗な夜だ。そうは思わないかはやて、リィンフォース」

「そやなぁ。改めてありがとなユウ兄」

「気にするな。言い方は悪いがリィンフォースが俺の物になるんだ。対価として夜天の書の修復をしたに過ぎないさ」

「それでもや。リインフォースもユニゾンシステムを失うだけですんだから良かったわ」

「何だ気付いていたのか」

「直接リインフォースから聞いたってのもあるんやけど、模擬戦でユニゾンする様子がなかったからな」

そしてはやてには皆には話さなかった全てを話した

闇の書がはやてを選んだのは高い魔力を保有していたからということ、本来この事件を解決する事がどれだけ難しく、今回がどれだけ偶然と奇跡によって成功までいったのかを、そして、完全解放を行なった俺の代償がどの様なものか等を

「私のせいでって謝ったらあかんのやろな。だから私は謝らへんよ」

「そうか。なら俺は帰るぞ。足が治るなら俺はもう必要ないだろう

からな」

「だから私をこんな時間に呼んだんか」

良い忘れていたが今の時間は3時10分である

「ならリインフォース。最後かもしれんから別れくらい言っておけよ」

「はい。主はやて、いえ夜天の王はやて」

リインフォースがはやてのことを主から夜天の王と言い換えた。そこには闇の書時代の諦めの台詞ではなく、新たな旅立ちの別れの様だった

「貴女がくれた祝福の風の名前を胸に私はユウといきます」

「うん。またやリインフォース、皆も」

「ええ。とても有意義な時間でした」

「次は僕が勝つんだからね」

「我を無視するなぁ（泣）」

まだ気にしてたのかロード

「もう行くぞ」

そして八神家から転移したのはミッドから少し外れの建物

「あ、ユウさん。お帰りなさい！！！！」

「ああ、俺が留守の間なにか変わりないか？」

「いえ。何も変わりないっす」

「そうか。なら引き続き治安維持と下の奴の武器訓練だ」

「了解っすユウさん」

ここは赤崎組と呼ばれるチンピラの寄せ集めの様な場所。
そして俺がこの赤崎組の二代目をやっている

「すみませんユウさん。ちょっと問題が」

コイツの名前はゼル・スクルド。俺が二代目になった頃から俺の下に居る古株だ

「下の奴等が指示を聞かなくて」

「ハァ。しゃーない。全員を集めろ、今すぐだ！」

「うっす！！」

ザワザワザワ

「良く集まってくれた。俺がこの赤崎組の二代目ユウ・クロサキだ」

すると最近入ってきたのか見たことのない奴等が騒ぎだした

「うるせぇ！！！！！」

その声で騒いでいた奴等は一斉に静かになる

「良いか。ここは魔導師になれなかった人間の集まりだ」

「だからこそ、ここでのルールを教えてやる」

「弱い奴等は指示に従え。従いたくないなら強さを示せ。それが嫌なら俺を越えてみろ！！それがルールだ」

たった一つの冴えたやり方（後書き）

そんな訳で最初ははやての伏線回収。最後はミッドのアジトでの会話になります。
そこの強さが絶対だってとこを書きたかったんだけど、上手く伝わったでしょうか？

それでは次回に続く

吸血鬼の王（前書き）

タイトルの通り今回はユウの秘密に迫る話です。

そう言えばこのサイトで話題になりましたが、この小説は酷いアンチなどはありません！！

そんな描写を見つけたら教えてください。出来る限り直しますので

吸血鬼の王

ーユウｓｉｄｅー

『うぉーーー！！！！！！！流石だぜユウの兄貴！！』

『当たり前だろ。何てったって俺らの兄貴なんだからな！！！』

『一生着いていきますぜ兄貴！！！』

『ミッドに生まれて良かった～～！！！！』

俺の演説が終わった途端一斉に騒ぎだす部下達（馬鹿共）。っつうか俺はお前らと兄弟になったつもりはねぇ！！

最初は俺を支持させて反乱分子を抑制させる目的だったのに、コイツら絶対理由を忘れているだろ。全く、本当にコイツらの記憶は鶏以下な癖に手段だけは律儀に達成するから、まぁ手段すら出来ないよりはマシだが

「後の事はお前に任せる。対処出来ない問題はアリスに聞けよ」

「うおっす！お疲れさんです兄貴！！」

『『『『お疲れ様です兄貴！！！！』』』』

だから俺はお前らの兄貴じゃねぇっての

ジェイル・スカリエッティ　アジト

赤崎組の転送装置からまずアルハザードへと転移し、その後ジェイルのアジトに転移した。

「ようジェイル、ここはただいまとでも言えば良いのか？」

「なら私はお帰りと言おうかユウ」

会って早々皮肉を言い合う俺とジェイル。コイツとはオリジナルの時から変わらず、一般的に悪友と位置付けられる関係にある。
それをウーノともう一人の戦闘機人がオロオロしている

「ん、また一人増えたのか？」

「はいユウ様！私はトーレと言います」

「トーレ？ならドゥーエ（二番目）は？」

俺は疑問に思ったことをジェイルに聞いた。
ウーノとはイタリア語で数字の1と言い、続いてドゥーエ(Due)トレクワ(Tre Qu)attro チンクエ(Cinque)セーイ(Sein)セッテ(Sette)オット(Otto)ノーヴェ(Nove)ディエーチ(Dieci)ウンディチ(Wendi)ドーディチ(Deedl)と続く。だから必然的にウーノの次はドゥーエだと思っていたんだが

「ドゥーエなら別任務で最高評議会の下に居るよ。ドゥーエのISはスパイ活動には最適だからね」
「なーる。ならもう一つ良いか？」

そう言ってトーレを指差し

「お前はトーレに俺の事をなんて言って説明したんだ！？」

そう叫んだ。俺がここに着いた時から俺を尊敬の眼差しで見続けていた。これはあれだ。野球少年がメジャー選手に向ける眼差しや、ファンがアイドルに向ける眼差しとソックリだ。いや、最後のは違うか……そんな訳でトーレは尊敬と憧れの眼差しでずっと俺を見ていた

「なんてって、君の戦いを撮った映像資料を見せただけだけど。ちなみに、トーレは同じ双剣使いとして、ドゥーエは人を殺す時の躊躇の無さで尊敬してるみたいだよ」
「はいっ！！私とドゥーエ姉様がユウ様の映像を見てから世界が変わったかの様な衝撃を受けました。あの無駄という無駄を取り除いた剣筋！「（ただ才能がないだけだけどな）」相手の死角を常に移動出来る経験値！「（ネタが分かったら通用しないけどね）」そして敵を殺す事に全く躊躇しないメンタルの高さ！「（これについては、俺がそういうものだから否定はしないけどさ）」ドゥーエ姉様

も私もこの映像は最低1日一回は見て、今では夢に出るほどになっています」

「あ、あっそう」

余談だが、俺が来たと後で知ったドゥーエが、今までの休暇を使いアジトに戻って来たのは別の話だ

「そんなにユウを尊敬してるなら模擬戦でもしてやったらどうだ？」

アギト、余計なことを。

アギトの言葉で緊張が最高潮になり、体の機械から湯気が出て来た

「しゃーないな。めんどくさいけど一つやって、ぐっ」

やるかと言う台詞を言う途中で言葉を詰まらせ、息が荒くなる

「ユウ様？どうかなさいましたか？」

トーレが心配そうな目で聞いてきたので、ある程度息を整え

「いや大丈夫だ。ちょっと疲れが出ただけだ。スマンが模擬戦はまた今度にしてくれ」

「気にしないで下さい。任務を終えたばかりなのに無理を言った私が悪いんですから」

もう一度、今度はジェスチャーで謝るとジェイルに肩を借りウーノと共に別室に移動した

ーウーノs.i.d.eー

急に調子が悪くなったユウ様を別室に運んだドクターはユウ様のデバイス『ジェラス』と話し始めてしまいました。それにしても、私は必要なのでしょうか?

「全く、疲れなんて君から出る筈がないだろう?それで、何番まで外したんだい?」

《一から三番まで完全に外しました》

「(????外す?疲れが出ない?)」

私が疑問に思っていると、その顔を見たドクターが説明してくださいました

「簡単に説明するとユウ・クロサキには超速再生、いや、光速再生と呼ばれる能力があり、どんな攻撃も彼に当たった時にはもう回復されているんだ」

「なっ!!!?」

私が驚いたのも無理はない。その話が本当ならユウ様にはアルカンシェルですら通用しないことになる

「当然そんなデタラメな能力には代償がある」

「そ、その代償とは？」

「……血液だよ。彼、ユウ・クロサキはその再生能力を使う度にそれに合う量の血液を消費する」

「なら先程の何番を外すと言うのは？」

「その力を封印している枷の事さ。私も詳しくは知らないが、元々ユウは私が発案したプロジェクトFの原型になった計画、プロジェクトJ（ジョーカー）の成功体だったらしい。その後色々あったらしいが残念な事にその時にはもうオリジナルの私は死んでいたから何があったのかは本人とデバイスのみぞ知るといったところかな」

「その説明で大体あってるぞ」

《やっと意識がハッキリしてきたんですねマスター》

「ああ、てなわけでその辺りの事は聞かないでほしい」

「分かりましたユウ様。妹たちにも私から釘を刺しておきます」

最初にその話をふったのは私ですけどね。

ユウ様は私の言葉を聞いた後、先程の様に胸を押さえ苦しみだしました

「始まったか。ウーノ、彼の周りに結界を。万が一でも私の研究所が壊されたら堪らないからね」

ドクターの命で結界をユウ様の周りに張ると、ユウ様の体が変わっていった

「これが枷を外した結果だよウーノ」

私はドクターの声も聞かずその変化を見続けていた。

金髪の髪は少し黒みが足されたダークゴールドに、宝石の様な色をした翡翠の瞳は深紅の光を放ち、口からは犬歯が伸びていた。その姿は昔資料で呼んだ姿にソックリだった

「気が付いたようだから説明しよう。彼こそは吸血鬼の王　真祖。人間という枠組みから外れ、人外の存在になった真の姿だよ」

吸血鬼の王（後書き）

次回は相馬視点の話になります。

ちなみに、今回出て来た真祖はムーンクイーンの真祖や、薬味に出てくるキティの真祖とは完全に別物となっています

高町家の二男（前書き）

今回は高町家のオリジナルになります。納得できない、不満だなどありましたら感想として教えてください。べ、別に感想を集める為じゃないんだからね。勘違いしないでよね

ーユウｓｉｄｅー

「ＩＳ発動『ライドインパルス』！！」

本日三回目のＩＳが発動し、目にも止まらぬスピードがユウへと襲う。しかし

「攻撃がワンパターン過ぎる」

そう言うと、トーレの振りかぶったエネルギー翼『インパルスブレード』を紙一重で躱し、通り過ぎる前に足を出しバランスを崩し倒れたトーレに

「これ以上やる？」

そう問い詰めた。勿論この状態では何もできない為、後は降参するしない。その後悪かったところを指摘した

「トーレはそのＩＳに頼り過ぎて攻撃が読まれやすくなってる。現に俺にも三回で読まれたからな。それとＩＳのスピードを一定にしないで少し速度を変えたら読まれずらくなる。今度試してみろ」

「ぜー、ぜー・・・あ・・・あり・・・・はー・・・はー」

うん、完全にやり過ぎたね。「ありがとうございました」って言いたいんだろうけど全く言えてない

「ウーノ、俺はシャワー室に居るから後でもう一回トーレに俺が言ったことを伝えてくれ」

そう言ってシャワー室へ向かった

シャワー室

「あ・・・ぐ・・あ・・・ぐ・・がはっ！うっ・・・げほっげほっ」

シャワーを倒れる様に座り込みながら浴びている中、床には先程吐き出したであろう大量の血痕が流れていく

「く、これは調整に時間がかかるか」

ユウ・クロサキはあの後、自分の調子を確かめる為にトーレと模擬戦、とは名ばかりの戦闘訓練をしたのだが

「まさか闇との同調がここまでデリケートな物だとは」

今の彼は五感の全てが無くなっていた。それに気付いた時に、何故か闇の力が変わった気がした。そこで闇に意識を傾けてみた瞬間、意識が闇と同調し、闇と五感をリンクするようになった。

しかし、闇と五感リンクするととてつもない情報が頭に押し寄せ、パンクしそうになった為、必要ない情報をカット出来るようになるまで何回か脳がパンクした。パンクして回復してを繰り返しながらようやく普通に動ける様になるまで三十分位かかったらしい。そして今度は戦闘中の情報カットの練習の為にトーレに模擬戦を頼み、

今に至ると言うわけだ。しかし、闇と五感リンクすると死角が無くなり戦いやすくなる変わりに情報量の多さはずば抜けて高い

「われながら情けない。情報量の多さで血を吐くなんて夢にも思ってなかったぜ」

そう自分に皮肉を言うと五感のリンクを解除した

ー相馬ｓｉｄｅー

その頃、夜遅くのリビングでは三人の男達が集まっていた

「それで相馬、俺と父さんをこんな夜中に呼び出して何の話だ？」

「今日話した魔法に関する事です」

俺がそう言うと二人の顔も真剣になった。

あの模擬戦が終わった次の日に俺達はアリサやすずかと高町家の皆に魔法の事を全て話した。そしてそれがテレビで見るファンタジーな物ではなく一歩間違えれば命に関わる危険な力だと、そしてテレ

ビのファンタジーの様に沢山の人を救う事が出来る力だと。
最初は皆が反対した。当然だ。自分の娘が死ぬかもしれない仕事に着くと言われて許可する親は殆ど居ないだろう。
だがなのはの必死の説得で、中学の義務教育を終わらせる事を条件になのはの管理局入りを許可してもらったのだ

「なのはの事なら私はもう何も言わないよ」

「いえ、その事じゃなく、俺が二人にお願いが合って呼んだんです」

「お願い？悪いが魔法関連なら手伝えないぞ。俺と父さんには魔法を使うリンカーコア？だっけ、それが無いらしいからな」

実は高町家でなのはの説得に成功した後、私たちもなのはの役に立てないか？と二人が聞いたのだがプレシアさんの話では二人にリンカーコアは無く、唯一見つかった桃子さんもEランク以下だったそうだ

「魔法関連ではなくてですね、俺に剣を教えてほしいんです」

「剣？稽古を付けて欲しいってことか？」

「ええ。俺の魔法は主に剣を使うので」

俺が使う投影は剣に宿る経験も憑依させて戦うことが出来る。しかし所詮は経験だけで、ユウとの戦いでも中途半端にしか戦うことが出来なかった

「何故だ？管理局には若手を育成する場所もあるらしいからそこで学べば言いじゃないか」

確かに恭也さんの言う通りだ。でも

「それじゃ駄目なんです！！」

その叫びを聞いた士郎さんがここで始めて口を開く

「なんでそんなに力が必要なのかな？出来れば理由を聞かせほしい」

口調は丁寧だがその威圧感は凄まじく、嘘を言える状況じゃなくなった

「……お話しします。俺の全てを」

そして全てを話した。俺がこの世界の人間じゃなく、一度死んだ人間だと言うこと。一度目の時の出来事に俺の決意。

普通の人が聞けば精神科の病院に連れていかれる程馬鹿げた話を二人とも黙って聞いてくれた。そして全て言い終わると士郎さんの口が開く

「分かった。なら私も話そうか。なぜ君を家に住まわせたのかを」

確かに不思議だった。流石に桃子さんの言った理由が全てではないとは思ってはいたが

「昔、なのはには一人双子の息子が居たんだ」

その子の名前は“高町宗谷”。桃子に似た茶髪の髪に私に似た瞳をした子だったよ。

私が仕事で居ない時はなのはの良きお兄ちゃんとしてよく桃子の手伝いをしてくれる子だ。その子は、宗谷は昔から人の感情の変化に人一倍敏感な子でね、我が儘を宗谷からは聞いた事が無かった。良く言えば良くできた子、悪く言えば子供らしくない子だったんだ。

そしてある日、私が車の運転中事故に合ってね。長く意識が戻らなくて、桃子や恭也に美由希が付きっきりで居てくれた変わりに、なのはと宗谷を家に置いたまま誰も構ってやれなかったんだ。

幸いなのはは宗谷が居たから寂しい思いはしなかったんだけど宗谷はそうじゃなかった。

あの子は誰も構ってくれないのを自分の、いや、私が入院しているのも全て自分が悪いと思うようになってしまったんだ。

私が退院した後直ぐに剣を習いに来て、夜遅くまで剣を降り、なのはの相手や桃子の手伝いなどをこなす毎日。私が少し休みを取れと言っても隠れて剣を降っていたらしい。そんなある日事件は起きた。

私が監督をやっているサッカーチームの応援に、サプライズとして行こうとなのはが言ったらしい。それをあの子が断る筈も無く、二人だけで出掛けてしまった。そして来る途中の交差点で車が突っ込み、なのはを庇って宗谷がひかれてしまったんだ。即死だったらしい。その後なのはを精密検査したら、なのはは自分のせいだと。自分が宗谷をサッカーの応援に誘ったりしなければ、自分が宗谷を殺したんだと思っていてこのままだと精神が壊れてしまうと担当の医師に言われたんだ。当然どうやればなのはは治るのかって問い詰めたさ。だけど体の傷は直せても心の傷はどうしようもないって言わ

れてね。正直一度自殺を考えた時もあった位参っていたよ。なんせ一日で息子と娘が死ぬって言われたんだ。でも医者の予想とは裏腹になのははは僅か二日で目を覚ました。でもあの頃のなのはの姿は何処にも居なかった。宗谷のことは全て忘れて、まるで宗谷に成りきろうとしているかのように良い子を演じていた。医師の話では精神の崩壊を防ぐ為に脳が無意識にプロテクトを掛けたとのことだが、実際宗谷の話をすると頭を押さえ倒れてしまい、次の日には宗谷の事を忘れてしまっていた。だから私たちは残ったなのはの為に宗谷の話を家族内でタブーにして、なのはと過ごす時間を増やす為に翠屋を造ったんだ。

そしてなのはがフェレットのユーノ君を連れてきて夜遅くに出掛けるようになった時相馬君、君が現れた。君を人目見た瞬間は凄く驚いたよ。髪や瞳の色は違うけどそれ以外はあのまま大きくした宗谷の姿だったんだから

ー相馬ｓｉｄｅー

「それじゃあ、俺をその宗谷って子の変わりにする為に住まわせてくれたって訳ですか？」

「最初はね。でも性格や仕草などの違いに気付いた時に分かったんだ、この子は“剣崎相馬”なのであって“高町宗谷”ではないってことに」

「後もう一つ。その宗谷君の遺骨はどうしました？」

「神社の近くに墓地があってね。あの場所は宗谷の一番好きな場所だったからそこに埋めたよ」

ああ、納得した。転生した時からおかしいとは思っていたんだ。転生場所が神社だったり自分の幼い頃と違ってたり。でもこの話が本当ならゼウスさんは宗谷の死体から俺の魂を入れて生き返らせた憑依に近い形でここに転生させたんだ。だから最初の場所が高町宗谷を埋めた神社だったんだ、そして俺の子供時代と顔が違うのもそのせいって訳か

「さて、相馬君を住まわせる理由が分かった所で剣の稽古のことだけど」

あ、稽古のことすっかり忘れてた。でもあんなヘビーな話を聞いた後だから仕方ないと思う

「条件が二つある。その条件を相馬君が了承すれば永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術を君に教えよう」

「は、はいっ！！」

「一つ目はこの剣を人を守る為だけに使うこと」

「分かりました」

「二つ目は……」

「二つ目は……（ゴクン）」

士郎さんが言葉を貯めるので今更緊張してきた。二つ目の条件ってなんだろう、まさか私と恭也を相手に勝利しろって条件だったりして。それなんて死にゲー？そして士郎さんの口から二つ目の条件が出される

「二つ目は、私たちの家族になることだ」

「へっ！？」

変な声になったけどそれぐらい驚いてるって事だ。てっきり戦闘民族高町家と戦闘になると思ってたのに。拍子抜けしたな

「僕の流派は身内以外は教えられない門外不出の剣だから相馬君に教えるとしたら必然的にこうなっちゃうんだ。勿論嫌なら別に断っても構わないんだ」

そんなの、既に答えは決まってる

「はい！よろしくお願いします“父さん”“恭也兄さん”」

そして休日が終わると一番に役所へと行き、養子関連の書類にサインした。この瞬間から俺は高町家の次男として正式に決まった

高町家の二男（後書き）

今回は相馬が高町家に何の問題もなく受け入れられている理由が明かされる話になります。転生物ではこういう時、説明もなしに家族になっているイメージが有ったのでこの小説ではこんな風になりました。

ＰＳ．ユウの闇への五感リンクのくだりは、『風の聖痕』を参考にしていたのですが、分かったでしょうか？分かった方感想で教えてください。べ、別に感想が以下省略

秘密任務だよ○クロちゃん前編（前書き）

久しぶりです。今回からシリアスは終わります。シリアスはもうコリゴリ、

「安西先生、ギャグが、ギャグが書きたいです」

「そんな文才なかろう」

「神は死んだ」↑ｏｒｚ

（今回はあの人の役職が変わっていますが気にしないでどうぞ）

秘密任務だよ○クロちゃん前編

ーユウｓｉｄｅー

『ユウ・クロサキ特別捜査官。最高評議会からの特別任務を言い渡します』

「久しぶりの特別任務か。それで、抹殺許可は？」

「問題ありません。違法研究施設に居る研究員全ての抹殺許可、及び研究所の破壊許可が出ています」

「了解した。カラード三尉、その研究施設の詳細は？」

「詳しい詳細はクロサキ特別捜査官のデバイスに送りましたので後で確認しておいてください」

ちなみにここまで盗聴の危険を危惧して他人の振りで通信をしている

《話の詳細資料が届きましたよマスター》

「……資料が今届いた。後で確認させてもらう」

「それでは失礼しますユウ様」

「（最後にボロを出すとはまだまだだな）ああ、妹たちにもよろしく伝えるよドゥーエ」

とさりげなくフォローを入れて通信を切った。
その後憧れのユウから呼び捨てで呼ばれて、嬉しさの余り悶えていたのだが、省略する。

「管理局の脳みそたちから依頼かな？」

「まぁな。だが、抹殺許可が出るからまだマシの任務さ」

と話していると、扉が開き、レヴィと子供の様に小さな戦闘機人が入ってきた

「ドクターと主。こんなところに居たのですか」

「おお、シュテルと……誰だこの子は。迷子か？」

「私は戦闘機人『チンク』です。決して、迷子の子供ではありません」

「そ、そうか」チンクの言葉の必死さに正直引いたのはここだけの秘密だったりする

「それより二人とも私たちのどちらかに用があったんじゃないのかな」

「そうでした。主、それにドクター。スミマセンがクワットロが部屋から出てこないのですが、何か知りませんか？」

「それなら俺が知ってるぞ」

「ユウ殿が知っていましたか！それでクワットロに何があったのですか？」

「いやな、クワットロはジェイルと遺伝子が同じらしくてな。俺を解剖したいって言うんでな。少しばかりＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしただけだぞ」

「ここは私の娘に何をすると言う場面なのかな？」

「さぁ？しかし最近のクアットロは目に余るので自業自得なのでは？」

本人の知らないところでドンドン自分の評価が下がっていることに気付くのは何時になることやら

「そんなことよりシュテル、後でレヴィにロードと同調してから俺の所に来てくれるか？」

「管理局からの依頼ですか？」

「へぇ、それだけで気付いたか」

チンクはまだ分からないようだな。だが将来は今のシュテル位の才になる予定だから今の内にシュテルをチンクと行動させるかな……って話がずれたな

「説明してくれるかシュテル」

「了承しました主。私たちの中で能力が安定しているのはレヴィですが、レヴィは交渉には向かないですし、ロードはレヴィよりかはマシですが、スタイルが固定砲台ですのでレヴィの様な高速戦闘タイプの魔導師等に相性が悪いので、この中で一番交渉に向きかつ安定した戦いが出来る私を呼ばれると言うことは管理局しかないと言った理由です」

「成る程。短く纏めると？」

「バカと砲撃だけが取り柄の二人より私の方が有能だというこ……っは！？」

と喋っている途中で違和感に気が付いた。さっきの声は前からではなく後ろから来ていたということに。そしてゆっくりと後ろを振りかえると案の定笑いながら怒っているロードと、未だに意味が分からずチンクから説明して貰っているレヴィが居た

「影で我らをどう思っているかが良く分かったぞシュテルよ。礼を言おう」

「ロ、ロード。違うのです。落ち着いて怒りを静めてください。私たちは三人一緒の存在ではありませんか」

「シュテルよ。地球ではな、良い言い伝えがある。それはそれ、これはこれだ！！！！！」

「それは若干意味が違うと思うのですが」

「えーい聞く耳持たんわ。罰として今日は寝る前にホラー映画の刑だ」

「それだけは止めてくださいお願いします」

シュテルが綺麗なジャンピング土下座をしている内に説明すると、オリジナルの影響なのかは知らんがシュテルはホラーだけは駄目なんだ。どの位ダメかと言うと、ホラー映画のあらすじを聞いただけで泣き出すほどだ。スプラッタ映画は大丈夫なのに……謎だ。

と話している間に結局二人とも着いていくことに決まったようだ

第２８観察世界

「ここで担当の執務官と合流するのか」

「あれではないか主よ」

ロードが指を指す先には確かに執務官服を着た男が立っていた

「あんたがこの件担当のティーダ・ランスター執務官か？」

「ええ。間違いありませんユウ・クロサキ特別捜査官殿」

その声と共に三人の警戒心がうなぎ登りになる。
それを右手で抑えながら問いただした

「おかしいな。特別捜査官は本局でも知っている人間の方が少ない役職だ。執務官じゃ存在すら知り得るはずがないのだがな。説明してもらえるか」

「それは簡単です。貴方のことは管理局に入る前から知っていたのですから。第９７管理外世界で起きた事件も当然知っていますよ」

「なに!?と言うことはまさかお前」

「貴方の想像通りだと思いますよユウ様」

「まさかこんなところでしかも若い“ガンスリンガー”に会えるとはな。三人共警戒を解いて良いぞ」

俺の言葉で信用したのか警戒心を表したデバイスを下げた

「さて警戒を解いて頂いたところで今回の任務の話をしましょう」

そう言うと目の前の研究所が見える森に移動しながら説明した

「まず入口からユウ特別捜査官が入り警備を撹乱、その隙に私たちがこの研究所のロストロギアを確保。それが済んだら念話で連絡するので脱出してください。全員の脱出が完了したら全員で一斉に魔法を放ち破壊すると言った具合の作戦ですが、どうですか？」

「意義無し」

「問題ありません」

「大丈夫だよ」

「それで良かろう」

《その作戦が妥当でしょうね》

上からユウ、シュテル、レヴィ、ロード、ジェラスが了承する

「なら行ってくるわ」

そうユウが言っていつの間にかサードモードにしていたジェラスの銃口から大量の魔力弾が降り注ぐ。
そして研究所に走っていく時ユウが大声で叫ぶ

「あははははは、パーティーの始まりじゃーーーー。参加費はテメェらの命で今なら鉛玉もプレゼントしてやるわ～～～！！！！！」

「……さぁ我々も行こうか」

ティーダ以外何も言えずシュテルたちは、この任務が終わったら少しは休ませてあげようと心に決めたのだった

ーシュテルｓｉｄｅー

私たちは主が陽動（という名のストレス発散）をしている道とは逆の道を進んでいる

「今の内に説明しておくけど、今回回収するロストロギアは『レリック』簡単な魔力タンクの性質を持っているから下手な刺激で暴走する危険性がある。だから見つけ次第出来るだけ素早く封印するんだ」

成る程。それならばこの中では曇天の書を使用できるロードが適任でしょうね

「ロード「分かっている」なら良いのですが」

「ねーねー、ボクは？」

「レヴィ様はシュテル様と共にロード様の護衛をしていただきます」

「分かった！でも堅苦しいのは好きじゃないからそれはなし。それとボクの事はレヴィで良いよ」

「分かりました「敬語はなしだってば！！」……分かった。これで良いんだろレヴィ」

「私も質問に答えてくれればレヴィと同じで構いません。ロードも良いですよね？」

あの顔なら私と概ね同意見なのでしょう。あの、私は質問するだけなのですからそんな不満そうな顔をしないでくださいレヴィ

「と、とにかく私とロードからの質問は一つです。ティーダ執務官、さっき主が言っていた“ガンスリンガー”とは一体何なのですか？」

あの時は主が居たから聞けませんでしたが、主のあの驚き方は異常でした。何かあると考えてもなんらおかしくはないでしょう

「それはね……ちっ」

ティーダの言葉を書き消すかのように大量の質量兵器が壁から現れた

「君達はそこでプロテクションを張って見ていててくれ。今からその疑問に答えよう」

「おい貴様。その量は洒落にはならんぞ。死ぬ気か貴様」

「まだ死ぬつもりは無いさ。妹にも会えてないし、それに私が死んだら君たちを守れないだろ」

そう言いながらも全ての質量兵器が表れ、そして

放たれた

「ブリッツタイム・スタート」

その頃、ユウはと言うと

「おいジェラス、もう敵は居ないのか？」

《残念な事に今のので最後の様ですね》

「なんだ、全然物足りないぞ」と会話している周りは敵の返り血で真っ赤に染まり、地獄のような惨状になっていた。

と、そこに大きなモーター音と共に犬型のロボットが現れた

「フフフ、警備兵ヲ倒シタ位デイイ気ニナルナヨ侵入者ヨ。私ハコイツラノヨウニハイカヌゾ」

「へぇ、こいよ犬っころ。遊んでやるよ」

「イツマデソノ余裕が続クカ楽シミダナ」

ユウとロボットが対峙し、天井から落ちる血痕の音を合図に同時で
動いた

秘密任務だよ○クロちゃん前編（後書き）

後書きコーナー

赤黒
「はい何とティーダさんが執務官になっていました」

ユウ
「確か原作では執務官になる前に死んでたな」

赤黒
「元々ティーダさんは原作以上に強い設定なので、原作より強いのに執務官になれないのはおかしくねと考えた結果こうなりました」

ユウ
「次回はティーダの能力の説明にギャグメインの話らしいぞ。なるかどうかは別として」

赤黒
「それでは次回も」

赤黒&ユウ
「「ゆっくりしていってね（お楽しみに）」」

ユウ

「って、どんだけゆっくり実況ハマってるんだ。そのせいでこの小説の更新が遅れたんだぞ」

赤黒

「痛いから痛いから。殴らんといて～」

秘密任務だよ○クロちゃん（前書き）

や、やりました。ついにテストが終わりました！！！！！！～～～～ヽ（＾ｏ＾）ノ

今回はロードにフラグがたちます。たつと思います。たったと思ってくれればいいな

ーロードｓｉｄｅー

大量の質量兵器から身を守るようプロテクションを張っている目の前では、あり得ないと言える事が起こっている

「おいレヴィ。あれをお前主体で同調すれば出来るか？」

「流石にあれはボクでも無理だよ」

「だろうな。ならあれがあやつの能力と言うことか」

我らが驚くのも無理はない。奴は何かを呟いた後、あの銃弾の嵐の中を歩きながら回避している。

普通の者なら数を数える暇もなく蜂の巣になるが、奴は無傷どころか銃弾がかする気配すらしない。そして全ての銃弾を回避しながらも壁から出ている質量兵器を確実に破壊していく。その姿はまるで舞を踊っているかの様に鮮やかで素直に美しい言える。

だがああやって回避しながらも奴は辛そうな顔をして、その顔を見ていると……その、なんだ。胸が締め付けられるような、そんな感じがすると言うか

「ロード、どうやら今ので最後の様ですね。ってロード、どうしましたか？」

「ひやぁっ！ななな何だシュテルいきなり声を出すな。驚くではな

いか／／／／」

「？？？？良く分かりませんが了承しました」

全く、我としたことが少しぼーっとし過ぎたな。

「どうしたのロード？頬が赤くなってるよ」

「きききき気のせいだ！！これは・・・そう風邪気味なのだ。最近の風邪は性質が悪いからな、あっははははは」

「残念ですが私たちはプログラムですので風邪はひきませんよ」

「うるさいぞシュテル。そんな事より早くロストロギアを封印しに行くぞ」

「ちょっ、待ってくださいロード」

我はそう言い残して奴の、いや、ティーダの元へと向かった。

か、勘違いするなよ。別にティーダの事など何とも思ってないぞ！ただ少し、ほ～んの少しだけ気になっているだけだ。勘違いするなよ／／／／

－シュテルｓｉｄｅ－

一体ロードはどうしたのでしょうか？笑顔で歩いていながら途中でいきなり顔を真っ赤にしながら執務官の名前を口にして。さっきは

自分でああ言いましたが本当に風邪、と言うより私たちプログラムにかかるウイルスかも知れません。ここでどんな研究をしていたかは分かっていませんから油断は禁物でしょう

「ティーダ執務官、ここはどんな研究をしていた場所なのですか？」

「ああまだ説明していなかったね。ここはレリックの魔力を使った生体兵器の研究をしていたらしい。まだ実用には向かなくて動物に知性を持たせる程度だけど、厄介な事に変わりはないから気をつけて進もう。さっきの力は余り使いたくはないしね」

それなら恐らく大丈夫ですね。っとそうでした、あの力の説明を一応聞いておかないと、後でレヴィが困りそうですから

「それではあの回避能力の説明をしてもらえますか？」

「ああ、説明する前に敵が襲ってきたから説明できなかったんだったね。あれは僕たちガンスリンガーが持つ能力で、僕は『ブリッツタイム』と言う名前で呼んでいる」

「待ってください。先程僕“たち”と言いましたね。と言うことは貴方以外にもあのような力を使うガンスリンガーが存在するのですか！？」

「昔はもっと居たらしいけど今では戦場で血を流す事が減ったから余り多くはないね。でもまだ数十人単位で居ると思うよ」

「そんなに！！では、そのガンスリンガーの詳しい詳細を教えていただけますか？」

「ああ良いよ。まずガンスリンガーは別名『時の支配者』と呼ばれていて、僕のように時を遅くしたり消えたかの様に速く動けたりと様々だけど、全員が時に関係した能力を持っているんだ。その力の源は自分の血だ」

「自分の血とは一体？」

「ガンスリンガーは血を減らして力を使う。そしてその血に触れると資格者は新たなガンスリンガーとなる。だからガンスリンガー戦いを呼んでしまう。自分の意思とは関係なくね」

「だから管理局が使う非殺傷の魔法が増えた事でガンスリンガーの数が減ったのか」

「復活したんですねロード」

「復活？何を言っているんだシュテルは。それよりそのガンスリンガーと戦うことになった場合どう対処すればいい」

流石に抜け目がありませんねロードは。確かにこの話を聞いた今、他のガンスリンガーが敵として現れた時、今の私たちでは対処出来るとは思いませんから

「分かったよ。ガンスグリンガーはどんな能力を使っていても基本的に一対多を得意としている。だからガンスリンガーを相手にするときは一対一、多くても一体二で戦うことがガンスリンガーを相手にする時のベターな戦い方だと思うっと言うより、僕がそうされたら嫌っていうものだけど」

「いえ、とても参考になりました。ありがとうございます」

「それは良かった。ではそろそろ行こうか。皆、生体兵器が襲ってこないとは限らないから慎重に進もう」

「ねぇ、みんな」

「何ですかレヴィ？早く行かなければならないって時に」

「つまらん用だったら許さぬぞ」

「でも」

そう言葉を切ったレヴィは目の前は指差しこう言った

「生体兵器ってあれのことだよね」

レヴィが指差した先には

「ほらさっさと進めよ。これ以上遅かったら動物園にぶちこむぞ」

「いや、俺生体兵器ってさっきから言ってるのに」

「黙れ。次黙らなかったら動物園に行く前に三途の川にぶちこからな」

「すみません。ロストロギアのある場所まで案内しますんでマジで勘弁してください」

「つうか最初は片言はだったじゃねぇかよ」

「すみません、生体兵器だし片言の方がカッコいいかなって思って」
犬型の生体兵器が主を背中に乗せながら　罵倒されている姿があった
「お、みんな揃ってるな。良い案内役連れてきたからロストロギア
が置いてある場所まで一直線だぜ。コイツが俺等を騙さない限りな」
「そんなことする訳ないじゃないですか！」
「それなら良いんだがな」
「「「・・・・・・」」」
ここに居るレヴィ以外の共通の思い、それは
「カッコいいよ主」
「だろー」
「「「（どちらが悪なのか分からない）」」」
ーユウｓｉｄｅー
「で、ここがロストロギアの保管されている部屋で間違いないなポチ」

「あの、だから犬じゃなくて犬型の生体兵器だって「まちがいないよなぁ？ポチィ！！？」はいぃ！！間違いございませんご主人様！！」

「ならよし。さあ行くぞ」

「突撃ー！！」

「すみません。中は危ないと思うのでここで待って居てください」

「はいっ。了解しましたシュテルの姉御！！」

「いや、別に我等には敬語で話さなくてもよいのだぞ」

「お気遣い感謝しますロードの姉御！！」

「・・諦めよう。もう完全に敬語以外で話せなくなってる」

「行くぞレヴィ。特攻だー！！！」

「だーーー！！！」

ズダーーーーン

レヴィの一撃で鉄の扉が派手に吹き飛び、そこから俺とレヴィは突撃した

「一番乗り。やっぱりボクは凄いぞ強いぞカッコいい」

「カッコいいかはともかく、確かにそれらしい箱に入っているな」

ちなみに俺とレヴィ以外は普通に歩いて入って来た。ポチはシュテルが扉の後ろ辺りに避難させてるだろうから気にしない

「これは!?後でドクターに聞かなければ分かりませんが、少なくともこのレリックは11有るようです」

急いで確認してみると、確かにレリックが入っていた箱には?と書かれていた

「その辺りは後でいだろ。今は早く封印することだ。ロード」

「了解した主。出でよ“曇天の書”」

ロードの声と共に曇天の書が手元に現れ、ひとりでにページが開かれていく

「我が望むは永遠の氷河　暗黒の氷柱（アイス・ド・ダーク）」

ロードが杖に魔力を込めていくと地面に氷柱が刺さっていき、その氷柱に当たったレリック?は封印されたのと同じ状態になった

「我にかかればざっとこんなものよ」

「ほう、流石に管理局最強の名は伊達ではないと言う事か」

ロードの台詞と合せるかのようにモニターにオッサンが写りだし、なんか言い出した

「は、博士!?」

「博士?と言うことはこのオッサンがこのポチを作ったのか」

「初めましてになるのかな、ユウ・クロサキ特別捜査官。私の名前は覚えなくても良いさ。覚えてほしいとも思わないからね」

「それで、お前がこの違法施設のトップだな」

「その通り。しかし私が作った自信作も容易く敗れてしまうとは、これは些かへこんでしまうね」

「だれがオッサンのへこんだ姿を見たいんだ。誰得だっつう話だよ」

「その心配はない。今そこの執務官の住んでいる町にとある人間を送ったから退屈しなくて済む」

オッサンが言い終るのと同時に、送った人間の情報が書いてあるであろう資料がモニターに表示された

「ティーダ執務官は知っているでしょう。この男を」

このオッサンのハッタリかと思ったが、本人の表情がドンドン悪くなるのを見ると、どうやら本当に知っているらしい

「では改めて説明しましょう。この男の名前はキーツ・アイヒマン、几帳面な性格で契約外の事は一切行わないプロの殺し屋、そして、そこのティーダ・ランスターと同じガンスリンガーです」

「・・誰を、誰を殺すよう依頼した!!」

「気付いているのでしょう。そう、私が依頼したのは貴方の最愛の妹君、ティアナ・ランスターですよ」

「き、貴様あああぁぁぁ！！！！」

「落ち着けティーダ！冷静になるんだ。まだお前の妹が死んだ訳じゃない」

「あ、ああ。そうだな、済まないディアーチェ」

「ろ、ロードで良い。我は皆にそう呼ばれてるからな。他の名は慣れんのだ。それと、すまないではないだろう？」

「そ、そうだな。わ、いや、ありがとうロード。助かった」

「うむ。気にするな」

一度は感情を露わにしたティーダだったが、ロードの説得でどうにか冷静さを取り戻したようだ

「しかし死んでしまうのも時間の問題。私は貴方たちがどうするか遠くでじっくり観察させてもらいますね」

その言葉を最後にモニターの電源が切れ、研究所全体が赤くなった

「なんでしょう？とてつもなく嫌な予感がします」

「奇遇だなシュテル。我もだ」

「そう？ボクはワクワクするけど」

「「レヴィがそう言うってことは」」

≪時限爆破システムが作動しました。後十分でこの建物は大爆発しま～す。爆発に巻き込まれたい異常者様以外は、さっさと逃げやがってくださ～い≫

「「ああ、私（我）オワタ＼（＾ｏ＾）／」」

お約束の時限爆弾起動を知らせる（明らかに言葉の使い方間違ってる）アナウンスが流れ、巨大モニターに残りタイムが表示された

「ってやってる場合じゃねぇ。さっさとここから逃げるぞ」

「速く行こう。大丈夫だよ。大体の映画では助かるから」

「レヴィ。現実と創作を一緒にしないでください」

「そんなことしてる内にもう三十秒経ってしまったわ。ティーダもさっさと行くぞ」

「ああ。急ごう」

五分後

≪残り五分を切りました～いまだ残っている人は辞世の句を詠み終えましたか？ミッド出身の人は聖王様にお祈りを済ませておいてくださ～い。それ以外の人は一早く脱出してくださ～い。まあ、こんな時間が経ってるのに脱出出来てない人なんていないでしょうけどね　プププ（笑）≫

「このアナウンスマジうっぜぇ！！！」

「大丈夫です主。後何百メートルで出口に着きますから、このアナウンスも後何百メートルの我慢です」

「俺も命一杯飛ばしますんで、絶対にこの爆破にシュテルの姉御たちは巻き込ませんぜ」

シュテルは飛ぶのは大丈夫だが、極度のＡＭＦ（アンチギワォダルド）が発動しているので走るのが苦手なシュテルは、ポチの背中に乗せている

「主よ。前方にポチと同じ生体兵器がウヨウヨ居るぞ。恐らく我々を此処で足止めする気だ」

「こんなとこで時間食ってられるか。各自の砲撃魔法で道をブチ開けろ」

「了解しました。ブラストオォォ」

「ファントム」

「アロン」

「「「ファイアァァ（ブレイザー）（ダイトォォ）！！！」」」

シュテル、ティーダ、ロードの三人が放った砲撃魔法でポチと同種の生体兵器は吹き飛び、そこに開いた出口に飛び込んだ。
そして

≪三・二・一・零。バッハハーイ、皆さん良き来世を。実況アナウンスはウザイことをやらせたら管理世界一のアナウンサー樹目絵丸がお送りしました≫

と最後までウザイ台詞を並べて爆発した

「さて、確かお前の地元はこの辺りにあるんだったな？」

ユウがジェラスを使って映し出した地図に印を付けると、アリスや自分の部下たちに連絡を入れた

「お前らが捜すのは紺のスーツを着た男、名前はキーツ・アイヒマン。見つけ次第俺かアリスに連絡を入れて決してお前等から接触するなよ。後、オレンジの髪をしたツインテールのガキを見つけたら何としてでも保護しろ。何故か？そのガキが男の殺害対象だからだ。良いか！！お前らは弱い。だがな、ガキ一人守れないほど弱くはないはずだ。そうだろ？？？なら行け。行って子供を狙うクズからすら守り切ってこい！！！！！」

その電話越しの声ですら歓声で指示が聞こえないほど彼は慕われているのかとティーダが考えていると、電話が終わったのか少し疲れた顔で話を始めた

「これで大丈夫だろ。少なくともそのアイスマンよりは早くお前の

妹が見つかると思うぜ」

「主、アイスマンではなくアイヒマンです」

「細かいことは良いんだよ。それでティーダ、約束は果たすのか？別にお前の妹が死んだらロードが悲しむだろうから約束なんかなくっても」

ティーダは俺のその誘いをキッパリと断った

「これも運命だったと考えますよ。先代が行った儀式とは言えランスター家の掟ですから」

「全く。やっぱし面倒だよお前らは」

「い、一体どんな会話をしておるのか」

「ろ、ロード。これ完全にストーカーですよ」

「ストーカーではない。仮にストーカーであったとしてもストーカーと言う名の恋の観察者だ」

「それも結局ストーカーじゃない・・って今ストーカーって認めましたよね」

秘密任務だよ○クロちゃん（後書き）

次回はティアナが登場予定

ちなみに樹目絵アナウンサーとは、作者がはまっているゆっくり実況き○ぇまるの事です。赤黒ったらパクリばっかなのね

もう一人のガンスリンガー（前書き）

やっとこさ更新。もう作者の体力はゼロなのよ。ってなわけで後書きで新キャラを出して心機一転頑張ります。なので感想待ってます

もう一人のガンスリンガー

ーティアナｓｉｄｅー

第一次緊急警報を発令します。先程管理局から次元犯罪者がこの近くに逃げ込んだと通報がありました。ミッド在住の皆様は次の指示があるまで近くの施設から出ないでください

「ティナちゃん。これって」

「管理局の第一次緊急警報。少なくてもＢクラス以上の次元犯罪者だと思う」

私の名前はティナア・ランスター。執務官の兄が居ること以外はどこにでも居る普通の子供だと思う。他の友達にはよく大人っぽいって言われるけど。
私の隣に居るのは一番の親友のネロ・ハルフォールちゃん。この子も私と同じく身内に管理局で働く人が居て、それを切欠に話すようになった

「は、犯罪者が！！どどどうしようティアちゃん」

見ての通りこの子は物凄く怖がりで、何時も私を頼ってくる。だから私も怖いけど、ネロに心配させないように冷静な振りをしなくちゃいけないんだ

「大丈夫だよネロ。この辺りにはまだ人が居るから多少は安全だと思う」

ネロを不安にさせない様こうは言ったけど、昔兄さんに聞いた話じゃ多少人がいても構わないって。だから早く近くの建物に逃げないと。

「管理局の人の邪魔になったらいけないから早く建物に避難しようネロ」

「分かった。ティアちゃんはやっぱり大人だよね。こんな時でも落ち着いてるんだもん」

「そんなことないよ。人より感情が顔に出にくいだけ」

私も余り覚えてはいないけど、昔はもっと感情的な子供だったらしい。でも両親が管理局の仕事で死んでしまった時から、兄さんは私に良い暮らしをさせる為って言って執務官になってから殆ど家に帰ってこなくなった。だから、せめて兄さんが帰っている内は、心配かけないようにって考えていたらいつの間にか感情を顔に出さなくなっていたんだ

「私の事は良いから早く避難しよう。早くしないと」

「君たち、早く避難するんだ」

ネロに言う前に私たちに男の人が近づいてきた。
ネロは不安そうな顔が一気に明るくなり、男の人の元に走っていこうとする。でも

「駄目っ、ネロ」

「ど、どうして!?あの人きっと管理局の人だよ」

「昔兄さんから聞いたことがある。犯罪者が人質を捕まえる為にわざと自分の場所をばらした後、管理局の人の振りをして人質にする事件があったって。だから今回もそれかも知れない」

「そっか。やっぱりティアちゃんは凄いや」

「そんな、そう言われても俺は犯罪者じゃないっすよ」

私もさっきああ言ったけど、この人は多分違うと思う。私たちみたいな子供にまで無意識にへっぴり腰になる犯罪者なんてそうそう居ないし、ここまで言われて人質に出来ないと分かって何もしないってことは本当に管理局の人だってことだから

「早く避難してほしいっす。早くしないと」

「犯人、つまり私が来てしまいますからね」

その声に驚きながら後ろを振り替えると、紺のスーツを着た男が立っていた

「キーツ・アイヒマン」

「おや?私の名を知っていると言うことは赤崎の人間ですかね。ですが誰であろうと関係ありません」

紺のスーツを着た男、キーツ・アイヒマンはスーツの中から質量兵器を取り出した。それは偶然にも私が兄から見せてもらった質量兵器のうちの一つ『ベレッタＭ９２ＦＳ』だった

「依頼者には目撃者は速やかに抹殺せよと言われていますので「ＩＳライドインパルス」くっ」

ベレッタの引金を引く前に誰かに抱き抱えられ、一瞬で移動していた

「ＩＳランブルリゾネイター！」

そして私たちが移動すると同時に後方から投げつけられた何かが襲撃者を捲き込み爆発した

「どうだチンク、やったか？」

「いや、ユウ殿があそこまで危険視する相手だ。油断しない方が「なるほど」なっ！！」

彼女が驚いている目線の先には、先ほどと変わらない姿勢で立っている襲撃者『キーツ・アイヒマン』の姿があった

「今の爆発であわよくば私を仕留め、出来なくともこの爆風に乗じてターゲットを逃がそうといった算段なのだろう」

その言葉が図星だったのだろう何とも言えない表情を浮かべつつ、相手の様子を窺いながら作戦を考えていた

「どうするチンク。確かに今ので決めるつもりでは無かったとは言え七割くらいの攻撃だったんだぞ。それで無傷とは、本格的に手詰まり状態だ」

「おちつけトーレ、別に無理をして私たちが奴を倒す必要はない。

私たちの目的はあくまでユウ殿が来るまでの時間稼ぎ。それを忘れるな」

「分かっている。だが、こうまで実力差があるとなると、時間を稼ぐのも骨が折れるぞ」

二人があれこれ考えている中、私は一つの案を思いついた。ネロも今は最初の人が側に居るから巻き込まれる心配はない。しかしそれが成功する確率は一種のギャンブルだ。だが成功させないとあの男に殺されるだけあろう。なら分の悪い賭けでもやるしかない

「二人とも、ちょっと良い？」

ーアイヒマンｓｉｄｅ　ｌ

「ふむ」

いきなりの奇襲には少しばかり驚きましたが、やはりあの爆発で無傷だったのは予想外だったようで先程から動く気配がない。出来ればこの実力差を見て逃走してくれれば楽なのですが。私としても目標の娘を始末する以外あまり殺したくはないのですがね。私はそこら辺の犯罪者とは違い、目標以外の事はしないのがポリシーですから

「ＩＳランブルリゾネイター！」

とようやく動き出しましたね。先の攻撃でこの爆発ではダメージにならないと分かっていながら使う。と言う事は

「この爆風で逃げるつもりか。しかしその手は通じないと言ったはずだ！！」

見ると三人が走りながら逃走を図っているのが見えた

「（あの程度の速度で逃げ切れると思ったのか。だが好都合、銃を持つ相手に背を向けるとは）死ね！」

私は目の前で走っている真ん中の少女“ティアナ・ランスター”に向けて銃を撃った。しかしその銃弾が当たることはなかった

「なっ！！幻術！？ならば本物は」

「ここ」

その声は爆発が起きる前に現れた女、トーレから発せられていた

「最初の爆発で、この攻撃はもう使わないと判断した貴方はこの爆発は攻撃以外の目的で使われたと考えた。まあ逃走する為以外ありえないけど。そして銃を背に逃げている私たちに発砲することは読んでいたの」

「だがなぜその女に変装した！？私が戦力を断つためにその女から撃つ可能性もあっただろう」

「それは無いわ。理由はこの人たちから教えてもらった資料。そこに書いてあったみたいよ、貴方は目的以外の事をしない本物のプロだって」

「！！！そういう事でしたか。私の性分を利用し、貴女以外狙わないと考えた訳ですね」

「当たるかどうかは運だったけど、その運勝負には勝ったみたいね」

「ふっ、確かに一本取られはしましたが、だからなんだというのですか？外したのならもう一度撃てば良いだけの話ですよ」

「確かにその通りね。でも一つ忘れてない？」

そう言われて初めて気が付いた。ターゲットが幻覚で紫髪の女に変装したなら、肝心の本人は一体どこに

「ＩＳライドインパルス！！」

「ちぃ、後ろか！？・・・はっ、まさか」

「気が付いたみたいね。そう、さっきの攻撃で爆風を起こしたのはなにも私の幻術を使うところを隠す為だけじゃない。トーレさんの攻撃を気づかせない為でもあったのよ」

この距離からでは確実に当たってしまう。仕方ない、今回使うつもりはなかったのですがね

ーチンクｓｉｄｅー

「しかし１０の子供があんな作戦を、しかも命がかかってる場面で思いつくとは」

「貴女も人のこと言えない「ギロッ」いえなんでもないです」

全く、姉だって好きで子供体型になってる訳じゃないです。姉のＩＳ“ランブルリゾネイター”は触れた金属を自分のタイミングで爆破できる爆弾にする能力、だから戦闘タイプと言うよりドゥーエの様なスニーキングに向いた戦闘機人。その為相手が最も油断しやすい少女の姿なのだ。

決して、決してドクターの趣味が入っている訳ではない、勘違いしないでくれ！！

「ど、どうしたんですかチンクさん。いきなり怖い顔をして」

「いや、少しトリップしてたようだ。気にしないでくれ」

「はぁ」

それにしてもトーレはいつまであそこに居るつもりだ？

「おいトーレ、早くここから離れるぞ。今頃住民の避難が完了してユウ殿もコチラに来るはずだからな」

……おかしい、トーレがユウ殿の話をしても反応がないなんて。いつもは話が終わる前にＩＳで駆けつけるのに

「ち、チンク」

お、ようやく爆風も晴れてきてトーレの姿も見えた。このスモーク用のスティンガーは確かに逃げるのには最適だが、逃げ切れなかったら今度はコチラが不利になるな。ドクターに頼んで改善して貰わねば。

そう考えていた為、トーレの声に一瞬反応が遅れてしまった

「逃げろチンク！」

私としたことが、初めての戦闘で舞い上がっていたようだ。戦いの基本中の基本を忘れてしまうとは。

戦いは敵を倒したか確認するまでが戦いだと言うことを

「くっ、グァァァ！！」

「チンクさん！？」

「まさか今のタイミングで避けられるとは！？どうやら私と同じく普通の人間ではないようですね。しかし、これまでです。最後に幻術を警戒するのと貴女たちの頑張りを称えて私のガンスリンガーとしての能力を披露しましょう」

そう言うと奴は銃を持った手でお辞儀のポーズを取った。今だ

「あ、ＩＳランブルリゾネイター！！」

片目をさっきの銃弾で負傷しているが、この距離なら外さない

「なにっ！！」

「おっとっと、私が殺られてしまいましたね」

「しかしそれは偽者。本物は私ですよ」

「いえいえ、騙されてはいけません。本物は私です」

「と、見せかけて本物は私です」

私のもう片方の目がイカれていなければ、奴は４人居る様に見えるのだが

「その通り。私のガンスリンガーの能力は『分身』しかし普通の分身ではありません。この分身の私一人一人が他の時間を生きる私ですから、見破ることは不可能でしょう」

これがユウ殿や執務官殿が言っていたガンスリンガーの時に関した能力。正直執務官の力とは違う意味で反則だと思うのですが！どう思いますかティナア？

「ごめんなさいチンクさん。私もガンスリンガーのことは兄さんから聞いたけど、私自身にはまだ力はないの」

でしょうね。だったらあの時の作戦でも時を遅くして銃弾を回避出来たはずだったからな

「さあ」「最後の」「お祈りの」「準備は」「「「「終わりましたか！？」」」」

くっ、万事休すか

「諦めたら試合終了だよ！！」

ってその声とその良く分からない言い回しは

「「レヴィ姉様」」

「「うおおぉぉぉ」」

上から青色の雷が降り注ぎ、分身していた2人のアイヒマンが撃ち抜かれ、消滅した

「あれ、ここは安西先生じゃないの？」

「そのやり取りはまだ子鴉たちには早い」

「そうです。私もようやくその話を読むところなのですから」

「待てシュテル、我もその話を読むところだ。ここは王たる我に譲るべきだ」

「たとえ王の命令でもこればかりは譲れません。この前は『ワムピース』のクローバーが死ぬ時のコミック貸したじゃないですか！今度は私が読む番です」

「その前は『北東の剣』のナオウの最後の刊を貸しただろうが。今回は逆になって我が読む」

「ボクは最近アニメ化が決まった『ホワイト・ロック・シューター』と『贋物語』を見直そうかな」

あの……早く助けてくれませんか？私もトーレもかなり重傷なのですが

もう一人のガンスリンガー（後書き）

後書きコーナー

ユウ
「前書きではああ言ってたけど新キャラなんていないぞ」

赤黒？
「ふふふ。この更新しない間、ただサボっていたわけじゃない。この小説の人気が出る方法を考えていたんだ」

ユウ
「なるほど、それで？」

赤黒？
「私の小説で他の作者と違う点があるとすれば、前書きと後書きでよくゆっくり実況の話をする事」

ユウ
「話をしだしたのは結構最近だけどな。ってまさか」

赤黒？
「そのまさかだ。そんなにゆっくりの事が好きなら」

ビリビリビリ

ゆっくり霊夢
「私が出ればいいだけの話よ」

ユウ
「えええええええ！！なんで顔の皮を剥がしただけで体全体がなくなるんだ！？」

ゆっくり霊夢
「細けぇことは良いんだよ。そんな訳で次回からこの後書きはゆっくりが主役よ。小説にまで呼ばれるなんてゆっくりったらモテモテね」

ユウ
「もういいや」

ゆっくり霊夢
「それじゃあ次回もゆっくり待って居てね」

ユウ
「最後まで仕切るのかよ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8230s/

魔法少女リリカルなのは 黒衣の死神

2011年12月22日00時45分発行